

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第58輯

水 込 遺 跡

主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線建設に伴う発掘調査報告書

本文編

1 9 9 0

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第58輯

水 込 遺 跡

主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線建設に伴う発掘調査報告書

本文編

1 9 9 0

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会



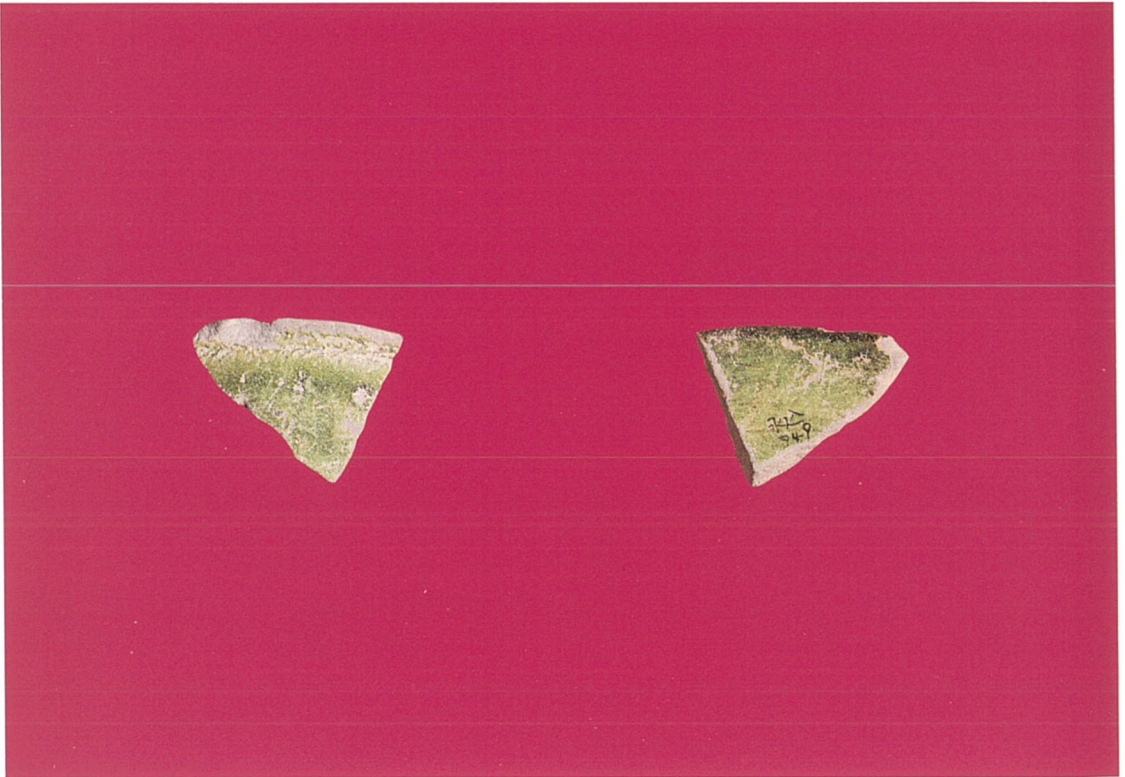
遺跡遠景斜め写真（南から）



A地区北半部斜め写真（南から）



3034—O S 遺物出土状態



3033— a —O S 出土緑釉坏



3033—O S 出土遺物



3034—O S 出土遺物



3034-O S 出土墨書土器 (土師器)



3034-O S 出土墨書土器 (須恵器)

序 文

泉州南部にある岸和田市は南北に長い市域をもち、その南端は和泉山地となって和歌山県との府県境をなしています。和泉山地から流れ出た河川は大阪湾に注いでいますが、その一つの牛滝川が形成した谷は通称山直谷と呼ばれ、条里地割や古い郷名などが残っていて、豊かな歴史を現代に伝えている地域として注目されてきました。

この山直谷、関西国際空港関連事業として主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線が建設されることになり、それに先立つ発掘調査を当協会が実施するはこびとなりました。

調査の結果は本書に述べるとおりですが、奈良時代を中心とした集落跡が発見され、山直谷の歴史を知るうえできわめて重要な資料が得られたものと思われます。

本調査を実施するにあたり、大阪府教育委員会、大阪府土木部岸和田土木事務所、岸和田市教育委員会、地元自治会をはじめとする関係者各位には多くのご支援とご協力を賜り、深く感謝いたしております。今後とも当協会の事業に変らぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成2年3月

財団法人大阪府埋蔵文化財協会

理事長 仁賀奈祐吉

例 言

1. 本書は主要地方道岸和田牛滝山貝塚線（以下、通称に従い府道磯之上山直線と呼称）建設に先立つ、岸和田市包近町に所在する水込遺跡^{みずし}の発掘調査報告書である。
2. 調査は大阪府土木部岸和田土木事務所の委託を受けて、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに財団法人大阪府埋蔵文化財協会が行った。
3. 調査は1988年6月1日から10月30日にかけて行った。また、1989年11月6日から11月30日にかけて行った擁壁調査（調査担当；山本彰・橋本裕行）の報告も併わせて収録している。
4. 調査面積は4122㎡である。
5. 調査は、山本彰・佐々木好直・橋本裕行・虎間英喜が行った。
6. 本書の作成および図面・遺物整理作業は、調査担当者の協議のもと、主に橋本がその業務にあたった。また、本文の執筆は、各担当者が分担してあたり、文責は各文末に記した。ただし、文末に記名の無いものの文責は全て橋本にある。
7. 調査の実施にあたっては、大阪府教育委員会をはじめとして、大阪府岸和田土木事務所、岸和田市教育委員会、地元山直中^{やまだいなか}・包近地区^{かねちか}をはじめ関係各位の方々から格別のご配慮を頂いた。
8. 柱根・燃えさしの材質鑑定は、光谷拓実氏（奈良国立文化財研究所）に依頼した。
9. 調査および報告書作成においては、大阪府教育委員会文化財保護課および当協会職員諸氏の他に以下の方々より御教示、御指導頂いた。記して感謝の意を表したい。
足利健亮・石野博信・小澤 毅・亀田 博・北野隆亮・工楽善通・粉川昭平・近藤利由・佐藤敏也・菅谷文則・巽淳一郎・千田剛道・土橋理子・中井一夫・橋本義則・林部 均・光谷拓実・毛利光俊彦・和田 萃・（50音順・敬称略）
10. 本書の編集は、橋本が行った。

凡 例

1. 本遺跡の調査では、国土座標系第Ⅵ系を基準にして、当協会が独自に設定した地区割方法（当協会作成の「発掘調査規程」に基づく）を使用している。その詳細については、本書第Ⅲ章第1節を参照されたい。なお、各遺構平面図には、この座標値をX軸とY軸についてメートル単位で表記した。
2. 本書に掲載した各遺構平面図の方位は、すべて国土座標の北をNとして示した。なお水込遺跡周辺での磁北は、座標北より西へ6度30分の方角にあたる。
3. 本書で用いたレベル高は、すべて東京湾標準潮位（T. P. 値）である。
4. 調査時に付けた遺構番号（仮遺構番号）は、整理作業の過程ですべて変更した。そこで、整理作業の過程で付けた新番号（正遺構番号）と調査時に付けた旧番号との対照表を掲載した。
5. 遺構の種別は、当協会作成の「発掘調査規程」に準じ、以下の略号で表現した。建物OB、竪穴住居OD、土壇（土坑）OO、柱穴OP、河川（自然流路）OR、溝OS、その他・不明OX。
6. 各遺構の名称は、凡例5に準拠して以下のように表した。例：3033—OS。
なお、正遺構番号は、OD：0001～、OB：1001～、OO：2001～、OS：3001～、OR：4001～、OX：5001～、OP：6001～となっている。
7. 遺物実測図の縮尺は、原則として土器が1/4、それ以外は任意である。
8. 遺構実測図の縮尺は、原則として竪穴住居が1/60、掘立柱建物が1/80であるが、それ以外は任意である。
9. 土器の編年は以下の文献を参考にした。
奈良国立文化財研究所 1976 「平城宮発掘調査報告」Ⅶ 『奈良国立文化財研究所学報』第26冊
奈良国立文化財研究所 1978 「飛鳥・藤原宮発掘調査報告」Ⅱ 『奈良国立文化財研究所学報』第31冊
中村 浩 1978 「陶邑」Ⅲ 『大阪府文化財調査報告書』第30輯（大阪府教育委員会）
10. 器種名は、奈良国立文化財研究所 1983 「平城宮発掘調査報告」Ⅺ 『奈良国立文化財研究所学報』第40冊 別表4・5を参考にした。
11. 本書での土壌色と土器の色調は、小川正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖 7版 1987年』を基準として記載した。

本文目次

序	文				
例	言				
凡	例				
第 I 章	遺跡の位置と環境	1		
第 1 節	遺跡の位置と地理的環境	1		
第 2 節	歴史的環境	5		
第 II 章	調査に至る経過と概要	11		
第 1 節	調査に至る経過	11		
第 2 節	調査概要	12		
第 3 節	調査日誌抄	14		
第 III 章	調査方法	17		
第 1 節	調査方法	17		
第 2 節	基本層序	19		
第 IV 章	調査成果	23		
第 1 節	竪穴住居 (O D)	23		
概要		23		
0001-O D	23	0004-O D	26
0002-O D	24	0005-O D	29
0003-O D	26			
第 2 節	掘立柱建物 (O B)	30		
概要	30	1008-O B	39
1001-O B	33	1009-O B	40
1002-O B	33	1010-O B	41
1003-O B	34	1011-O B	41
1004-O B	36	1012-O B	43
1005-O B	36	1013-O B	44
1006-O B	38	1014-O B	45
1007-O B	38	1015-O B	46

1016-O B	47	1026-O B	60
1017-O B	49	1027-O B	63
1018-O B	50	1028-O B	63
1019-O B	50	1029-O B	65
1020-O B	52	1030-O B	65
1021-O B	53	1031-O B	66
1022-O B	54	1032-O B	67
1023-O B	56	1033-O B	69
1024-O B	56	1034-O B	69
1025-O B	58		
第3節 土坑 (OO)			71
概要	71	2012-O O	78
2002-O O	73	2013-O O	82
2003-O O	74	2015-O O	83
2006-O O	74	2017-O O	85
2008-O O	75	2022-O O	86
2009-O O	75	2023-O O	87
2010-O O	77	2024-O O	88
2011-O O	77		
第4節 溝状遺構 (OS)			89
概要	89	3032-O S	103
3006-O S	91	3033-O S	103
3007-O S	92	3034-O S	131
3021-O S	93	3038-O S	149
3022-O S	95	3040-O S	149
3027-O S	95	3046-O S	150
3030-O S	102	3052-O S	151
3031-O S	102	3053-O S	151
第5節 流路 (OR)			152
概要	152	4001-O R	152

4002-OR	154		
第6節 不明遺構 (OX)			155
概要	155	5068-OX	170
5041-OX	156	5078-OX	171
5049-OX	167	5083-OX	171
5050-OX	169	5101-OX	173
5051-OX	170	5107-OX	173
第7節 Pit (OP)			174
概要	174	7038-OP	175
6519-OP	175	7139-OP	175
6538-OP	175	7159-OP	175
6726-OP	175	7228-OP	175
6954-OP	175	7239-OP	177
6956-OP	175	7305-OP	178
7036-OP	175		
第8節 遺構外出土遺物			193
概要			193
包含層出土遺物			193
A地区包含層出土遺物の分布状況			201
第9節 製塩土器			212
製塩土器の出土状況の検討			212
製塩土器の観察			213
製塩土器の数量処理			213
第10節 植物遺存体			218
植物遺存体検出の経緯			218
フローテーションの結果			218
植物遺存体の品種同定			218
イネ以外の植物遺体について			220
炭化米 (イネ) について			220
第V章 考察			225

第1節 水込遺跡の集落の変遷について	225
第2節 山直郷における水込遺跡の位置付け	231
第3節 出土土器について	234
第4節 5041-OXの性格について	238
第VI章 まとめ	241
1. 調査によって明らかにされたこと	241
2. 今後の課題	241

挿 図 目 次

第1図 遺跡周辺地質図 (S=1/100000)	2
第2図 水込遺跡位置図 (S=1/50000)	3
第3図 水込遺跡及び二俣池北遺跡4・5区調査区配置図 (S=1/5000)	4
第4図 和泉郡郷別寺院・式内社・主な遺跡分布図 (S=1/100000)	7
第5図 調査区地区割り図	18
第6図 基本層序模式図	19
第7図 調査区西壁土層柱状模式図	20
第8図 A地区南壁土層断面図 (S=1/80)	21~22
第9図 B地区北壁土層断面図 (S=1/80)	21~22
第10図 0001-OD平面図・土層断面図 (S=1/60)	25
第11図 0002・0003-OD, 2012-OO平面図 (S=1/60)	25
第12図 0003-OD出土遺物実測図 (S=1/4)	25
第13図 0002・0003-OD, 2012-OO土層断面図 (S=1/60)	27
第14図 0004-OD平面図・土層断面図 (S=1/60)	28
第15図 0005-OD平面図・土層断面図 (S=1/60)	28
第16図 1001-OB平面図・土層断面図 (S=1/80)	32
第17図 1002-OB平面図・土層断面図 (S=1/80)	33
第18図 1003-OB平面図・土層断面図 (S=1/80)	34
第19図 1004-OB平面図・土層断面図 (S=1/80)	35
第20図 1005-OB平面図・土層断面図 (S=1/80)	37

第 21 図	1006—O B 平面図・土層断面図 (S=1/80)	38
第 22 図	1007—O B 平面図・土層断面図 (S=1/80)	39
第 23 図	1008—O B 平面図・土層断面図 (S=1/80)	39
第 24 図	1009—O B 平面図・土層断面図 (S=1/80)	40
第 25 図	1010—O B 平面図・土層断面図 (S=1/80)	41
第 26 図	1011—O B 平面図・土層断面図 (S=1/80)	42
第 27 図	1012—O B 平面図・土層断面図 (S=1/80)	43
第 28 図	1013—O B 平面図・土層断面図 (S=1/80)	44
第 29 図	1014—O B 平面図・土層断面図 (S=1/80)	45
第 30 図	1015—O B 平面図・土層断面図 (S=1/80)	46
第 31 図	1016—O B 平面図・土層断面図 (S=1/80)	47
第 32 図	6141—O P 出土柱根実測図 (S=1/4)	48
第 33 図	1017—O B 平面図・土層断面図 (S=1/80)	49
第 34 図	1018—O B 平面図・土層断面図 (S=1/80)	50
第 35 図	1019—O B 平面図・土層断面図 (S=1/80)	51
第 36 図	1019—O B 出土遺物実測図 (S=1/4)	51
第 37 図	1020—O B 平面図・土層断面図 (S=1/80)	52
第 38 図	1021—O B 平面図・土層断面図 (S=1/80)	54
第 39 図	1022—O B 平面図・土層断面図 (S=1/80)	55
第 40 図	1022—O B 出土遺物実測図 (S=1/4)	55
第 41 図	1023—O B 平面図・土層断面図 (S=1/80)	57
第 42 図	1024—O B 平面図・土層断面図 (S=1/80)	58
第 43 図	1025—O B 平面図・土層断面図 (S=1/80)	59
第 44 図	1026—O B 平面図・土層断面図 (S=1/80)	60
第 45 図	1026—O B 出土遺物実測図 (S=1/4)	60
第 46 図	1027—O B 平面図・土層断面図 (S=1/80)	61
第 47 図	1028—O B 平面図・土層断面図 (S=1/80)	62
第 48 図	1028—O B 出土遺物実測図 (S=1/4)	62
第 49 図	1029—O B 平面図・土層断面図 (S=1/80)	64
第 50 図	1030—O B 平面図・土層断面図 (S=1/80)	65

第 51 图	1031-OB 平面图・土層断面图 (S=1/80)	66
第 52 图	1032-OB 平面图・土層断面图 (S=1/80)	67
第 53 图	1032-OB 出土遺物実测图 (S=1/4)	67
第 54 图	1033-OB 平面图・土層断面图 (S=1/80)	68
第 55 图	1033-OB 出土遺物実测图 (S=1/4)	68
第 56 图	1034-OB 平面图・土層断面图 (S=1/80)	70
第 57 图	2002・2003-OO 平面图・土層断面图 (S=1/30)	73
第 58 图	2002・2003-OO 出土遺物実测图 (S=1/4)	73
第 59 图	2006-OO 平面图・断面图 (S=1/20)	74
第 60 图	2006-OO 出土遺物実测图 (S=1/4)	74
第 61 图	2008-OO 出土遺物実测图 (S=1/4)	74
第 62 图	2008-OO 平面图・土層断面图 (S=1/60)	75
第 63 图	2009-OO・3008-OS 平面图・断面图 (S=1/60)	76
第 64 图	2009-OO 出土遺物実测图 (S=1/4)	76
第 65 图	2010・2011-OO, 6519-OP 平面图・断面图 (S=1/60)	78
第 66 图	2010・2011-OO, 6519-OP 出土遺物実测图 (S=1/4)	78
第 67 图	2012-OO 平面图・土層断面图・遺物出土状态图 (S=1/20)	79
第 68 图	2012-OO 出土遺物実测图 1 (S=1/4)	79
第 69 图	2012-OO 出土遺物実测图 2 (S=1/4)	80
第 70 图	2013-OO 平面图・土層断面图・遺物出土状态图 (S=1/20)	81
第 71 图	2013-OO 出土遺物実测图 (S=1/4)	81
第 72 图	2015-OO 出土遺物実测图 1 (S=1/4)	81
第 73 图	2015-OO 平面图・土層断面图 (S=1/20)	82
第 74 图	2015-OO 出土遺物実测图 2 (S=1/4)	83
第 75 图	2017-OO 平面图 (S=1/20)・土層断面图 (S=1/40)	84
第 76 图	2017-OO 出土遺物実测图 (S=1/4)	84
第 77 图	2022-OO 平面图・土層断面图・遺物出土状态图 (S=1/20)	86
第 78 图	2022-OO 出土遺物実测图 (S=1/4)	86
第 79 图	2023-OO 平面图・断面图 (S=1/40)	87
第 80 图	2023-OO 出土遺物実测图 (S=1/4)	87

第 81 図	2024-O O 平面図・断面図 (S = 1/40), 出土遺物実測図 (S = 1/4) ……	88
第 82 図	3006-O S 平面図 (S = 1/120) ……	91
第 83 図	3006-O S 土層断面図 (S = 1/60) ……	91
第 84 図	3006-O S 出土遺物実測図 (S = 1/4) ……	91
第 85 図	3007-O S 平面図・断面図 (S = 1/60) ……	92
第 86 図	3007-O S 出土遺物実測図 (S = 1/4) ……	92
第 87 図	3021-O S 平面図・土層断面図 (S = 1/60) ……	93
第 88 図	3021-O S 出土遺物実測図 (S = 1/4) ……	94
第 89 図	3022-O S 出土石鏃実測図 (S = 2/3) ……	95
第 90 図	3022-O S 遺物出土状態図・土層断面図 (S = 1/30) ……	96
第 91 図	3022-O S 出土遺物実測図 (S = 1/4・1/6) ……	97
第 92 図	3027-O S 遺物出土状態図位置図 (S = 1/200) ……	98
第 93 図	3027-a-O S 遺物出土状態図・土層断面図 (S = 1/20) ……	98
第 94 図	3027-b-O S 遺物出土状態図・土層断面図 (S = 1/20) ……	99
第 95 図	3027-c-O S 遺物出土状態図 (S = 1/20) ……	99
第 96 図	3027-c-O S 土層断面図 (S = 1/20) ……	99
第 97 図	3027-O S 出土遺物実測図 1 (S = 1/6・1/4) ……	100
第 98 図	3027-O S 出土遺物実測図 2 (S = 1/6) ……	101
第 99 図	3030-O S 平面図・断面図 (S = 1/40) ……	102
第 100 図	3030・3031・3032-O S 出土遺物実測図 (S = 1/4) ……	102
第 101 図	3033-O S・4001-O R 平面図 (S = 1/750) ……	104
第 102 図	3033-O S 土層断面図 1 (S = 1/40) ……	105
第 103 図	3033-O S 土層断面図 2 (S = 1/80) ……	105
第 104 図	3033-O S 遺物出土状態図 (S = 1/20)・断面図 (S = 1/40) ……	106
第 105 図	3033-O S 出土遺物実測図 1 (S = 1/4) ……	108
第 106 図	3033-O S 出土遺物実測図 2 (S = 1/4) ……	109
第 107 図	3033-O S 出土遺物実測図 3 (S = 1/4・1/3) ……	110
第 108 図	3033-O S 出土遺物実測図 4 (S = 1/4) ……	111
第 109 図	3033-O S 出土遺物実測図 5 (S = 1/4) ……	112
第 110 図	3033-O S 出土遺物実測図 6 (S = 1/4・2/3) ……	113

第 111 図	3033-O S 出土遺物実測図 7 (S = 1/4 · 1/3)	114
第 112 図	3033-O S 出土遺物実測図 8 (S = 1/4)	115
第 113 図	3033-O S 出土遺物実測図 9 (S = 1/4)	116
第 114 図	3033-O S 出土遺物実測図 10 (S = 1/4)	117
第 115 図	3033-O S 出土遺物実測図 11 (S = 1/4)	118
第 116 図	3033-O S 出土遺物実測図 12 (S = 2/3 · 1/3 · 1/4)	119
第 117 図	3033-O S 出土遺物実測図 13 (S = 1/4)	120
第 118 図	3033-O S 出土遺物実測図 14 (S = 1/4)	121
第 119 図	3033-O S 出土遺物実測図 15 (S = 1/4)	122
第 120 図	3033-O S 出土遺物実測図 16 (S = 1/4)	123
第 121 図	3033-O S 出土遺物実測図 17 (S = 1/4)	124
第 122 図	3033-O S 出土遺物実測図 18 (S = 1/4)	125
第 123 図	3033-O S 出土遺物実測図 19 (S = 1/4)	126
第 124 図	3033-O S 出土遺物実測図 20 (S = 1/3)	127
第 125 図	3033-O S 出土遺物実測図 21 (S = 1/1 · 1/4)	128
第 126 図	3033-O S 出土遺物実測図 22 (S = 1/4)	129
第 127 図	3033-O S 出土遺物実測図 23 (S = 1/4)	130
第 128 図	3034-O S 遺物出土状態図 (S = 1/30) · 断面図 (S = 1/120)	132
第 129 図	3034-O S 土層断面図 (1989年度擁壁調査東側東壁面, S = 1/40)	133
第 130 図	3034-O S 出土遺物実測図 1 (S = 1/4)	134
第 131 図	3034-O S 出土遺物実測図 2 (S = 1/4)	135
第 132 図	3034-O S 出土遺物実測図 3 (S = 1/4)	136
第 133 図	3034-O S 出土遺物実測図 4 (S = 1/4)	137
第 134 図	3034-O S 出土遺物実測図 5 (S = 1/4)	138
第 135 図	3034-O S 出土遺物実測図 6 (S = 1/4)	139
第 136 図	3034-O S 出土遺物実測図 7 (S = 1/4)	140
第 137 図	3034-O S 出土遺物実測図 8 (S = 1/4)	141
第 138 図	3034-O S 出土遺物実測図 9 (S = 1/4)	142
第 139 図	3034-O S 出土遺物実測図 10 (S = 1/4)	143
第 140 図	3034-O S 出土遺物実測図 11 (S = 1/4)	144

第 141 図	3034-O S 出土遺物実測図12 (S=1/4)	145
第 142 図	3034-O S 出土遺物実測図13 (S=1/1)	146
第 143 図	3034-O S 出土遺物実測図14 (S=1/1)	147
第 144 図	3034-O S 出土遺物実測図15 (S=1/4)	148
第 145 図	各溝出土遺物実測図 (S=1/4)	150
第 146 図	4001・4002-OR 出土遺物実測図 (S=1/4)	153
第 147 図	5041-O X 平面図 (S=1/300)	157
第 148 図	5041-O X 出土遺物実測図 1 (S=1/4)	159
第 149 図	5041-O X 出土遺物実測図 2 (S=1/4・1/6)	160
第 150 図	5041-O X 出土遺物実測図 3 (S=1/3・1/4・1/2)	161
第 151 図	5041-O X 出土遺物実測図 4 (S=1/4)	162
第 152 図	5041-O X 出土遺物実測図 5 (S=1/4)	163
第 153 図	5041-O X 出土遺物実測図 6 (S=1/4)	164
第 154 図	5041-O X 出土遺物実測図 7 (S=1/2・1/3・1/4・3/4)	165
第 155 図	5041-O X 出土遺物実測図 8 (S=1/6・1/4)	166
第 156 図	5049・5050-O X 平面図 (S=1/60)	168
第 157 図	5049・5050・5068-O X 出土遺物実測図 (S=1/4・2/3)	168
第 158 図	5050-O X 出土墨書土器実測図 (S=1/1)	169
第 159 図	5051-O X 平面図・断面図 (S=1/60)	170
第 160 図	5051-O X 出土遺物実測図 (S=1/4)	170
第 161 図	5078-O X 平面図・断面図 (S=1/20)	171
第 162 図	5078・5083-O X 出土遺物実測図 (S=1/4)	171
第 163 図	5107-O X 平面図・断面図 (S=1/20)	172
第 164 図	5101-O X 平面図・断面図 (S=1/20)	172
第 165 図	5101・5107-O X 出土遺物実測図 (S=1/4)	173
第 166 図	各OP 出土遺物実測図 1 (S=1/4)	176
第 167 図	各OP 出土遺物実測図 2 (S=1/4)	177
第 168 図	上層包含層出土遺物実測図 1 (S=1/4)	194
第 169 図	上層包含層出土遺物実測図 2 (S=1/4)	195
第 170 図	下層包含層出土遺物実測図 1 (S=1/4)	196

第 171 図	下層包含層出土遺物実測図 2・遺構外出土遺物実測図 1 (S=1/4) ……	197
第 172 図	遺構外出土遺物実測図 2 (S=1/3) ……	198
第 173 図	包含層出土遺物数量分布図 1 ……	202
第 174 図	包含層出土遺物数量分布図 2 ……	203
第 175 図	包含層出土遺物数量分布図 3 ……	204
第 176 図	包含層出土遺物数量分布図 4 ……	205
第 177 図	包含層出土遺物数量分布図 5 ……	206
第 178 図	包含層出土遺物数量分布図 6 ……	207
第 179 図	包含層出土遺物数量分布図 7 ……	208
第 180 図	包含層出土遺物数量分布図 8 ……	209
第 181 図	包含層出土遺物数量分布図 9 ……	210
第 182 図	5041-O X・上層包含層出土製塩土器実測図 (S=1/2) ……	213
第 183 図	3034-O S・5041-O X 周辺出土製塩土器グリット別重量分布図 (S=1/200) ……………	217
第 184 図	5041-O X 土壌サンプリング・グリット配置図 (S=1/400) ……	218
第 185 図	5041-O X 出土炭化米粒長のヒストグラム ……	221
第 186 図	5041-O X 出土炭化米粒の粒種の変異 ……	223
第 187 図	集落変遷図 1 (S=1/1500) ……	227~228
第 188 図	集落変遷図 2 (S=1/1500) ……	229~230
第 189 図	掘立柱建物方位図 ……	231
第 190 図	牛滝川流域の古代集落遺跡 (S=1/25000) ……	232
第 191 図	推定山直郷域における古代集落変遷模式図 ……	233
第 192 図	須恵器・土師器の坏・皿経高指数 ……	236
第 193 図	3033-O S・3034-O S・5041-O X の出土土器器種別・器形別占有率 ……………	237

付 図 目 次

付図 1 水込遺跡 B 地区遺構平面図 (S=1/200)

付図 2 水込遺跡 A 地区遺構平面図 (S=1/200)

付図3 水込・二俣池北遺跡遺構平面図 (S = 1 / 500)

表 目 次

第 1 表	和泉郡郷別氏族・寺院・式内社・主な遺跡分布表	6
第 2 表	竪穴住居一覧表	23
第 3 表	0002-OD 出土遺物計量表	24
第 4 表	0003-OD 出土遺物計量表	24
第 5 表	掘立柱建物一覧表	30・31
第 6 表	1003-OB 出土遺物計量表	34
第 7 表	1004-OB 出土遺物計量表	35
第 8 表	1008-OB 出土遺物計量表	39
第 9 表	1009-OB 出土遺物計量表	40
第 10 表	1011-OB 出土遺物計量表	42
第 11 表	1012-OB 出土遺物計量表	43
第 12 表	1013-OB 出土遺物計量表	44
第 13 表	1014-OB 出土遺物計量表	45
第 14 表	1015-OB 出土遺物計量表	46
第 15 表	1019-OB 出土遺物計量表	51
第 16 表	1020-OB 出土遺物計量表	52
第 17 表	1021-OB 出土遺物計量表	54
第 18 表	1022-OB 出土遺物計量表	55
第 19 表	1023-OB 出土遺物計量表	57
第 20 表	1024-OB 出土遺物計量表	59
第 21 表	1025-OB 出土遺物計量表	59
第 22 表	1026-OB 出土遺物計量表	60
第 23 表	1027-OB 出土遺物計量表	61
第 24 表	1028-OB 出土遺物計量表	62
第 25 表	1029-OB 出土遺物計量表	64
第 26 表	1031-OB 出土遺物計量表	66

第 27 表	1032-OB 出土遺物計量表	67
第 28 表	1033-OB 出土遺物計量表	69
第 29 表	1034-OB 出土遺物計量表	70
第 30 表	土坑一覽表	71・72
第 31 表	2002-OO 出土遺物計量表	73
第 32 表	2003-OO 出土遺物計量表	73
第 33 表	2009-OO 出土遺物計量表	76
第 34 表	2010-OO 出土遺物計量表	78
第 35 表	2011-OO 出土遺物計量表	78
第 36 表	6519-OP 出土遺物計量表	78
第 37 表	2012-OO 出土遺物計量表	79
第 38 表	2013-OO 出土遺物計量表	81
第 39 表	2015-OO 出土遺物計量表	81
第 40 表	2017-OO 出土遺物計量表	85
第 41 表	2022-OO 出土遺物計量表	86
第 42 表	2023-OO 出土遺物計量表	87
第 43 表	2024-OO 出土遺物計量表	88
第 44 表	溝一覽表	90
第 45 表	3006-OS 出土遺物計量表	91
第 46 表	3007-OS 出土遺物計量表	92
第 47 表	3021-OS 出土遺物計量表	94
第 48 表	3022-OS 出土遺物計量表	96
第 49 表	3027-OS 出土遺物計量表	99
第 50 表	3030-OS 出土遺物計量表	102
第 51 表	3032-OS 出土遺物計量表	102
第 52 表	3033-OS 出土遺物計量表 (1988年度調査)	104
第 53 表	3033-OS 出土遺物計量表 (1989年度調査)	104
第 54 表	3034-OS 出土遺物計量表 (1988年度調査)	131
第 55 表	3034-OS 出土遺物計量表 (1989年度調査)	131
第 56 表	各溝出土遺物計量表	150

第 57 表	4001-OR 出土遺物計量表	154
第 58 表	4002-OR 出土遺物計量表	154
第 59 表	不明遺構一覧表	155・156
第 60 表	5041-OX 出土遺物計量表	158
第 61 表	5050-OX 出土遺物計量表	168
第 62 表	5049-OX 出土遺物計量表	169
第 63 表	5051-OX 出土遺物計量表	169
第 64 表	5083-OX 出土遺物計量表	169
第 65 表	5068-OX 出土遺物計量表	170
第 66 表	5078-OX 出土遺物計量表	170
第 67 表	5101-OX 出土遺物計量表	170
第 68 表	OP 一覧表	178~192
第 69 表	包含層出土遺物計量表	199
第 70 表	包含層等出土輸入陶磁器計量表	200
第 71 表	包含層等出土瓦計量表	200
第 72 表	製塩土器計量表	214~216
第 73 表	5041-OX 出土植物遺存体一覧表	219
第 74 表	5041-OX 出土炭化米の粒形とその大きさ	222
第 75 表	5041-OX 出土炭化米の粒の構成	222
第 76 表	5041-OX 出土炭化米計測値一覧表	224
第 77 表	0003-OD 出土遺物観察表	245
第 78 表	1019-OB 出土遺物観察表	245
第 79 表	1022-OB 出土遺物観察表	245
第 80 表	1026-OB 出土遺物観察表	245
第 81 表	1028-OB 出土遺物観察表	245
第 82 表	1032-OB 出土遺物観察表	245
第 83 表	1033-OB 出土遺物観察表	245・246
第 84 表	2002-OO 出土遺物観察表	246
第 85 表	2003-OO 出土遺物観察表	246
第 86 表	2006-OO 出土遺物観察表	246

第 87 表	2008—〇〇出土遺物觀察表	246
第 88 表	2009—〇〇出土遺物觀察表	246
第 89 表	2010—〇〇出土遺物觀察表	246
第 90 表	2011—〇〇出土遺物觀察表	247
第 91 表	2012—〇〇出土遺物觀察表	247
第 92 表	2013—〇〇出土遺物觀察表	247
第 93 表	2015—〇〇出土遺物觀察表	247
第 94 表	2017—〇〇出土遺物觀察表	247
第 95 表	2022—〇〇出土遺物觀察表	247・248
第 96 表	2023—〇〇出土遺物觀察表	248
第 97 表	2024—〇〇出土遺物觀察表	248
第 98 表	3006—〇 S 出土遺物觀察表	248
第 99 表	3007—〇 S 出土遺物觀察表	248
第 100 表	3021—〇 S 出土遺物觀察表	249
第 101 表	3022—〇 S 出土遺物觀察表	249
第 102 表	3027—〇 S 出土遺物觀察表	250
第 103 表	3030—〇 S 出土遺物觀察表	250
第 104 表	3031—〇 S 出土遺物觀察表	251
第 105 表	3032—〇 S 出土遺物觀察表	251
第 106 表	3033—〇 S 出土遺物觀察表	252~266
第 107 表	3034—〇 S 出土遺物觀察表	267~280
第 108 表	3038—〇 S 出土遺物觀察表	280
第 109 表	3040—〇 S 出土遺物觀察表	280
第 110 表	3046—〇 S 出土遺物觀察表	280
第 111 表	3052—〇 S 出土遺物觀察表	280
第 112 表	3053—〇 S 出土遺物觀察表	280
第 113 表	4001—〇 R 出土遺物觀察表	281
第 114 表	4002—〇 R 出土遺物觀察表	281
第 115 表	5041—〇 X 出土遺物觀察表	282~288
第 116 表	5049—〇 X 出土遺物觀察表	289

第 117 表	5050-O X 出土遺物觀察表	289
第 118 表	5051-O X 出土遺物觀察表	289
第 119 表	5068-O X 出土遺物觀察表	289
第 120 表	5078-O X 出土遺物觀察表	289
第 121 表	5083-O X 出土遺物觀察表	289
第 122 表	5101-O X 出土遺物觀察表	289
第 123 表	5107-O X 出土遺物觀察表	289
第 124 表	6519-O P 出土遺物觀察表	290
第 125 表	6538-O P 出土遺物觀察表	290
第 126 表	6726-O P 出土遺物觀察表	290
第 127 表	6954-O P 出土遺物觀察表	290
第 128 表	6956-O P 出土遺物觀察表	290
第 129 表	7036-O P 出土遺物觀察表	290
第 130 表	7038-O P 出土遺物觀察表	291
第 131 表	7139-O P 出土遺物觀察表	291
第 132 表	7159-O P 出土遺物觀察表	291
第 133 表	7228-O P 出土遺物觀察表	291
第 134 表	7239-O P 出土遺物觀察表	291
第 135 表	7305-O P 出土遺物觀察表	291
第 136 表	上層包含層出土遺物觀察表	292~294
第 137 表	下層包含層出土遺物觀察表	295・296
第 138 表	遺構外出土遺物觀察表	296

図 版 目 次

卷頭図版 1 航空写真

上段：遺跡遠景斜め写真（南から）

下段：A地区北半部斜め写真（南から）

卷頭図版 2 遺物出土状態・出土遺物

上段：3034-O S 遺物出土状態

下段：3033-a-O S 出土緑釉坏

卷頭図版 3 出土遺物

上段：3033-O S 出土遺物

下段：3034-O S 出土遺物

卷頭図版 4 出土遺物

上段：3034－O S 出土墨書土器（土師器）

下段：3034－O S 出土墨書土器（須恵器）

写 真 目 次

写真1 岸和田市郷土史教室

写真2 現地説明会風景

写真3 現地説明会風景

写真4 A地区水没（北から）

写真5 A地区調査風景

写真6 3034－O S 出土遺物実測風景

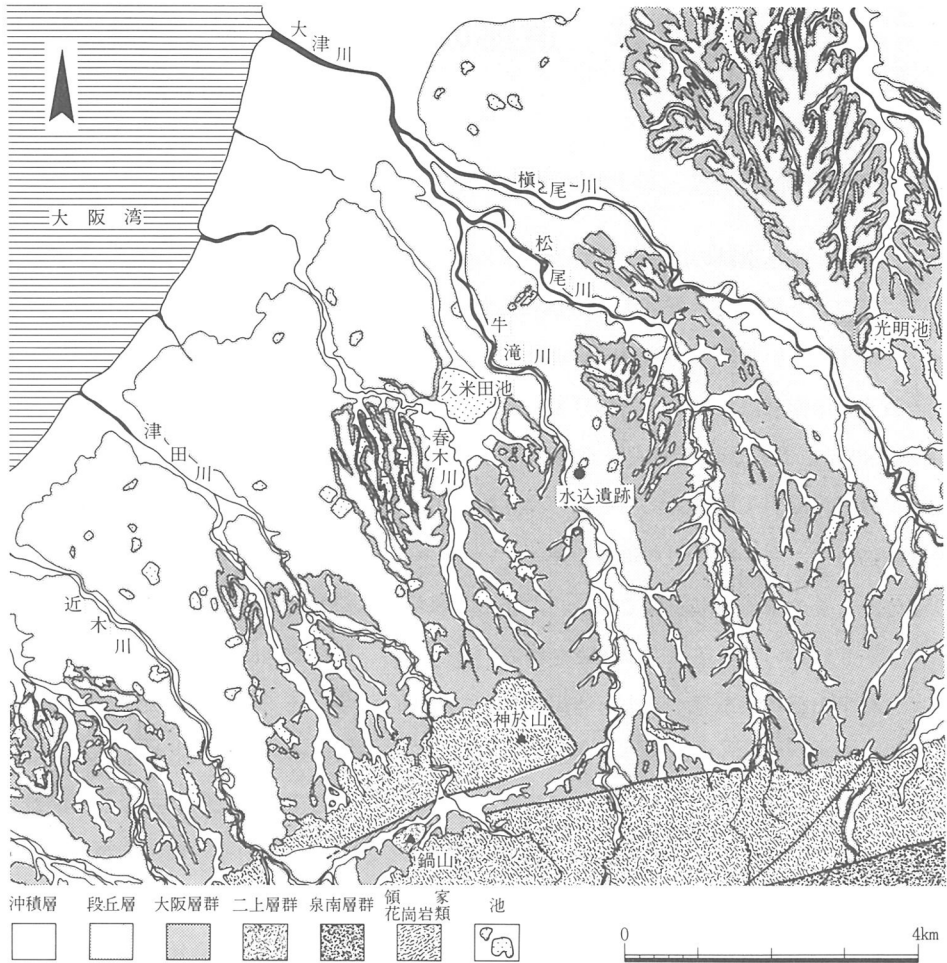
第 I 章 遺跡の位置と環境

第 1 節 遺跡の位置と地理的環境

地形と地質 水込遺跡の所在する大阪府岸和田市域の地形は、南部の和泉山脈とそこから北西に延びる丘陵地帯、丘陵の縁辺部に広がる台地（河岸段丘・海岸段丘）、それと海岸部の沖積平野という四つの地形区分単位からなる（第 1 図）。

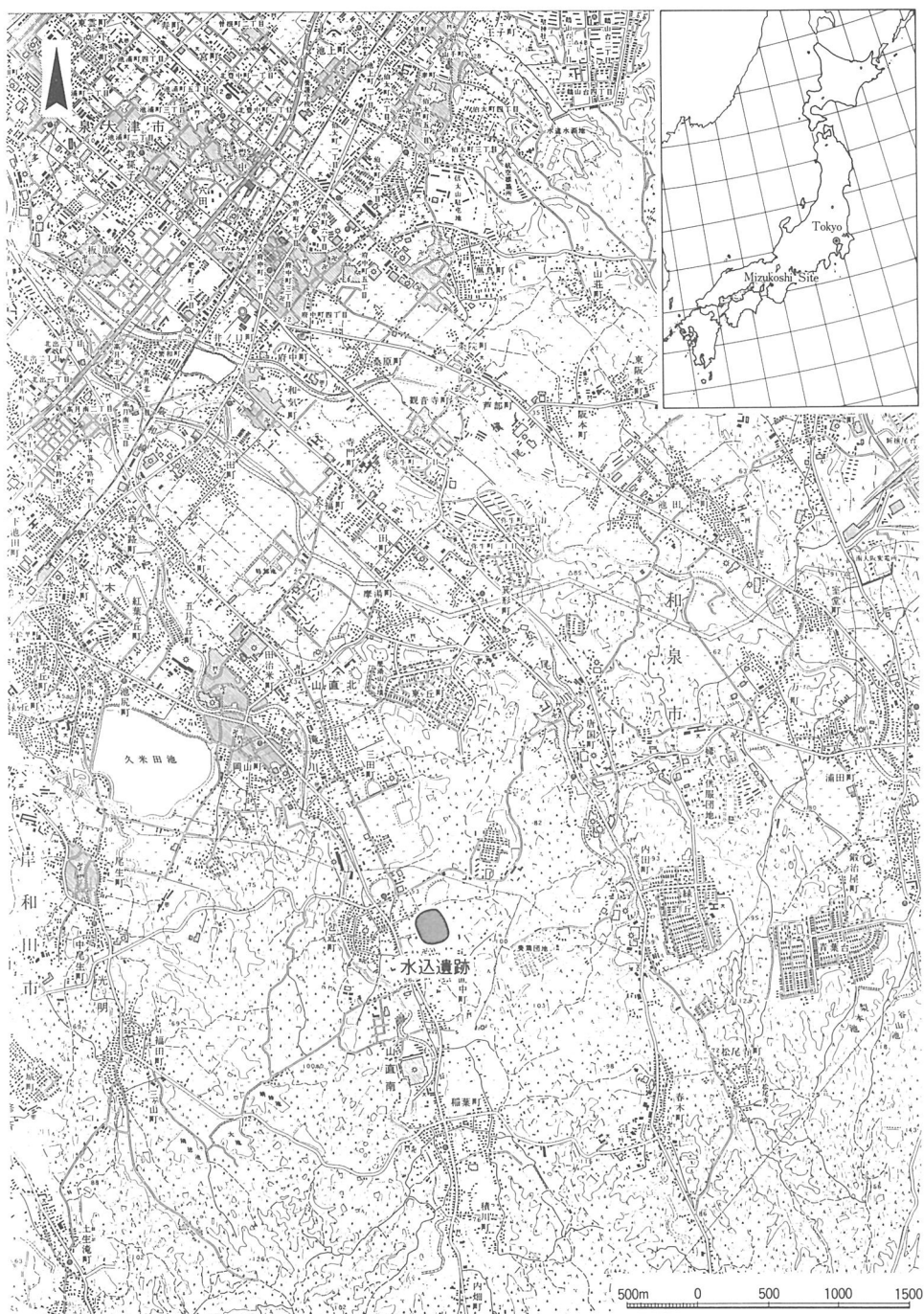
大阪平野の南部に東西に横たわり大阪府と和歌山県との境をなす和泉山脈は、最高点でも標高900mに満たない低い山脈である。この山脈の主部を形成する地層は和泉層群と呼ばれ、礫岩・砂岩・泥岩およびそれらの互層によって成り立っている。和泉山脈の南北断面は南に急で、北に緩やかな傾斜を描いている。しかし、北に緩やかな傾斜をもつとは言うものの、その傾斜は階段状であり、山脈の北縁部には領家花崗岩類・泉南層群によって幅約4～5kmのいわゆる前山が形成されている。このいわゆる前山の北側に広がる丘陵地帯は、和泉山脈に源を発する中小河川によって開析されている。丘陵は大阪層群と呼ばれる未だに固結していない礫・砂・粘土およびそれらの互層によって形成されている。このため、丘陵は浸食を受けやすく小支谷が発達している。そのような支谷を利用して灌漑用の溜め池が多数作られ、谷筋の水田に水が供給されている。丘陵の縁辺部に広がる平坦な台地は河岸段丘、もしくは海岸段丘である。段丘は現河床面からの比高によって、高位段丘面（比高30～50m）・中位段丘面（比高10～20m）・低位段丘面（比高10m以下）に区分されている。岸和田市域では春木川の南側に中位段丘面が、北側に低位段丘面が発達している。これらの段丘面は大阪湾に向かって緩やかに傾斜している。上記のような様々な地形を中小の河川が開析することによって河口付近に形成される沖積平野はあまり発達していないが、僅かに槇尾川と牛滝川とが合流して大津川となる泉大津市域に比較的大きな沖積平野が形成されている。

遺跡の位置と立地 大阪府岸和田市^{かねあか}包近町に所在する水込遺跡は、牛滝川右岸の低位段丘面上に立地し、およそ北緯34°26′37″・東経135°26′24″に位置する。遺跡の東側には山直丘陵が、西側には福田丘陵がそれぞれ南北に延びており、それらの丘陵に挟まれた低位段丘面は北から南へ緩やかに傾斜している。因みに現地表面における調査区南端の標高は56.2

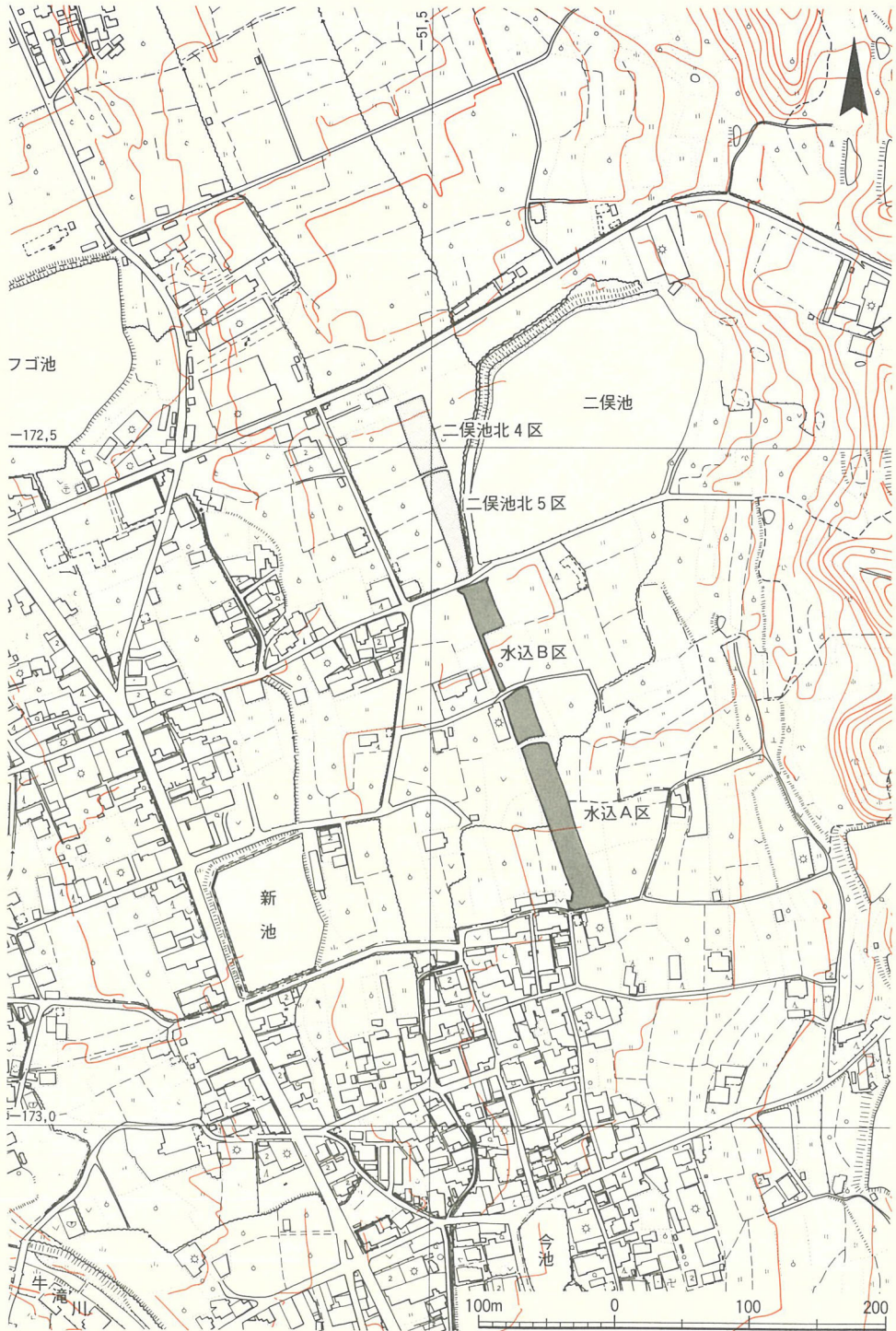


第1図 遺跡周辺地質図¹⁾ (S=1/100000)

m、北端の標高は53.7mである。遺跡周辺の地形を詳細に観察すると、平坦な段丘面にも微妙な凹凸が認められ、それを巧みに利用して灌漑用の溜め池が作られている。遺跡の北に隣接する二俣池等はその典型で、池の周辺に埋積谷が存在するらしい²⁾。この埋積谷は調査区の東側の水田下まで延びている可能性があり、遺跡の東限を画しているものと思われる。また、小縮尺の地形図では分かりにくいのだが、調査区の西側約150m付近には比高2～5m程度の南北に走る低い崖線が存在する³⁾。したがって、この崖線が遺跡の西限を画しているものと思われる(第3図)。



第2図 水込遺跡位置図 (S=1/50000)



第3図 水込遺跡及び二俣池北遺跡4・5区調査区配置図 (S=1/5000)

第2節 歴史的環境

水込遺跡の調査成果に基づいて、本節では岸和田市域とその周辺地域の7・8世紀を中心とした歴史的環境について述べることにする。

和泉国の成立 水込遺跡の所在する岸和田市包近町は、古代和泉国和泉郡山直郷に属する。和泉国は大鳥・和泉・日根の3郡よりなるが、その成立時期は畿内の他の4郡に比べ大幅に遅れる。『続日本紀』によれば、和泉国は霊亀2年(716)3月癸卯(27日)河内国より和泉・日根両郡を割いて珍努宮に供することを嚆矢として、天平寶字元年(757)5月乙卯(8日)の勅によって成立をみる。この間、霊亀2年(716)4月甲子(19日)には、河内国の大鳥・和泉・日根の3郡を割いて和泉監が設置されるが、天平12年(740)8月甲戌(20日)に和泉監は廃され河内国に併合されるという経過をたどっている。

「チヌの宮」そもそも、和泉の地域は古来「チヌ」と呼ばれていたらしく、『古事記』神武段にその地名起源説話が載せられている。『古事記』では「血沼」、『日本書紀』では「茅渟」、『続日本紀』では「珍努」の字をあてている。前述のように、この「チヌ」の地が和泉国として分立する契機は、ここに「チヌの宮」が置かれたことによるらしい。『日本書紀』の允恭天皇8年2月の項に、天皇が衣通郎姫のために河内の茅渟に宮室を建てたという記事がある。これが「チヌの宮」の初見である。允恭天皇以後歴代の天皇の中で「チヌの宮(和泉宮・和泉離宮)」への行幸記事が最も多いのは元正天皇で、和泉監の設置時期と重なる。この「チヌの宮(和泉宮・和泉離宮)」の所在地について、古くは日根郷に属する泉佐野市上之郷中村の地が有力な候補地とされてきた。しかし、「茅渟の宮」を従来どおり泉佐野市域に、また、「和泉宮・和泉離宮」を和泉郡内の和泉市府中町周辺に求める説や、両者とも和泉市域を候補地とする説などの所説があり、未だに所在地は明らかではない。

和泉郡 『和名類聚抄』によると、和泉郡には信太(しのだ)・上泉(かみいずみ)・下泉(しもついで)・軽部(かるべ)・坂本・池田・山直(やまたえ)・八木・掃守(かにもり)・木嶋(きのしま)の10郷が存在したという。また、『倭名類聚抄 外篇 日本地理志料』によれば、上記以外に横山・安幕(ありまか)の2郷を追記している。これらの範囲は、現在の行政区画で言うところの和泉市・泉大津市・泉北郡忠岡町・岸和田市・貝塚市にあたる。郡内には和泉国府が置かれたが、その位置は和泉市府中町の泉井上神社を中心とする五町四方の地域と推定されている。また、国庁の位置は国府推定範囲の東北辺中央

第I章 遺跡の位置と環境

の御館山付近と考えられている。しかし、郡衙の位置については全く手掛りがない。なお、『続日本後紀』によれば、承和6年(839)5月辛巳(3日)に池田郷内の安楽寺をもって国分寺となし講師1人・僧10人を置いているので、和泉国成立時には国分寺は新設されなかったようだ。

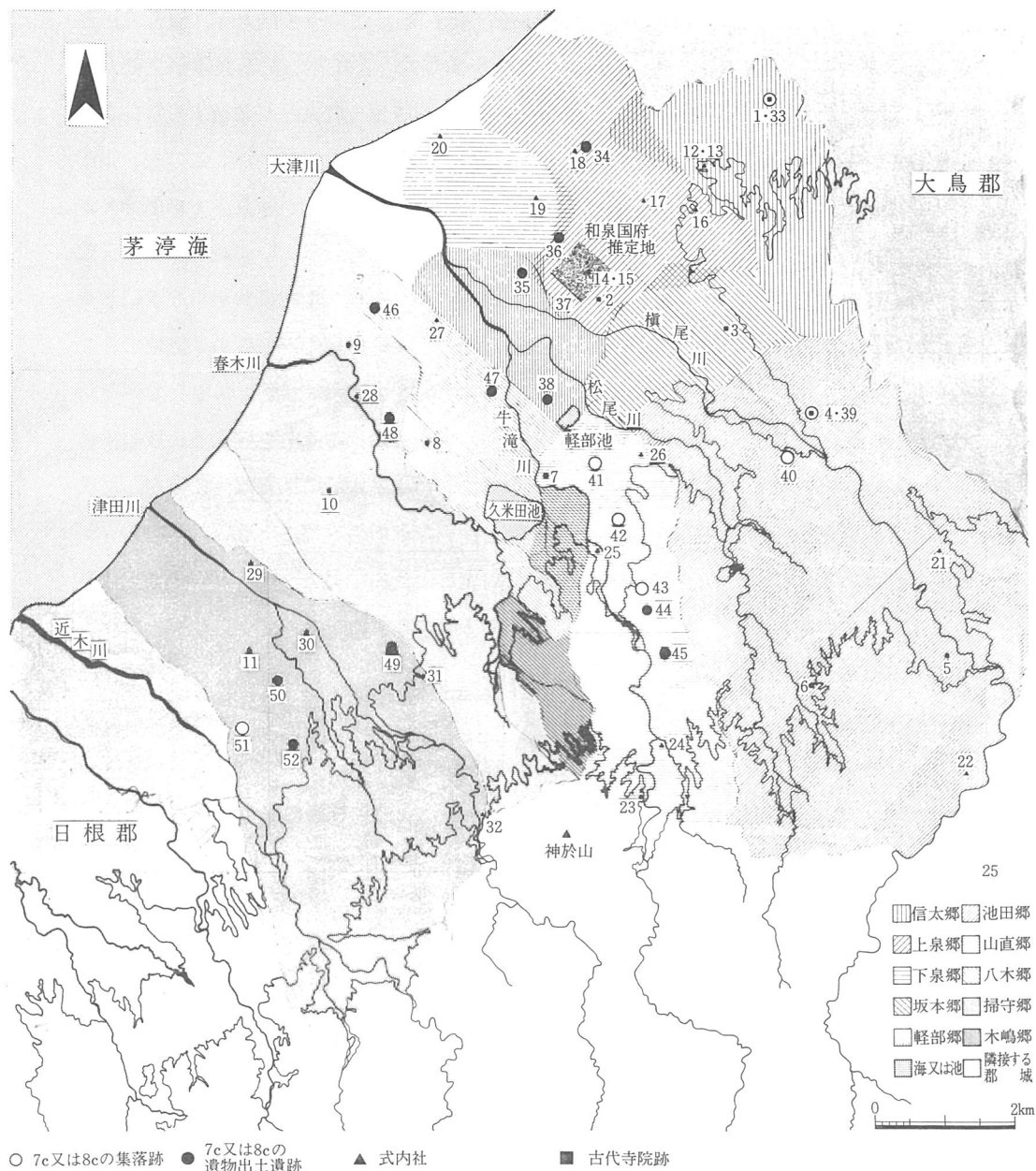
山直郷 古代氏族の山直氏の本拠地と考えられる。享保19年(1734)に脱稿し、享保21年(1736)に刊行された『和泉志』によると、山直郷の郷域は積川・稲葉・中村・包近・三田・摩湯・多治米・新在家の八邑である。これを現存する地名と照合すると、牛滝川が刻んだ狭長な谷筋とほぼ一致する。郷内には古代寺院の一つである田治米廃寺が存在する他、山直・積川・楠元・淡路という式内社が存在する。『日本霊異記』には和泉国内の説話が7例ほど掲載されているが、その内の『中巻 第十』の「常鳥卵煮食以現得悪死報縁」の説話中に、『下痛脚(しもあなし)村に住むある男が「国司」と称する男に連れられて山直の里に至り、そこで麦畑に押し入る』というくだりがある。この「山直の里」が山直郷にあたる考えられ、文献における郷名の初見とされている。

和泉郡内の古代寺院と氏族 『新撰姓氏録』によれば、和泉郡内には25氏族の名が見える。

第1表 和泉郡郷別氏族・寺院・式内社・主な遺跡分布表⁰⁾

郷	氏 族	寺 院	式 内 社	主 な 遺 跡
信 太 郷	信太首・取石造	①信太寺	⑫聖 ⑬旧府	⑳観音寺
上 泉 郷	珍県主・曾根連・伯太造・伯太首神人・物部二田造	②和泉寺	⑭和泉 ⑮泉井上 ⑯丸笠 ⑰伯太 ⑱曾根	㉑池上 ㉒板原 ㉓古池北 ㉔和泉府中遺跡群
下 泉 郷	穴師神社・我孫公		⑲泉穴師 ㉕粟	
軽 部 郷	軽部・和気公			㉖小田
坂 本 郷	坂本臣・坂本朝臣・韓国連	③坂本寺		
池 田 郷	池田首・和田首・池辺直	④池田寺 ⑤安楽寺 ⑥松尾寺	㉗穂椋 ㉘男及字刀	㉙池田寺 ㉚万町北
山 直 郷	山直	⑦田治米廃寺	㉛山直 ㉜積川 ㉝楠本 ㉞淡路	㉟「山直北・三田」 ㊱「三田・上フジ」 ㊲「二俣池北・水込」 ㊳黒石 ㊴芝ノ垣外
八 木 郷	県犬養・布師	⑧小松里廃寺	㉟夜凝	㊵吉井一ノ坪 ㊶西大路
掃 守 郷	掃守首・掃守田首・秦忌寸	⑨春木廃寺 ⑩別所廃寺	㊷兵主	㊸柴ノ池
木 嶋 郷	安幕首・秦忌寸	⑪秦廃寺	㊹阿里莫 ㊺波多 ㊻矢代寸 ㊼意賀美	㊽畑 ㊾海岸寺山 ㊿清児 ㉑二ツ池

(*表の番号は第4図の番号と対応する。)



1. 信太寺 2. 和泉寺 3. 坂本寺 4. 池田寺 5. 安楽寺 6. 松尾寺 7. 田治米廃寺 8. 小松里廃寺 9. 春木廃寺
 10. 別所廃寺 11. 秦廃寺 12. 聖神社 13. 旧府神社 14. 和泉神社 15. 泉井上神社 16. 丸笠神社 17. 博多神社
 18. 曾根神社 19. 泉穴師神社 20. 粟神社 21. 穂椋神社 22. 男乃字刀神社 23. 山直神社 24. 積川神社 25. 楠本神社
 26. 淡路神社 27. 夜凝神社 28. 兵主神社 29. 阿里莫神社 30. 波多神社 31. 矢代寸神社 32. 意賀美神社 33. 観音寺遺跡
 34. 池上・曾根遺跡 35. 板原遺跡 36. 古池北遺跡 37. 和泉府中遺跡群 38. 小田遺跡 39. 池田寺遺跡 40. 万町北遺跡
 41. 「山直北・三田」遺跡 42. 「三田・上フジ」遺跡 43. 「二俣池北・水込」遺跡 44. 黒石遺跡 45. 芝ノ垣外遺跡
 46. 吉井ノ坪遺跡 47. 西大路遺跡 48. 柴ノ池遺跡 49. 畑遺跡 50. 海岸寺山遺跡 51. 清児遺跡 52. ニツ池遺跡

第4図 和泉郡郷別寺院・式内社・主な遺跡分布図⁵⁾ (S=1/100000)

また、郡内には11寺の古代寺院が知られている（第1表）。このうち信太寺（観音寺）と坂本寺（禅寂寺）からは、かつて藤沢一夫が「坂本寺式」と呼称した素弁蓮華文軒丸瓦（第I B型式軒丸瓦）が出土しており、この瓦が大和軽寺出土軒丸瓦と共通する特長を有していることから、両寺の創建時期の上限は7世紀後葉と考えられている。この他、山田寺式系の軒丸瓦が池田寺（明王院跡）等から、川原寺式系の軒丸瓦が和泉寺・松尾寺・安楽寺等から、また、紀寺式系の軒丸瓦が秦廃寺等より出土しており、いずれも創建の上限は7世紀後葉と考えられる。それ以外の寺院についても、概ね7世紀後葉から8世紀前葉までの間には創建されたものと思われる。ところで、坂本郷は坂本臣一族の本拠地で、この一族からは壬申の乱（672年）の際大海人皇子方で奮戦した坂本臣財を輩出している。郷内に存在する坂本寺は、信太寺・池田寺とともに令制における郷名を冠する氏族の手によって建立された氏寺と考えられる。これら以外のものも基本的には各郷内に存在した氏族の氏寺と考えられ、現状では下泉郷・軽部郷を除いた郡内の8郷に1ないし3の氏寺が確認されている。これらの古代寺院の中には、前述のように中央の寺院と瓦当紋様を共有するものが多数存在する。したがって、これらの寺院の建立にあたって中央政権・氏族・寺院等が何らかの形で関与していたことが窺える。

和泉郡内の式内社 『延喜式神名帳』によれば、和泉郡内には式内社が21社存在する。このうち和泉穴師・聖・積川の3社は和泉五大社に数えられている（他は大鳥・日根の2社）。天平4年（732）の早魃の際、聖武天皇がこの五大社と泉井上神社に奉幣して雨を祈願したという伝承があり（『続日本紀』天平4年7月丙午の記事に準拠するものか）、泉井上・和泉穴師・聖・積川の4社は少なくとも8世紀前半には存在したらしい。その他社伝等によって8世紀代に存在していたと考えられるものに、和泉・博多（伯太）・曾根・粟・穂椋・阿里莫・意賀美の7社がある。また、これら21社のうち旧府・和泉・粟の3社は原位置から移動している可能性が極めて高い。なお、郡内には21社もの式内社がありながら、軽部郷・坂本郷には式内社が一つも存在しない。

和泉郡内の開発に関する記事 第1節で述べたように、和泉郡内には多数の灌漑用の溜め池が存在するが、それらの中には古代の当該地域の開発に関連して作られたものも少なからず存在するらしい。行基が開削したという伝承をもつ久米田池は、その最も代表的なものである。中世に流布した古縁起によれば、神亀2年（725）の春にこの池の建設に着手し、天平10年（738）秋に完成したという。また、『行基年譜』には「久米多池溝」という記載があり、灌漑用水路の掘削も行われたらしい。行基の事績を史実としてどこまで評価

できるのか難しいが、天平年間に存在した可能性が高い池が和泉郡内にもう一つ存在する。天平19年（747）に法隆寺が僧綱所に提出した『法隆寺伽藍縁起并流記資財牒』の中に、法隆寺が「河内国」和泉郡軽郷に池一塘を所有していたという記載がある。この軽郷は軽部郷のことであり、久米田池の北約1 kmに存在する軽部池をこの池に比定する説がある。因みに、『法隆寺伽藍縁起并流記資財牒』によれば、法隆寺は和泉郡内に前述の池一塘の他に水田45町9段・藪地2段を所有していたという。

和泉郡内の7・8世紀の遺跡 現在、7世紀代の集落跡である程度様相の分かるものに、和泉市域の池田寺遺跡・万町北遺跡、岸和田市域の「三田・上フジ遺跡」、「二俣池北・水込遺跡」の4遺跡がある。「三田・上フジ遺跡」は、7世紀中葉までに廃絶するようであるが、他の3遺跡は8世紀代まで継続して集落を営んでいる。この他、8世紀代の集落として和泉市域の観音寺遺跡、岸和田市域の「山直北・三田遺跡」、貝塚市域の清児遺跡をあげることができる。また、当該期の建物以外の遺構が検出されている遺跡や、遺構は検出されていないものの遺物が出土している遺跡として、和泉市域の池上遺跡・板原遺跡・古池遺跡・和泉府中遺跡群・小田遺跡、岸和田市域の吉井一ノ坪遺跡・栄ノ池遺跡・西大路遺跡・芝ノ垣外遺跡・畑遺跡・黒石遺跡、貝塚市域の海岸寺山遺跡・二ツ池遺跡などがある。

府道磯之上山直線建設に伴う事前調査の成果に基づけば、山直郷内には「山直北・三田遺跡」、「三田・上フジ遺跡」、「二俣池北・水込遺跡」という古代集落が存在する⁶⁾。牛滝川右岸に存在するこれらの集落は、約1 kmの距離をおいてほぼ等間隔に北から順に並んでいる。道路幅のみの調査のため集落の全容は明らかではないが、「山直北・三田遺跡」は8・9世紀、「三田・上フジ遺跡」は6・7世紀、「二俣池北・水込遺跡」は7・8世紀を中心とする集落のようである。したがって、時期が重なりつつも中心となる時期が微妙に異なるため、「三田・上フジ遺跡」→「二俣池北・水込遺跡」→「山直北・三田遺跡」という集落の中心時期の変遷を想定することができる。

榎尾川流域の池田郷内では、川を挟んで右岸に池田寺遺跡、左岸に万町北遺跡が対峙する形で存在するが、前者は7～9世紀、後者は6・7世紀を中心とする集落のようで山直郷の集落の変遷と少なからぬ共通性が認められる。

【註】

- 1) 第 1 図は『岸和田市史』第 1 巻の付図 1 を参考にして作成した。
- 2) 調査区を A・B の 2 地区に分割する東西に走る用水路の水が西から東へ流れていること、また、後述する 7 世紀代の灌漑用水路と考えられる 3033-b-O S が北東に向かって流れていることなどが、埋積谷推定の根拠である。
- 3) つまり、遺跡の立地する段丘面は牛滝川が形成した古い段階の河岸段丘面で、崖線以西の面は新しく形成された河岸段丘面と解釈される。
- 4) 第 1 表は広瀬和雄 1982 文献 P 34 第 3 表をもとにして作成した。
- 5) 第 4 図の郷域は『和泉志』の記載をもとに作成したもので、あくまでも目安にすぎない。
- 6) 「山直北・三田遺跡」、「三田・上フジ遺跡」、「二俣池北・水込遺跡」は調査成果に基づけば同一集落の可能性が高いので、本書では以後もこのように記述する。

【参考文献】

- 池辺 彌 1981 『和名類聚抄郡郷里驛名考證』（吉川弘文館）
石田茂作 1936 『飛鳥時代寺院址の研究』
遠藤嘉基・春日和男校注 1967 「日本靈異記」『日本古典文学大系』70（岩波書店）
岡本武司 1989 「池田寺遺跡」『財大阪府埋蔵文化財協会調査報告書』第 43 輯
小倉 勝 1985 『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要』Ⅳ（和泉丘陵内遺跡調査会）
岸和田市史編さん委員会 1976 「史料編」Ⅰ『岸和田市史』第 6 巻（岸和田市）
岸和田市史編さん委員会 1979 「自然・考古編」『岸和田市史』第 1 巻（岸和田市）
京都大学文学部国語学国文学研究室編 1966 『諸本集成 倭名類聚抄 外編 日本地理資料』（臨川書店）
倉野憲司校注 1958 「古事記」『日本古典文学大系』1（岩波書店）
黒板勝美・他編 1972 「続日本後紀」『新訂増補 国史大系』（吉川弘文館）
黒板勝美・他編 1974 「続日本紀」前・後編『新訂増補 国史大系』（吉川弘文館）
駒井正明 1987 「芝ノ垣外遺跡」『財大阪府埋蔵文化財協会調査報告書』第 8 輯
小山田宏一 1988 「清見遺跡」『財大阪府埋蔵文化財協会調査報告書』第 31 輯
坂本太郎・他校注 1967 「日本書紀」上・下『日本古典文学大系』67・68（岩波書店）
式内社研究会編 1977 『式内社調査報告』第五巻（皇学館大学出版部）
白石耕治・乾 哲也 1989 『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要』Ⅷ（和泉丘陵内遺跡調査会）
白石耕治・乾 哲也 1990 『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要』Ⅸ（和泉丘陵内遺跡調査会）
武内雅人・駒井正明 1988 「山直中遺跡」『財大阪府埋蔵文化財協会調査報告書』第 22 輯
豊岡卓之編 1988 「山ノ内遺跡 B 地区・山直北遺跡発掘調査報告書」『財大阪府埋蔵文化財協会調査報告書』第 24 輯
灰掛 薫・野田芳正 1980 『府中遺跡発掘調査概要』Ⅳ（和泉市教育委員会）
灰掛 薫・森 茂・白石耕治 1987 『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要』Ⅵ（和泉丘陵内遺跡調査会）
灰掛 薫・乾 哲也 1988 『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要』Ⅶ（和泉丘陵内遺跡調査会）
橋本高明他 1988 「西大路遺跡」『財大阪府埋蔵文化財協会調査報告書』第 23 輯
広瀬和雄 1982 『観音寺遺跡発掘調査報告書』（大阪府教育委員会）
広瀬和雄 1986 「中世への胎動」『岩波講座 日本考古学』6（岩波書店）
広瀬和雄・仮屋喜一郎 1987 『海会寺』（泉南市教育委員会）
藤沢一夫 1941 「摂河泉出土古瓦の研究」『考古学評論』第三輯（東京考古学会）
平凡社地方資料センター編 1986 「大阪府の地名」Ⅱ『日本歴史地名大系』第 28 巻（平凡社）
法隆寺昭と資財帳編纂所編 1983 『法隆寺史料集成』一（ワコー美術出版株式会社）
森 茂 1984 『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要』Ⅲ（和泉丘陵内遺跡調査会）
森 茂・白石耕治 1986 『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要』Ⅴ（和泉丘陵内遺跡調査会）
森井貞雄・虎間英喜 1988 「山ノ内遺跡」『財大阪府埋蔵文化財協会調査報告書』第 34 輯
渡辺昌宏・小山田宏一・宮崎泰史 1987 「三田遺跡」『財大阪府埋蔵文化財協会調査報告書』第 15 輯
渡辺昌宏・宮崎泰史・佐々木好直・小澤 毅 虎間英喜 1989 「二俣池北遺跡・上フジ遺跡」『財大阪府埋蔵文化財協会調査報告書』第 45 輯

第II章 調査に至る経過と概要

第1節 調査に至る経過

水込遺跡の発掘調査の契機となった都市計画道路磯之上山直線は、近畿自動車道と和歌山線と大阪湾岸線を結ぶ主要道路で、関西新空港関連の事業としての位置付けがなされている。しかし、路線内には周知の遺跡として箕土路遺跡をはじめとして西大路遺跡・今木廃寺・軽部池西遺跡・山直北遺跡が存在するとともに、さらに周辺に遺跡が存在する可能性が高く路線内の遺跡の取り扱いが問題となった。

このため大阪府教育委員会と大阪府土木部は協議を行い、土木部に対して路線内の現状と遺跡の分布を確認するためにまず分布調査を実施した上で、再び埋蔵文化財の取り扱いについて協議するよう申し入れた。

これに基づく分布調査は、1983（昭和58）年10月から11月にかけて大阪府教育委員会によって実施されたが、その基本方針は岸和田市箕土路町から同積川町までの全長約6 kmにわたって、路線を含め東西約200mの幅を対象として踏査および遺物の表面採集を目的とするとともに、地形や字名の調査もあわせて行うというものであった。分布調査の結果、今回報告する水込遺跡をはじめとして、山ノ内遺跡・三田遺跡・上フジ遺跡・二俣池北遺跡・黒石遺跡・山直中遺跡・芝ノ垣外遺跡・土井ノ木遺跡・中之社遺跡・宮の後遺跡の11カ所の遺跡が新たに確認され、所定の手続きを経て新発見の遺跡として周知されるに至った¹⁾。

この結果をもとに、大阪府教育委員会は再び大阪府土木部と協議を行い、都市計画道路磯之上山直線路線予定地内は全線にわたって試掘調査を実施した上で、それぞれの遺跡について取り扱いをあらためて協議するという方針が確立された。

水込遺跡では上記の方針をふまえて、1987（昭和62）年度に財団法人大阪府埋蔵文化財協会によって試掘調査がなされた。試掘調査の目的は、包含層および遺構の有無と遺構面の深度を確認することであったが、当初の予測どおり良好な状態で包含層・遺構・遺物が確認されたため全面発掘調査が必要との結論に達し、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が現地調査を行うこととなった。

（山本 彰）

註1) 大阪府教育委員会 1985 『三田遺跡試掘調査概要』

第2節 調査概要

府道磯之上山直線建設に伴う水込遺跡の調査は、1988（昭和63）年6月1日から10月26日にかけて実施された。また、引き続き翌1989（平成元）年11月6日から30日にかけて磯之上山直線本線両端部の擁壁建設に伴う事前調査が行われた。

当初の調査予定範囲は、二俣池の南を東西に走る道路から山直中の集落の北側を東西に走る里道までの間、南北約250m・東西約20m、面積約4655㎡であった。しかし、調査対象地北半部の蜜柑畑（約500㎡）の買収交渉が難行したため、この部分は調査対象地から除外された。また、調査区を東西に走る里道・水路下も未調査地区となったため、実際の調査対象面積は約4122㎡であった。

調査予定地のほぼ中央を横切る水路を境として調査区を二つに分け、水路より南側をA地区、北側をB地区として調査に入った。まず、A地区の南側より機械掘削によって表土を除去したのち、人力によって遺物包含層を掘削した。第3節で述べるように、包含層は基本的には2層（上層＝第2層、下層＝第3層）に分かれるが、各グリットにおいてその層位ごとに遺物を取り上げるように心掛けた。排土はB地区と二俣池西側の府道建設予定地内に仮置きした。

調査区最南端部の上層上面において南北に走る素掘溝を検出したが、遺存状態が悪いせいか、これが検出される範囲はきわめて限られていた。一応1/100のメモ図を作成したが、本書での報告は割愛する。

調査区が広いため調査区北側の包含層掘削と南側の遺構検出作業を平行させながら調査を進めた。その過程で調査区を南北に縦走する3033-O Sの存在が明らかになり、ベルトコンベアーの配置等の制約からこの覆土の掘削も南端部から平行して行うこととなった。また、包含層掘削が終了する時点で、調査区北端部で5041-O Xの全貌が明らかとなったため、各グリットごとに覆土のサンプリングを行ったのち、その覆土を除去し、覆土下部の遺構の検出に努めた。8月12日にはA地区の航空写真測量を実施し、以後細かい詰めめの作業を行ったのち、8月30日にA地区の調査を完了した。

この間、8月20日にはA地区の調査について現地説明会を開催した。

8月1日、調査区最北端に存在した鶏舎の撤去作業を契機としてB地区の調査が開始された。A地区の包含層が予想よりも厚かったことや、遺構の密度が高かったためにA地区の調査に手間取り、当初の調査期限である9月末日には調査が完了できない可能性が出て

きた。そこで、大阪府教育委員会・(財)大阪府埋蔵文化財協会本部が協議した結果、B地区の包含層については遺構面直上まで機械掘削によって除去するという方針が建てられた。これに基づき、8月19日より進入路部分を残す形で調査区北側より包含層の機械掘削が開始された。しかし、B地区の遺構調査が本格化したのは9月以降であり、予定された期限内に調査を完了することが不可能となったため、再び大阪府教育委員会・岸和田土木・(財)大阪府埋蔵文化財協会本部と協議を重ね、調査期間を1カ月間延長することとなった。

調査の後半は悪天候に悩まされたが、10月13日にB地区の航空写真測量を行い、その後詰め作業を行って、10月28日にはすべての調査を完了した。

なお、1989（平成元）年度に行われた擁壁調査の概要については、第II章第3節を参照されたい。

二回にわたる調査の結果、検出された遺構は竪穴住居跡5、掘立柱建物跡34、土坑32、溝53、自然流路2、不明遺構130、pit1451であった。

竪穴住居の時期は6世紀後半から7世紀初頭である。遺構が重複するため最低2時期に分かれる。掘立柱建物は7世紀前半から8世紀中葉までと12世紀後半の大きく二つの時期からなるが、さらに6時期に分けて建物群の変遷をたどることができる。土坑は出土遺物が少なくそれぞれの時期やその性格を明らかにできるものは少なかった。その中であって、2022-00から製塩土器がまとまって出土したことが注目される。数ある溝状遺構の中でも、調査区を南北に縦走する3033-OSと東西に横断する3034-OSが集落と密接に関わる溝として重要である。3033-OSは7世紀代の遺物を多量に含んでいた。おそらく、この時期の地域開発に伴う用水路として機能した溝であろう。3034-OSは8世紀中葉を中心とする遺物を多量に含んでいた。おそらく、この時期の集落の南側を区画する溝と考えられる。A地区で検出された2本の流路は3033-OSの名残であろう。不明遺構の中ではA地区北端部で検出された5041-OXの存在が注目される。ここからは8世紀後半から9世紀初頭ごろの土器とともに、大量の製塩土器・土錘等の土製品・蛸壺・平瓦・砥石等の石製品・燃えさしが出土したほか、炭化米などの種子が多く検出された。建物に確実に伴うことが明らかなpitは357基で全体の約25%にすぎない。しかし、pitの集中する範囲が掘立柱建物群の範囲と一致することから、なお多くの建物が存在したものと考えられる。

これらの遺構・遺物の検討から、水込遺跡は二俣池北遺跡とともに6世紀後半から一集落を形成し、とくに7世紀から8世紀中葉にかけては、和泉国和泉郡山直郷において中心的集落の一つとして存在した可能性が高い。

第3節 調査日誌抄

1988年

6月1日(水)曇り時々雨

A地区機械掘削(表土剥ぎ)開始。

6月7日(火)快晴

第1回目の表土剥ぎ終了。調査区南辺に排水溝を人力掘削する。断面に遺構の落ち込み(3033-OS)を確認する。

6月8日(水)雨時々曇り

4級点打設完了。

6月10日(金)晴れ

側溝の掘削と平行して、調査区断面の土層観察を開始する。

6月13日(月)晴れ

調査区南側より中世の遺物包含層(第2層)の人力掘削を開始する。

6月15日(水)晴れ

調査区東側の土層断面図の作成に着手する。

6月17日(金)曇り

調査区西側の土層断面図の作成に着手する。

6月20日(月)晴れ

中世以降の遺物包含層の人力掘削と平行して、調査区南端部において上層遺構面の遺構検出作業を行う。

6月22日(水)晴れ

調査区南端部で検出された上層遺構の写真撮影および平面図(1/100)作成。

6月23日(木)曇りのち時々雨

調査区南端部より地山面まで掘り下げ、下層遺構面の遺構検出作業を行う。東西溝(3046-OS)と多数のピットを検出する。

7月4日(月)曇り時々晴れ

進入路撤去部分の包含層人力掘削開始。

7月7日(水)晴れ

調査区を南西から北東方向に斜行する谷状の遺構(4001-OR)の検出をほぼ終了する。

7月20日(水)曇り

A地区の包含層人力掘削をほぼ終了する。遺構検出作業継続。

7月22日(金)晴れ

調査区の北端部に広がっていた炭化物を多量に含む黒色土層の範囲確認を行った後、その範囲を写真撮影する。この黒色土を移植ごてにて3杯程採取して

フローテーションを試みたところ炭化米1粒が検出された。このため、この層の土壌サンプリングを行うことになった。

7月25日(月)晴れ

先週確認された黒色土層の広がりを01-OX(5041-OX)と命名し、各グリット毎に1mの小グリットを設けて土壌サンプリングを行う。また、これと平行して調査区南端部より4001・4002-OR, 3033-OSの埋土の掘削を開始する。

7月26日(火)晴れ時々曇り

土壌サンプリングが終了した5041-OXの埋土を除去しながら、掘立柱建物の検出作業を行う。

7月28日(木)晴れ

3033-OS埋土より多量の遺物が出土し、7世紀代の所産であることが判明する。また、この溝がA地区の調査区をほぼ縦断することも明らかになった。調査区の南端部では掘立柱建物が3棟検出される。

8月1日(月)晴れ

B地区調査予定地内にあった鶏舎を撤去し、表土の機械掘削を行う。

8月5日(金)晴れ

岸和田市教育委員会主催の岸和田市夏休み郷土史教室の生徒約30名が見学を訪れる。



写真1 岸和田市郷土史教室

8月8日(月)晴れ

3034-OS遺物出土状態写真撮影。2022-00出土遺物(製塩土器等)取り上げ。

8月9日(火)晴れ

3034-OS遺物出土状態実測および遺物取り上げ。

8月12日(金)曇り一時雨

A地区の航空写真測量を行う。

8月16日(火)曇り一時雨

遺構の補測を作業開始する。

8月18日（木）曇り一時雨

遺構単位の写真撮影を開始する。

8月19日（金）曇り一時雨

B地区の表土および包含層の機械掘削を行う。

8月20日（土）晴れ



写真2・3 現地説明会風景

現地説明会を開催する（参加者約100名）。

8月22日（月）晴れ

掘立柱建物柱穴截ち割りおよび断面図作成開始。

8月24日（水）曇り

昨夕堺市内を中心として発生した集中豪雨の影響で調査区水没。復旧作業にほぼ1日を割く。

8月29日（月）晴れ

A地区の補測と平行して、B地区北端部の包含層人力掘削および遺構検出作業を開始する。

8月30日（火）晴れ

A地区の調査をほぼ完了する。

9月3日（土）晴れ

A地区の埋め戻し作業を開始する。

9月8日（木）晴れ

3006-OSの埋土掘削を開始する。

9月12日（月）晴れ

B地区南端部の表土および包含層の機械掘削を開始する。

9月16日（金）曇り一時雨

B地区の調査と平行して、A地区西南端部、3級基準点打設地点周辺の未調整地区の表土および包含層の機械掘削を行う。

9月19日（月）晴れ後曇り一時雨

3027-OS出土の須恵器大甕の出土状態写真撮影および平面図の作成を行う。B地区の調査と平行して、A地区西南端部の遺構検出作業を行う。

9月20日（火）晴れ

A地区西南端部の調査を終了する。A地区の埋め戻しのために使用していたB地区のトラック進入路部の表土および包含層の機械掘削を開始する。

9月21日（水）曇り

A地区西南端部の調査区の埋め戻しを完了する。

9月29日（木）曇り一時雨

3022-OS出土の須恵器大甕の出土状態写真撮影および平面図の作成を行う。

10月13日（木）曇り時々晴れ

B地区の航空写真測量を行う。航空写真測量終了後、遺構単位の写真撮影を開始する。

10月14日（金）晴れ

遺構単位の写真撮影と平行して、掘立柱建物柱穴截ち割りおよび断面図の作成を開始する。

10月19日（水）晴れ

調査の終了したB地区北半部の埋め戻し作業を開始する。

10月24日（月）曇り後雨



写真4 A地区水没（北から）

第II章 調査に至る経過と概要

B06VN・VO・WN・WO・XN・XOの範囲の遺構の重複が激しい上、しっかりした地山面が把握できなかったため、サブレンチを3本設定して遺構の有無を断面観察する。その結果、2015-OOの存在が明らかとなった。

10月25日（火）曇り後晴れ

0002-OD床面精査中に、それより古い0003-ODが重複していることが判明する。

10月26日（水）晴れ

B06VN・VO・WN・WO・XN・XOの範囲と0002・0003-OD周辺の遺構配置が航空写真測量時より大きく変化したためこの部分の1/20の平面図を作成する。

10月28日（金）晴れ時々曇り

午前中、最後の補測を行いすべての調査を終了する。

1989年

11月6日（月）晴れ後曇り

A地区西側擁壁建設部分の表土および包含層の機械掘削を南から北へ向けて開始する。3034-OSの西側延長部分を検出する。

11月7日（火）雨後晴れ

A地区西側擁壁建設部分の表土および包含層の機械掘削終了後、遺構検出作業に着手する。また、引き続きB地区西側擁壁建設部分の表土および包含層の機械掘削を行う。

11月8日（水）晴れ後曇り

3033-OSの西側延長部分の覆土の掘削を行う。

11月9日（木）曇り時々小雨

午前中、B地区西側擁壁建設部分の遺構検出作業を行い、午後から3034-OSの西側延長部の覆土掘削に着手する。

11月10日（金）晴れ時々曇り

B地区で検出された3022-OS・3027-OS等の覆土掘削を行う。

11月11日（土）晴れ

検出された遺構の平面図を作成して、西側擁壁建設部分の調査を完了する。

11月14日（火）曇り

A地区東側擁壁建設部分の表土および包含層の機械掘削を南から北へ向けて開始する。

11月16日（木）曇り

A地区東側擁壁建設部分の遺構検出作業に入る。

11月17日（金）曇り

4001-OR東側延長部分の覆土掘削に着手する。

11月18日（土）晴れ時々曇り

B地区東側擁壁建設部分の表土および包含層の機械掘削に入る。3033-OS東側延長部分の覆土掘削に着手する。

11月20日（月）晴れ

3033-OS東側延長部分の覆土より一括遺物が出土する（第126図下段・図版51上段）。

11月21日（火）晴れ

3034-OS東側延長部分の覆土掘削に着手する。

11月24日（金）晴れ

B地区東側擁壁建設部分の遺構検出作業に入る。

11月27日（月）曇り

B地区の東側擁壁建設部分の遺構覆土掘削、およびA地区東側擁壁建設部分で検出された柱穴の半截作業を行う。

11月30日（木）晴れ時々曇り一時雨

東側擁壁建設部分の航空写真測量を行った後、補測作業を行って、擁壁建設部分のすべての調査を終了する。



写真5 A地区調査風景



写真6 3034-OS出土遺物実測風景

第Ⅲ章 調査方法

第1節 調査方法

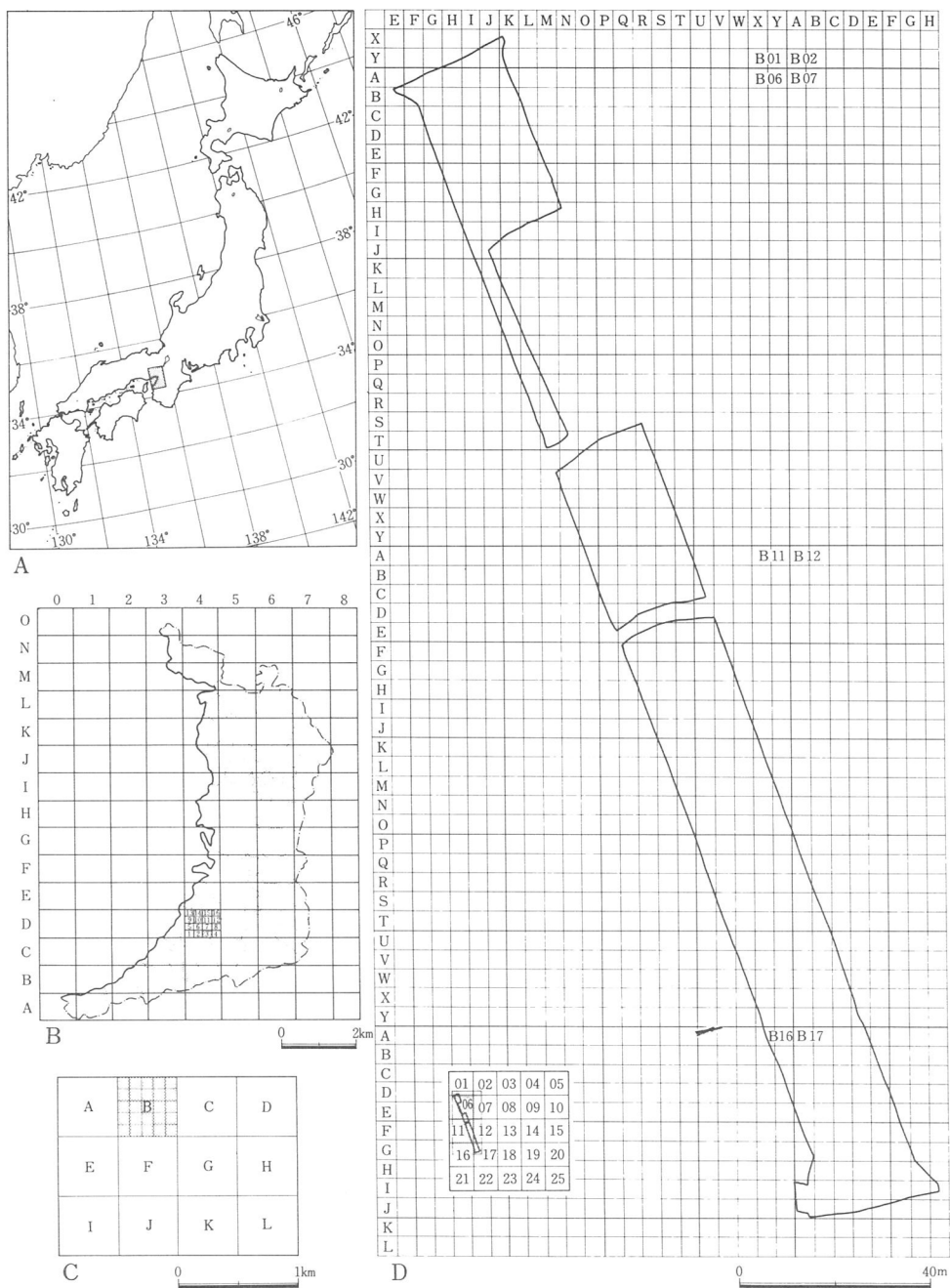
調査区の地区割 遺構の実測および遺物の取り上げには、国土座標法による新平面直角座標第Ⅵ座標系をもとにした4×4mの区画を使用した。その際、区画の設定および各区画の呼称については、(財)大阪府埋蔵文化財協会の調査規程に基づき以下の手順によって行った。

大阪府発行新版の1/2500地形図は第5図Bのように地区割りされている。本遺跡の所在地は大D-4-3という地形図に掲載されている。この地形図を12等分して500×500mの区画を作り、A～Lの記号を与える。さらに、この区画を25等分して100×100mの区画を作り、01～25の数字を付ける(第5図C)。最後にこれを625等分して4×4mの最小区画を設定し、表示する際は縦方向を優先させて、AA～YYの記号を与える(第5図D)。最小区画の呼称は北西角の杭の名称と同一で、例えばB06BGようになる。この場合、最初のBは500mの区画を、次の06は100mの区画を、最後のBGは4mの区画を表している。このような地区割りによって、本遺跡の調査区はB01・06・11・12・16・17に含まれることになる(第5図D)。

発掘調査 調査区の総延長は約250m、幅は約20mである。調査区は東西に走る里道と用水路によって三分割されている(第5図D)。調査区中央やや北寄りに用水路が有るためそれを境として北側をB地区、南側をA地区として調査を行った。B地区北半部の用地買収が難航したことと、二俣池の南側を東西に走る道路以外に工事用車両の進入路が確保できないという事情により、調査はA地区南端から開始することになった。

A地区の調査は、表土層(第Ⅰ層)を機械掘削したのち、前述の4m四方の地区杭を打ち、包含層を人力掘削するという手順で行った。第Ⅲ章第2節で述べるように、包含層は上層と下層という大きく2層に分けることが可能であり、各最小区画ごとにできる限り層位別に遺物を取り上げ、遺構検出面まで人力によって包含層を除去した。

B地区の調査は、調査期間に制約があったため、遺構検出面直上まで機械掘削を行い、その後地区杭を打って、5～10cm程度掘り残した包含層を人力掘削した。



第5図 調査区地区割り図

(A : Bの位置 B : 大阪府新版1/2500地形図地区割り図 C : 500mの区画 D : 100mと4mの区画)

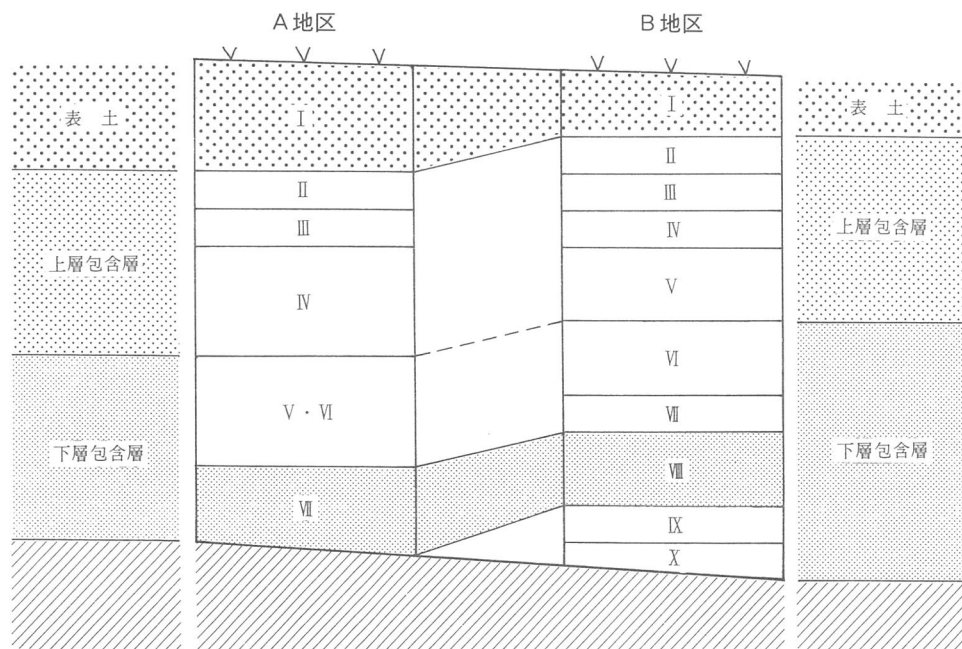
第2節 基本層序

水込遺跡の調査区南北土層を把握できる部分は、B地区の北半部に未買収地があるため、調査区西側の壁面に限られる。しかし、調査区は水路と里道によって3地区に分割されているため（第5図D）、それぞれの地区の層序を完全に対応させることはできなかった。そこで、第6図のようにA地区とB地区の基本層序は区別することにした。

A地区の基本層序はI～VII層からなる。I層は表土層である。II層はA地区南壁中央部分に薄く堆積していることが確認されたのみであった。IV層とV層の間で明らかに土質が変化するため、II～IV層までを上層包含層、V～VII層までを下層包含層と理解して調査を行った。V層とVI層については堆積の重複関係を確認することができなかった。

B地区の基本層序はI～X層からなる。I層は表土層で、里道の北と南では土質が異なる。II～IV層は旧水田耕土と考えられる。V層とVI層の間で明らかに土質が変化するため、II～V層までを上層包含層、VI～X層までを下層包含層と理解して調査を行った。

なお、A地区の第VII b層とB地区の第VIII層は、土色が微妙に異なるものの土質が極めて類似していることから、両地区の層位を対応させる上での鍵層になるものと思われる。

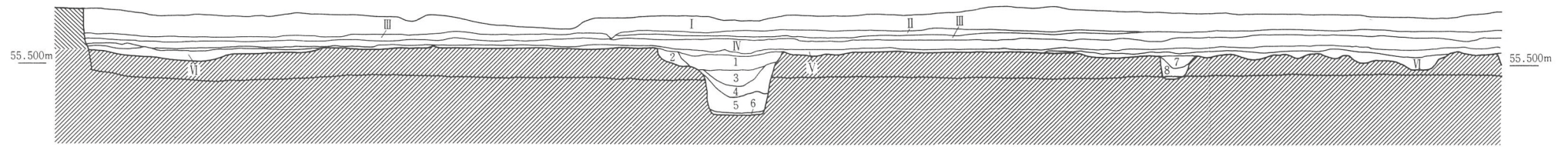


第6図 基本層序模式図

第Ⅲ章 調査方法

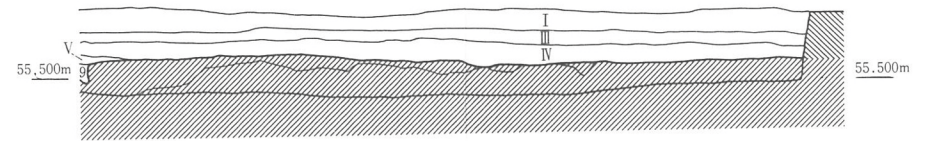


第7図 調査区西壁土層柱状模式図(上段:A地区 下段:B地区)

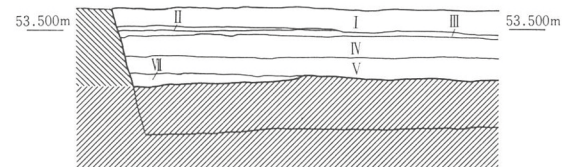


A地区南壁土層説明

- | | |
|---|---|
| I層：黒褐色(10YR3/2)シルト。細礫を少し含む(現耕土)。 | 1層：灰黄褐色(10YR5/2)砂礫混じりシルト(3033-OS埋土)。 |
| II層：灰黄褐色(10YR5/2)シルト。明褐色(10YR6/6)シルトが混ざる。 | 2層：にぶい黄褐色(10YR6/3)シルト(3033-OS埋土)。 |
| III層：* (*) * | 3層：黒褐色(10YR3/2)シルト(3033-OS埋土)。 |
| IV層：褐灰色(10YR5/1)シルト。細礫を少し含む(還元層)。 | 4層：褐色(10YR4/4)シルト。明黄褐色(10YR6/8)シルトブロックを含む(3033-OS埋土)。 |
| V層：黄褐色(10YR5/8)礫混じりシルト(酸化層)。 | 5層：黒褐色(10YR3/1)シルト(3033-OS埋土)。 |
| VI層：灰黄褐色(10YR5/2)シルト(還元層)。 | 6層：灰黄褐色(10YR5/2)砂礫。細砂を多く含む(3033-OS埋土)。 |
| | 7層：* (*)シルト。明黄褐色(10YR6/6)シルトのブロックを含む。 |
| | 8層：* (*) * |
| | 9層：* (10YR6/2)シルト。 |

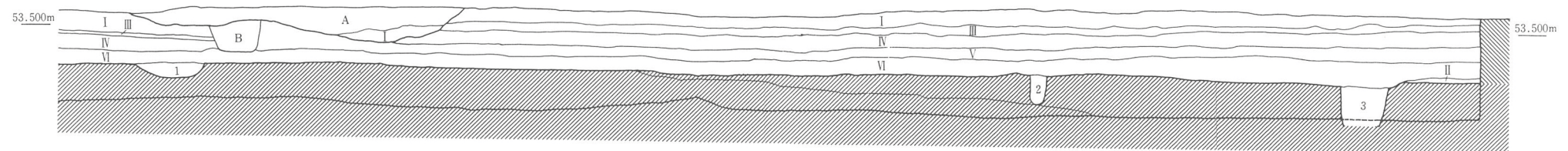


第8図 A地区南壁土層断面図 (S=1/80)



B地区北壁土層説明

- | | |
|---|--|
| I層：黒褐色(10YR3/2)シルト。細礫を少し含む(現耕土)。 | A層：盛土。黄褐色(7.5YR7/8)砂礫。 |
| II層：灰黄褐色(10YR6/2)シルト。 | B層：水路掘方 |
| III層：明黄褐色(10YR6/6)シルト(酸化層)。 | 1層：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト。 |
| IV層：灰黄褐色(10YR5/2)シルト。明黄褐色(10YR6/6)シルト混じり。 | 2層：灰黄褐色(10YR5/2)シルト。 |
| V層：* (*)シルト(還元層)。 | 3層：灰黄褐色(10YR4/2)シルト。明黄褐色(10YR6/8)シルト混じり。 |
| VI層：褐灰色(10YR5/1)シルト。細礫を少し含む。 | |
| VII層：黄褐色(10YR5/8)礫混じりシルト(酸化層)。 | |



第9図 B地区北壁土層断面図 (S=1/80)

第Ⅳ章 調査成果

第1節 竪穴住居（OD）

概要

水込遺跡において検出された竪穴住居の総数は5棟である。いずれもB地区に存在し、調査区外にかかる形で検出されたため完掘されたものはない。出土遺物が少ないため時期決定が難しいが、概ね6世紀後半から7世紀初頭にかけての所産と考えられる。

第2表 竪穴住居一覧表

遺構No.	旧No.	地区名	座標値(km)	平面形	規模	時期	摘要
0001	1300	B06BF	東北角X-172.6054 Y-51.4777	方形?	不明	6C後半?	壁溝
0002	1716	B06UN・UO・UP・VO	東角X-172.6828 Y-51.4394	方形?	東西約4.5m 南北4m以上	6C後半～ 7C初頭	0003-OD・ 2012-OOと 重複
0003	1793	B06TO・TP・UO・UP	東南角X-172.6803 Y-51.4395	方形?	東西約4.15m 南北2.1m以上	6C後半	0002-OD・ 2012-OOと 重複
0004	1580	B06TP・TQ	東角X-172.6775 Y-51.4355	方形?	東西約4.8m 南北1.3m以上	6C後半?	5017-OXと 重複
0005	1636	B06AT・AU・BT・BU	西北角X-172.7030 Y-51.4218	方形?	東西2m以上 南北3.5m以上	6C後半?	カマダなし

0001-OD（第10図，第2表）

B06BFに位置し、1002-OBと重複する。調査範囲内に住居跡の東北角が辛うじて確認された。東壁と南壁の遺存状態から方形の平面形態が想定される。調査区西壁の断面観察によれば、覆土はにぶい黄褐色（10YR4/3）シルトの1層からなり、検出面から床面までの深さは約25cmを測る。床面標高は52.74mである。壁面には深さ約10cmの壁溝を有する。東北角の座標はX-172.6054，Y-51.4777である。出土遺物が無いため時期決定は

困難であるが、隣接する二俣池北遺跡の調査成果などを考慮すれば、6世紀後半の可能性が高い。

0002-OD (第11・13図, 図版6, 第2表)

BO6UN・UO・UP・VOに位置する。0003-OD・2012-OOと重複し、三者の中では一番新しい遺構である。東西約4.5m・南北4m以上の規模を有し、平面形態は方形を呈するものと思われる。西北壁が調査範囲外にあるため主軸方向を正確に求めることができないが、西南壁のラインはおよそN-41°-Wの値を示しており、この値は主軸方向とさほど違いはないものと思われる。西角の座標はX-172.6853, Y-51.4425、東角の座標はX-172.6828, Y-51.4394である。住居は遺構検出面から深さ約40cmほど荒掘を行った後、貼床を施して構築されている。床面の標高は53.80mである。覆土は褐灰色(10YR6/1)礫混じりシルトの1層(第13図1層)からなる。覆土がレンズ状の堆積をしていないことと、地山との識別が難しかったことなどから推して、住居廃棄時に人為的な埋め戻しが行われた可能性も考えられる。主柱穴は6540-OP・6599-OP・6600-OP・6601-OPである。6540-OP・6599-OPの北側にはそれらよりもやや小さめの6539-OP・6598-OPが存在する。両者はよく似た位置にあることから、ある時期に家屋修築に伴う柱の平行移動が行われたか、または、柱に付属する何らかの施設に関わる柱穴の可能性が考えられる。東北壁北側には一部壁溝が認められるが、基本的には径約10cmの壁柱穴が回っている。西北壁が調査区外にあるため明らかではないが、竈が構築されていたとすればこの部分に存在するものと思われる。6600-OP周辺の床面には、50cm×70cmの範囲に薄い炭化物の堆積が認められた。

出土遺物から6世紀後半から7世紀初頭にかけての所産と考えられる。

出土遺物(第3表)

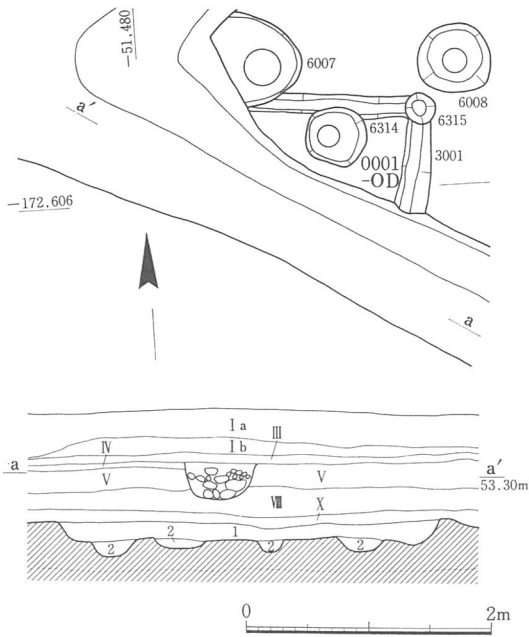
覆土中より第3表に掲げた遺物が出土した。

第3表 0002-OD出土遺物計量表

器種	器形	破片数	重量(g)
須恵器	坏	23	125.7
	高坏	1	8.2
	甕or壺	18	186.9
	小計	42	320.8
土師器	坏	6	16.5
	甕	11	49.4
	小計	17	65.9
瓦器	碗	1	1.7
総計		60	388.4

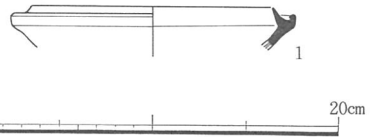
第4表 0003-OD出土遺物計量表

器種	器形	破片数	重量(g)
須恵器	坏	3	9.6
	甕or壺	1	29.0
	壺	1	13.9
	小計	5	52.5
土師器	坏	13	26.3
	甕	26	126.1
	小計	39	152.4
総計		44	204.9



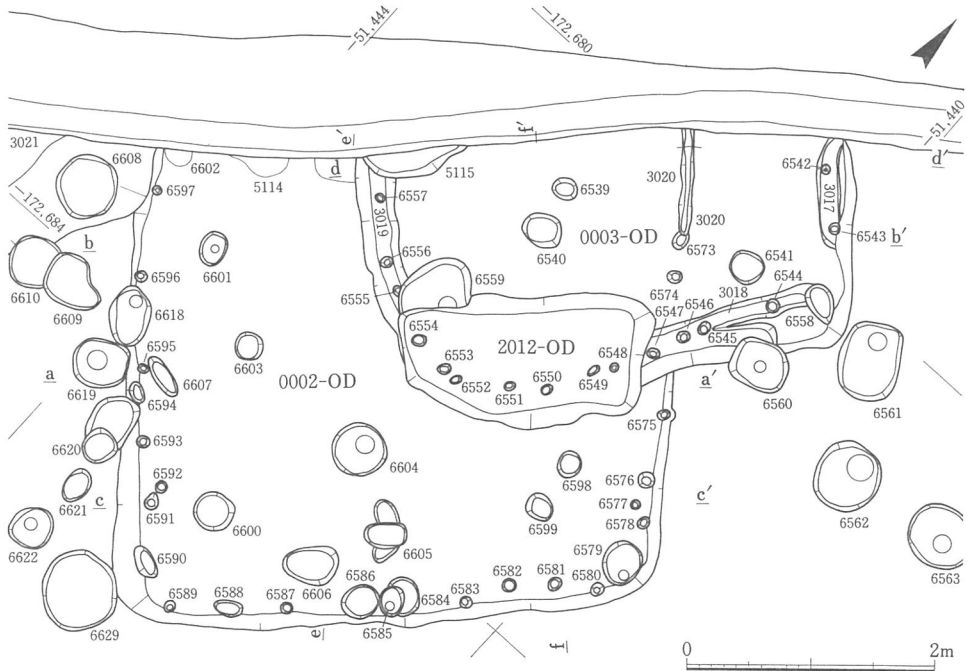
土層説明

- 1層：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト。
- 2層：褐色(10YR4/4)シルト。



第10図 0001-OD平面図・土層断面図 (S=1/60)

第12図 0003-OD出土遺物実測図 (S=1/4)



第11図 0002・0003-OD, 2012-OD平面図 (S=1/60)

0003-OD (第11・13図, 図版6, 第2表)

B06T O・TP・UO・UPに位置する。0002-OD・2012-OOと重複し、三者の中ではもっとも古い遺構である。東西約4.15m・南北2.1m以上の規模を有し、平面形態は方形を呈するものと思われる。西北壁が調査範囲外にあるため主軸方向を正確に求めることができないが、東北壁のラインはおおよそ $N-43^{\circ}-W$ の値を示しており、この値は主軸方向とさほど違いはないものと思われる。東南角の座標は $X-172.6803$, $Y-51.4395$ である。住居は遺構検出面から深さ約35cmほど荒掘を行った後、貼床を施して構築されている。床面の標高は53.72mである。覆土は灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルトの2層(第13図18層・20層)からなるが、上層には明黄褐色(10YR6/6)粘質シルトブロックが含まれている。0002-OD以上に地山と覆土の識別がつけにくく、遺構検出面では住居のプランを正確に把握することができなかった。0002-OD床面精査中に床面下の遺構の存在が判明し、調査区北側の側溝に沿ってセクションベルトを設定し、半ば手探りの状態で発掘調査をすすめた。その結果、床面に土師器の小片が貼り付いていたことと、壁溝が回っていたため辛うじて平面形態を把握することができた。これらの状況から判断して0002-ODと同様、住居廃棄時か、もしくは0002-OD構築時に人為的な埋め戻しが行われたものと思われる。支柱穴は6541-OPで、対応する西側の柱穴は2012-ODによって破壊されている。東角を除き幅約30cm、深さ5~10cmの壁溝が回っている。また、壁溝の中には径約10cmの壁柱穴が回っている。西北壁が調査区外にあるため明らかではないが、竈が構築されていたとすればこの部分に存在するものと思われる。

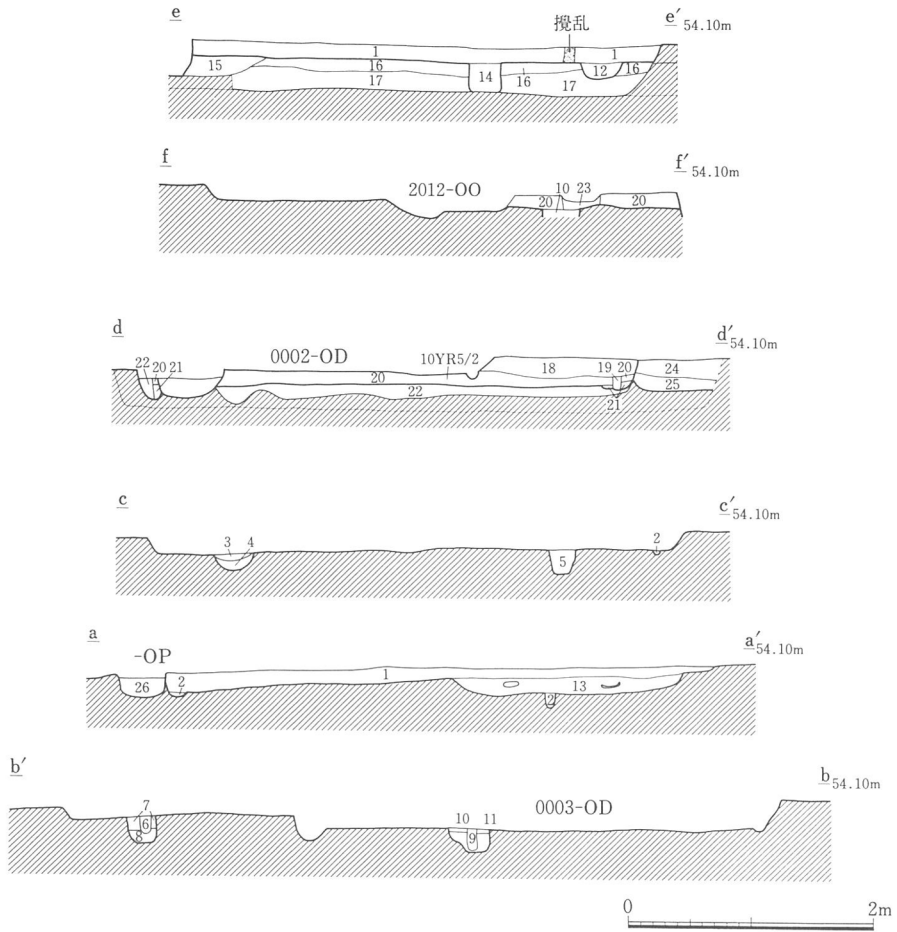
出土遺物から6世紀後半の所産と考えられる。

出土遺物 (第12図, 第4・77表)

覆土中より第12図に図示した遺物のほか、第4表に掲げた遺物が出土した。土師器の小片は側溝寄りの住居中央床面より出土したが、形を復元できるほど残存してはいなかった。

0004-OD (第14図, 第2表)

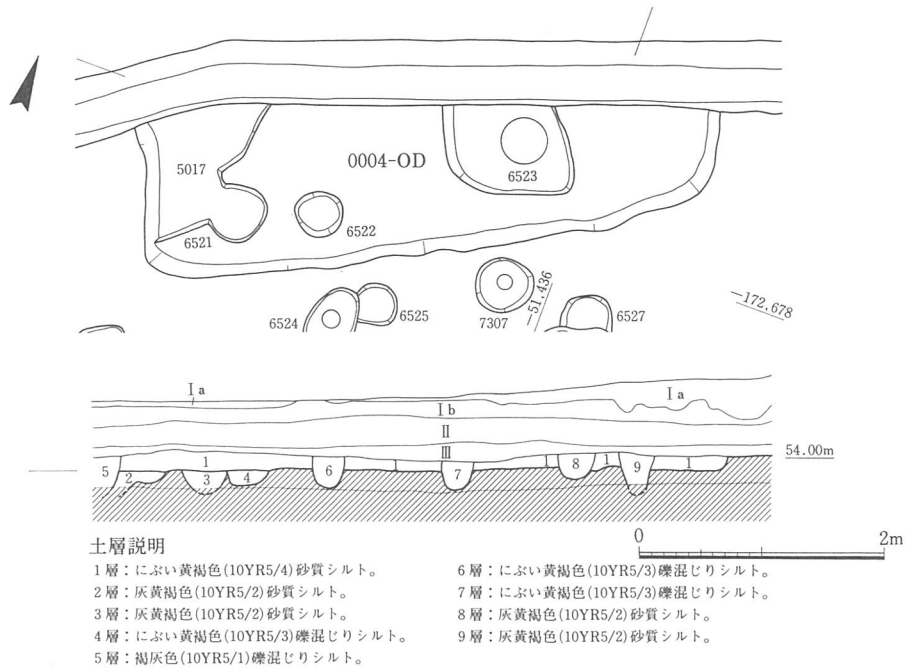
B06TP・TQに位置する。東西約4.8m・南北1.3m以上の規模を有し、平面形態は方形を呈するものと思われる。西壁に接するように5017-OXが重複しているが、0004-ODの方が新しい。東西北壁が調査区外に有るため主軸方向を正確に求めることはできないが、西南壁のラインはおおよそ $N-21^{\circ}-W$ の値を示しており、この値は主軸方向とさほど違いはないものと思われる。西角の座標は $X-172.6794$, $Y-51.4391$ 、東角の座標は $X-172.6775$, $Y-51.4355$ である。断面に荒掘の痕跡はなく、地山を床面としている。



土層説明

- | | |
|--|--|
| <p>1層：褐灰色(10YR6/1)礫混じりシルト。明黄褐色(10YR6/6)土のブロックを含む(0002-OD覆土)。</p> <p>2層：褐灰色(10YR6/1)シルト。</p> <p>3層：にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質シルト。炭化物を含む。</p> <p>4層：灰黄褐色(10YR6/2)砂質シルト。粘性ややあり。</p> <p>5層：にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルト。粘性ややあり。</p> <p>6層：灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルト。</p> <p>7層：褐灰色(10YR6/1)砂質シルト。</p> <p>8層：にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルト。</p> <p>9層：褐灰色(10YR6/1)砂質シルト。</p> <p>10層：にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質シルト。粘性ややあり。</p> <p>11層：灰黄褐色(10YR6/2)砂質シルト。</p> <p>12層：にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルト。微砂を多く含む。</p> <p>13層：褐色(10YR4/4)礫混じりシルト(2012-OO覆土)。</p> | <p>14層：にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルト。微砂を多く含む。</p> <p>15層：5115-OX覆土。</p> <p>16層：黄褐色(10YR5/8)砂質シルト。微砂を多く含む。貼床。</p> <p>17層：褐色(10YR4/4)砂質シルト。微砂を多く含む。掘り方埋土。</p> <p>18層：灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルト。10YR6/6明黄褐色砂質シルトブロックを含む(0003-OD覆土)。</p> <p>19層：褐灰色(10YR6/1)砂質シルト。</p> <p>20層：灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルト(0003-OD覆土)。</p> <p>21層：にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質シルト。</p> <p>22層：灰黄褐色(10YR5/2)微砂シルト。壁溝覆土。</p> <p>23層：褐灰色(10YR6/1)砂質シルト。</p> <p>24層：にぶい黄褐色(10YR5/4)礫混じりシルト。10YR5/6黄褐色砂質シルトを含む。</p> <p>25層：灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルト。下層遺構覆土?。</p> |
|--|--|

第13図 0002・0003-OD, 2012-OO土層断面図 (S=1/60)



第14図 0004-OD平面図・土層断面図 (S=1/60)



第15図 0005-OD平面図・土層断面図 (S=1/60)

床面の標高は53.92mである。覆土は、にぶい黄褐色（10YR5/4）砂質シルトの1層（第14図1層）からなる。遺構検出面から床面までの深さは約15cmを測る。支柱穴・壁溝・壁柱穴は検出されなかった。東西北壁が調査区外にあるため明らかではないが、竈が構築されていたとすればいずれかの壁に存在するものと思われる。

出土遺物が無いため時期決定は困難であるが、隣接する二俣池北遺跡の調査成果などを考慮すれば、6世紀後半の可能性が高い。

0005-OD（第15図，図版7，第2表）

B06AT・AU・BT・BUに位置する。東西2m以上・南北約3.5mの規模を有し、平面形態は方形を呈するものと思われる。擁壁調査時に住居跡の東半部を調査したが、遺構検出面まで一気に機械掘削を行った際にやや深く削ってしまったためか、断面で確認した遺構の続きを検出することができなかった。西壁を参考にした主軸方向はN-3°-Wである。西北角の座標はX-172.7030，Y-51.4218、西南角の座標はX-172.7017，Y-51.4215である。断面に荒掘の痕跡はなく、地山を床面としている。床面の標高は54.06mである。覆土は灰黄褐色（10YR5/2）砂質シルトの1層（第15図3層）からなる。遺構検出面から床面までの深さは約10cmを測る。支柱穴は検出されなかったが、幅約15cm・深さ約5～10cmの壁溝が回っている。調査区の側溝掘削時や擁壁調査の際に、灰・粘土等竈の存在を示すようなものは検出されなかったので、竈は当初から存在しなかった可能性が高い。

出土遺物が無いため時期決定は困難であるが、0004-ODと同じ理由により6世紀後半の可能性が高い。ただし、竈が存在しないことを考慮すれば、さらに古く遡る可能性も考えられる。

第2節 掘立柱建物（OB）

概要

今回の調査で確認された掘立柱建物の総数は34棟である。1001～1017の17棟がB地区において、また、1018～1034の17棟がA地区において検出された。しかし、B地区の南半部からA地区の北半部にかけて（B06Tライン～B11Jラインの範囲）、pitが密集しており、なお多くの建物の存在が予測されるが、検証することができなかった。

建物の時期は7世紀代から8世紀代が中心で、12世紀代のものがこれに複合している。

第V章で詳述するが、建物の重複関係等によって、水込遺跡の掘立柱建物の時期は7期に区分することができる。6世紀末から7世紀初頭の建物は1008－OBである。これを除いた7世紀代から8世紀代の建物は、7世紀前半から中葉・7世紀中葉から後半・7世紀後半から8世紀前半・8世紀前半から中葉の4期に分かれる。7世紀前半から中葉の時期に該当すると思われる建物は、1002・1004・1005・1006・1010・1011・1014・1028－OBの8棟である。7世紀中葉から後半の時期に該当すると思われる建物は、1003・1012・

第5表 掘立柱建物一覧表

遺構番号	棟方位	規模	総長(m)	平均柱間(m)	床面積(m ²)	期	備考
1001	N-40°-W	桁行 2間以上 梁間 3間	— 3.50	1.17	—	V	
1002	N-88°-W	桁行 4間 梁間 3間	5.89 4.39	1.48 1.45	(25.86)	II	
1003	N-14°-W	桁行 2間 梁間 2間	3.39 3.16	1.55 1.63	10.71	III	総柱
1004	N-5°-E	桁行 4間 梁間 3間	6.59 3.92	1.65 1.31	25.83	II	
1005	N-87°-W	桁行 5間 梁間 3間	7.21 4.19	1.44 1.40	30.21	II	3間×4間の主屋の東側に庇が取り付く可能性あり
1006	N-5°-E	桁行 (4間) 梁間 (3間)	(6.83) (3.77)	(1.83) —	(25.75)	II	
1007	N-71°-E	桁行 2間以上 梁間 3間	— 3.70	— 1.22	—	V	
1008	N-10°-E	桁行 2間 梁間 1間	3.72 2.80	1.22 2.80	10.42	IIc	妻側に棟持柱を有する
1009	N-16°-E	桁行 3間 梁間 2間	4.92 3.20	1.65 1.53	15.74	V	
1010	N-0°-W	桁行 2間 梁間 2間	3.63 3.01	1.80 1.65	10.93	II	総柱
1011	N-90°-W	桁行 4間 梁間 2間	6.13 2.67	1.50 1.25	16.37	II	

第2節 掘立柱建物（OB）

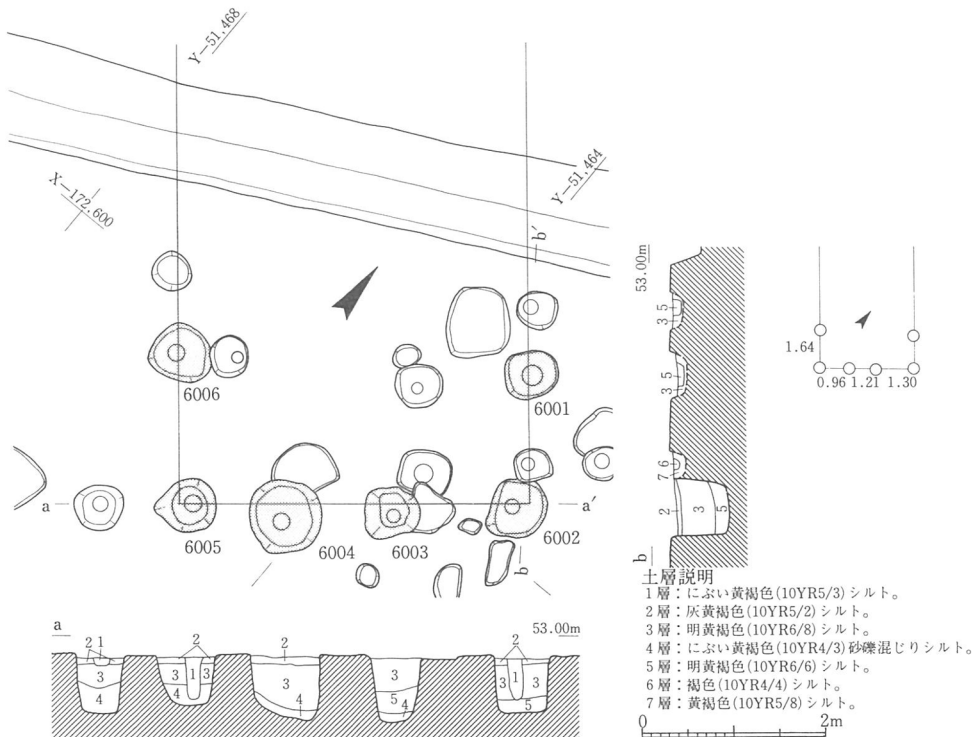
遺構 番号	棟方位	規模	総長(m)	平均柱間 (m)	床面積(m ²)	期	備考
1012	N-7°-W	桁行 3間 梁間 2間	5.16 3.69	1.67 1.80	19.04	III	
1013	N-84°-E	桁行 3間 梁間 2間	4.53 2.97	1.55 1.45	13.45	III	
1014	N-87°-E	桁行 2間 梁間 2間	3.40 3.20	1.70 1.60	10.88	II	総柱
1015	N-11°-W	桁行 2間 梁間 2間	3.76 2.84	1.83 1.43	10.68	IV	総柱
1016	N-75°-E	桁行 3間 梁間 2間	5.99 4.19	1.90 2.15	25.10	III	総柱
1017	(N-77°-E)	桁行 3間 梁間 (2間)	5.93 —	1.97 —	—	IV	
1018	(N-18°-W)	桁行 2間以上 梁間 3間	— 4.21	— 1.40	—	VII	
1019	N-11°-W	桁行 4間 梁間 2間	6.40 2.84	1.59 1.38	18.18	IV	
1020	N-80°-E	桁行 3間 梁間 2間	4.84 3.54	1.60 1.80	17.13	V	
1021	N-20°-W	桁行 3間 梁間 2間	5.00 4.00	1.63 1.90	20.00	III	
1022	N-84°-E	桁行 (3間) 梁間 2間	6.94 4.42	(2.30) 2.15	30.67	V	
1023	N-75°-E	桁行 (3間) 梁間 1間	— 3.90	— 1.95	—	VII	
1024	N-21°-W	桁行 3間 梁間 2間	6.03 3.80	1.93 1.90	22.91	III	
1025	N-12°-W	桁行 3間 梁間 2間	5.26 3.35	1.73 1.65	17.62	V	
1026	N-8°-W	桁行 3間 梁間 2間	5.31 3.70	1.73 1.73	19.65	IV	
1027	(N-8°-W)	桁行 4間 梁間 2間	7.72 4.16	1.93 2.08	(32.12)	IV	
1028	N-58°-E	桁行 2間 梁間 2間	3.40 2.84	1.40 1.55	12.36	II	東側に1間×2間分の縁台が取り付く
1029	N-2°-E	桁行 2間 梁間 2間	3.63 3.19	1.80 1.60	11.58	III	
1030	N-13°-W	桁行 2間 梁間 2間	3.75 (4.00)	1.23 —	(15.00)	III	
1031	N-11°-W	桁行 4間 梁間 2間	6.19 2.76	1.54 1.30	17.08	III	
1032	N-18°-W	桁行 2間 梁間 1間	4.13 2.16	2.08 2.16	8.92	VII	
1033	N-72°-E	桁行 2間 梁間 2間	4.20 4.04	2.15 2.03	16.97	VII	
1034	N-87°-E	桁行 3間 梁間 2間	5.04 3.54	1.67 1.75	17.84	IV	

第IV章 調査成果

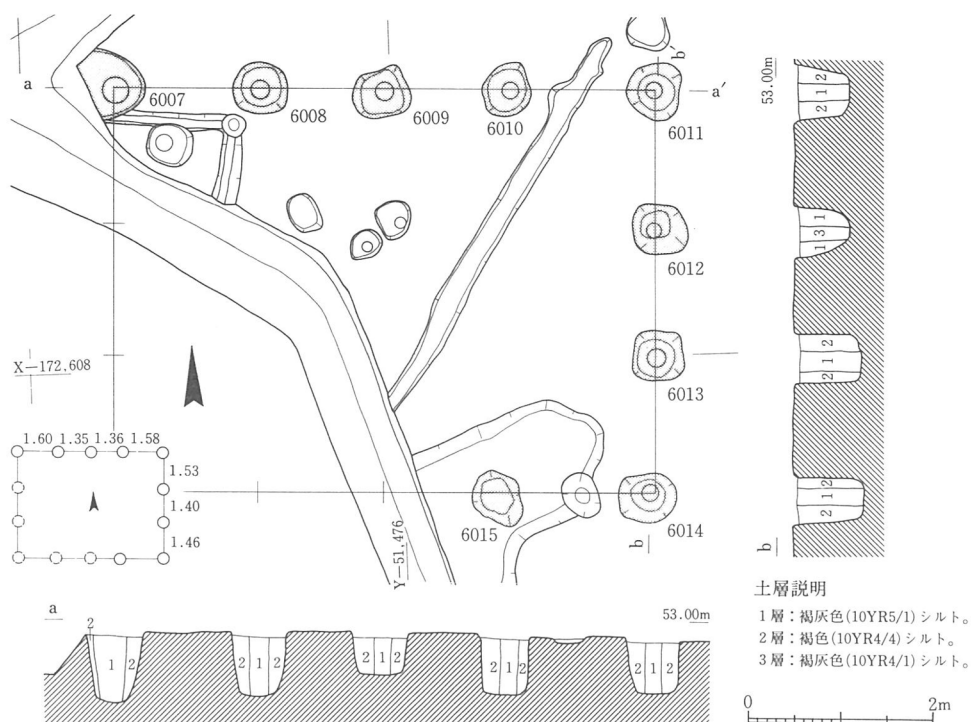
1013・1016・1021・1024・1029・1030・1031-O Bの9棟である。7世紀後半から8世紀前半に該当すると思われる建物は、1015・1017・1019・1026・1027・1034-O Bの6棟である。8世紀前半から中葉に該当すると思われる建物は、1001・1007・1009・1020・1022・1025-O Bの6棟である。また、12世紀代の建物は1018・1023・1032・1033-O Bの4棟で、1032・1033-O Bの重複により2小期に分かれる。

建物は3間×4間ないし2間×3間の規模を中心として、それと2間×2間の総柱建物の組合せによって構成されている。1027-O Bは32.12㎡の規模を有し、検出された掘立柱建物の中では最大である。また、1014-O Bの柱掘方径は1m近くあり、上屋構造が他のものに比べてしっかりしていたことが窺える。

検出された34棟の建物の中でも、とくに、7世紀前半から中葉の時期に該当すると思われる1002・1004・1005・1006-O Bの4棟は、棟方位がほぼ正方位に近く、規模がやや大きいうえ、建物の配置に計画性が窺えることから、この集落の中心的な位置を占める建物群と考えられる。また、後続する7世紀中葉から8世紀前半にかけての建物の配置にも計画



第16図 1001-O B 平面図・土層断面図 (S=1/80)



第17図 1002-OB平面図・土層断面図（S=1/80）

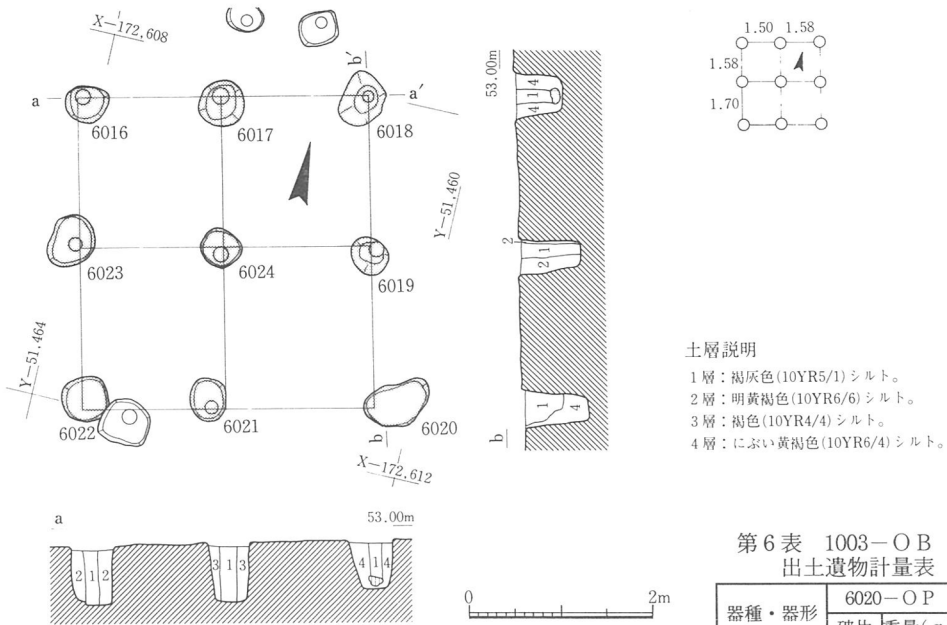
性が認められるので、水込遺跡は7世紀前半から8世紀前半の和泉国和泉郡山直郷において中心的位置を占める集落の一つであった可能性が高いと考えられる。

1001-OB（第16図，図版7，第5表）

B01Y I・Y J，B06A I・A Jに位置する。建物の北側部分が調査区外にあるため規模は明らかではないが、桁行2間以上・梁間3間（総長3.50m）の南北棟建物で、棟方位はN-40°-Wを指すものと思われる。柱穴の埋土最上層が灰黄褐色シルト（10YR5/2）で地山との識別が付けにくかった。これらに類似したピットが周辺にも多数存在したが、建物を想定できたのはこれ1棟のみであった。梁間の平均柱間は1.17mとやや狭い。柱掘方埋土からの出土遺物がないため時期等は明らかではない。

1002-OB（第17図，図版8，第5表）

B06B F・B G・C F・C Gに位置する東西棟建物で、中心座標はX-172.6072，Y-51.4761である。南側の側柱と西側の妻が調査区外に出るが、桁行4間（総長5.89m）・梁間3間（総長4.39m）の規模を有するものと思われる。棟方位はN-88°-Wである。想定どおりの規模であれば、床面積は25.86㎡となる。北側の側柱と東側の妻の柱間は、い



第18図 1003-OB平面図・土層断面図 (S=1/80)

ずれも両端が中央に比べてやや広い。北側の側柱の両端の柱間は高麗尺の4.5尺、中央の柱間は高麗尺の4尺に近い値を示す。東側の妻の両端の柱間については、高麗尺・天平尺のいずれにおいても切の良い数値は得られないが、中央の柱間はやはり高麗尺の4尺に近い値を示している。梁間が3間であることと、高麗尺による設定の可能性が窺えることから、古式な様相を呈する建物といえよう。

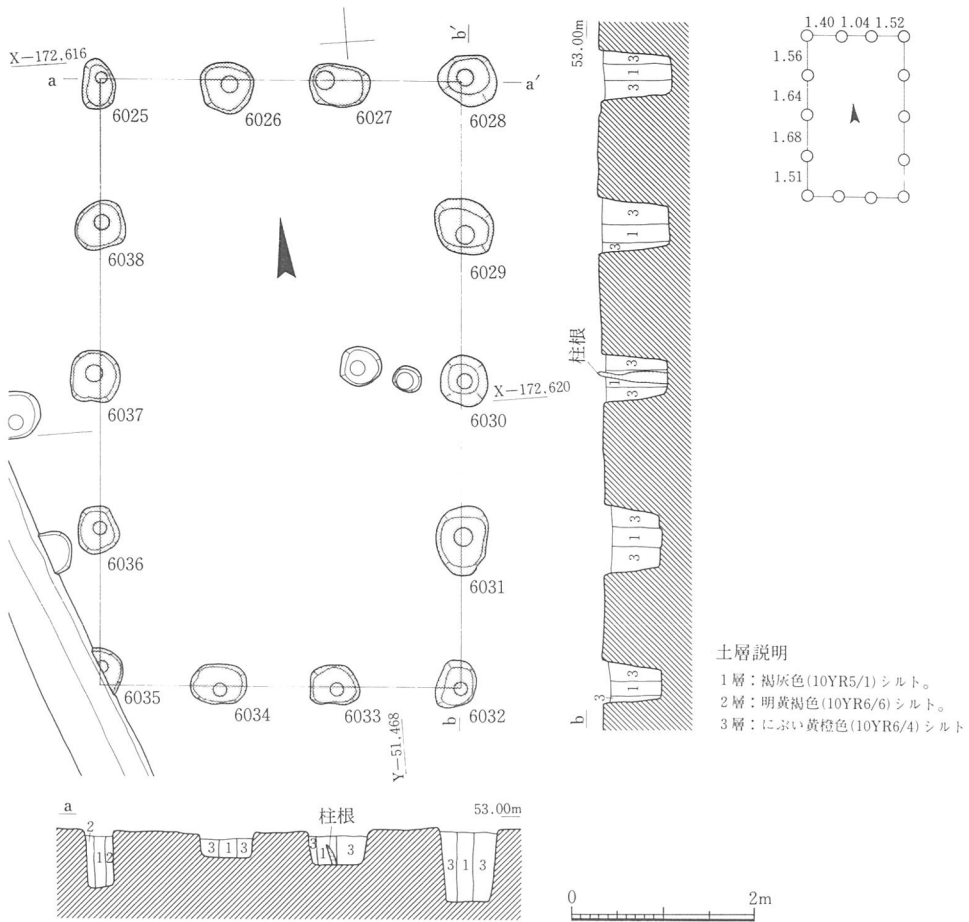
柱掘方埋土中に遺物が含まれていないため帰属時期を断定することはできないが、後述するように、この建物と1004-OB・1005-OBとの間にはその配置に計画性が認められることから、両者と同時期に存在した可能性がきわめて高い。

1003-OB (第18図, 図版8, 第5表)

B06BJ・CI・CJ・CK・DJに位置し、中心座標はX-172.6100, Y-51.4623である。南北棟建物とすれば、桁行2間(総長3.39m)・梁間2間(総長3.16m)、床面積10.71m²の規模を有する総柱建物で、棟方位はN-14°-Wである。6020-OP・6022-OPには柱痕跡が認められず、6020-OPについては明らかに柱の抜き取りが行われている。6018-OPには河原石の礎盤がある。各柱間の数値はバラツキが大きい。6020-OP埋土の抜き取り穴出土遺物から、建物の時期の上限は7世紀前半と考えられる。

出土遺物 (第6表)

第2節 掘立柱建物（OB）



第19図 1004-O B 平面図・土層断面図 (S=1/80)

第7表 1004-O B 出土遺物計量表

器種・器形	6027-O P		6030-O P		6031-O P		合計	
	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)
須恵器	1	5.6	1	8.2	1	8.9	3	22.7
	甕				1	5.6	1	5.6
土師器	1	1.0					1	1.0
	不明				1	5.6	2	6.6
	小計							
合計	2	6.6	1	8.2	2	14.5	5	29.3

6020-O P埋土中より須恵器杯（坏G）口縁部破片が1点出土している。

1004-OB (第19図, 図版9, 第5表)

B06EH・EI・FH・FIに位置する南北棟建物で、中心座標はX-172.6196, Y-51.4690である。桁行4間(総長6.59m)・梁間3間(総長3.92m)、面積25.83㎡の規模を有し、棟方位はN-5°-Eである。6030-OP・6033-OPには柱根が残存する。柱間は北側の妻側にややバラツキがあるが、それ以外はほぼ等間隔である。桁行総長は高麗尺の19尺に、梁間の総長は高麗尺の11尺に近い値を示す。柱総長が高麗尺を用いて設定されている可能性が考えられることと、梁間が3間であることから1002-OBと同様古式の様相をもつ建物といえよう。

なお、1004-OBの西側の桁行と1002-OBの東側の梁行、1004-OBの東側の桁行と1005-OBの西側の梁行とがそれぞれほぼ平行することから、これら3棟は同時期に計画的に配置されて建てられたものと考えられる。

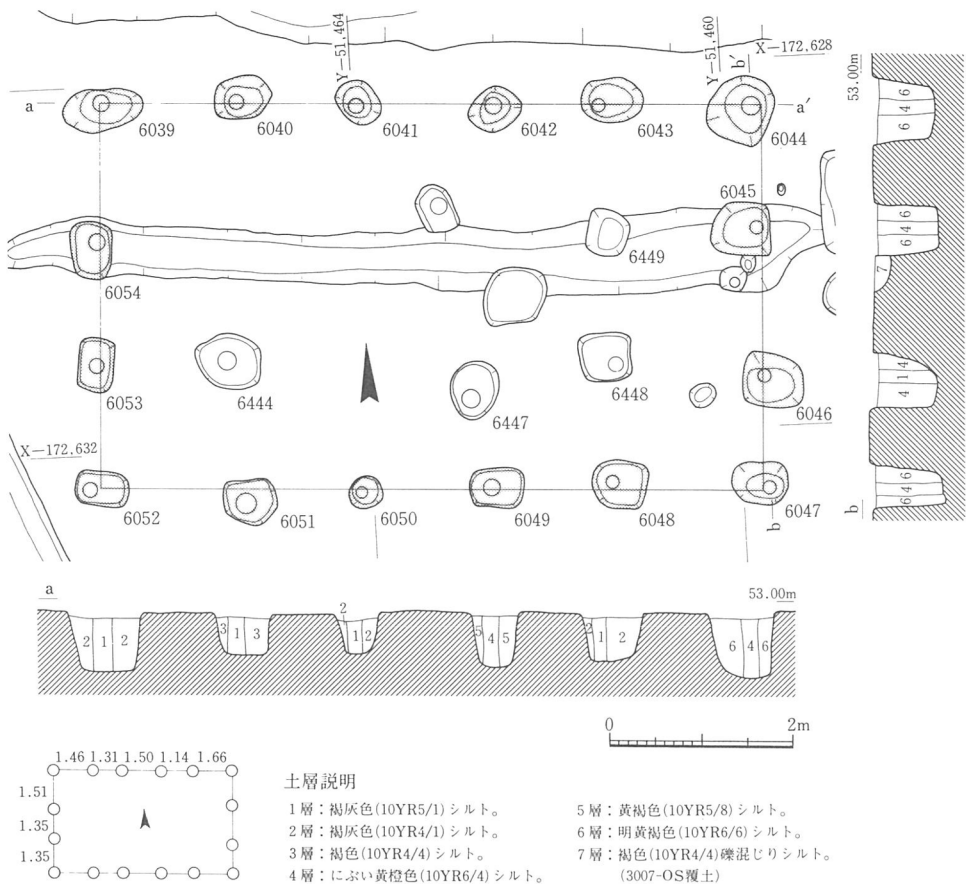
柱掘方出土遺物から、建物の建てられた時期の上限は7世紀前半と考えられる。

出土遺物 (第7表)

6027-OP・6030-OP・6031-OPより第7表に掲げた遺物が出土している。

1005-OB (第20図, 図版9, 第5表)

B06HI・HJ・HK・II・IJ・IKに位置する東西棟建物で、3007-OSと重複する。中心座標はX-172.6304, Y-51.4632である。桁行5間(総長7.21m)・梁間3間(総長4.19m)、面積30.21㎡の規模を有し、棟方位はN-87°-Wである。側柱の柱間は両端と中央が広い。妻の柱間は西側がほぼ等間隔であるのに対して、東側は中央が広い。桁行の総長は高麗尺の19尺に、梁間の総長は高麗尺の11.5尺に近い値を示す。柱筋の通る位置に6444-OP・6447-OP・6448-OP・6449-OPが存在する。このため、桁行4間・梁間3間の主屋の東側に1間分の庇が取り付く建物や、桁行4間・梁間2間の主屋の東側と南側に、それぞれ1間分ずつの庇が取り付く建物を想定することも可能である。しかし、桁行5間・梁間3間の建物を想定した方が、側柱の柱間間隔を理解しやすいので、ここではこのように想定しておきたい。したがって、やや疑問が残るものの、これらの柱は床束と理解しておくことにする。また、この建物の柱筋とは合わないが、南側の側柱と平行するように6470-OP・6472-OP・6474-OP・6475-OP・6476-OPが存在する(付図参照)。中でも、6470-OP・6472-OP・6474-OPは、側柱の柱間のほぼ中間に位置することが注意される。最近、6世紀後半から7世紀前半に建てられた庇付きの構造をもつ建物の中に、主屋の柱間の中央に庇を受ける柱が配置される例が増えており、



第20図 1005-OB平面図・土層断面図（S=1/80）

これもそれに該当する可能性が考えられる。しかし、今一つ決め手に欠けるので、ここでは可能性の域に止めておきたい。

いずれにしても、この建物は規模からみてこの集落の中心的建物の一つとみてほぼ間違いはない。さらに、この建物の北側に桁行と平行して存在する3006-OSは、0005-OBを区画するための溝である可能性も考えられる。もしも、3006-OSがこの建物の区画溝であるならば、これと平行する形で並んでいる1013-OP・1014-OP・1015-OP・1043-OPを結ぶことによって塀（または柵列）のような施設を想定することも可能である（付図参照）。ただし、3006-OS出土遺物は1005-OBに先行するようだ。

柱掘方埋土中に遺物が含まれていないため帰属時期を断定することはできないが、1002-OB・1004-OBと同様に、柱総長が高麗尺を用いて設定されている可能性が考えられることと、梁間が3間であることから古式の様相をもつ建物といえよう。

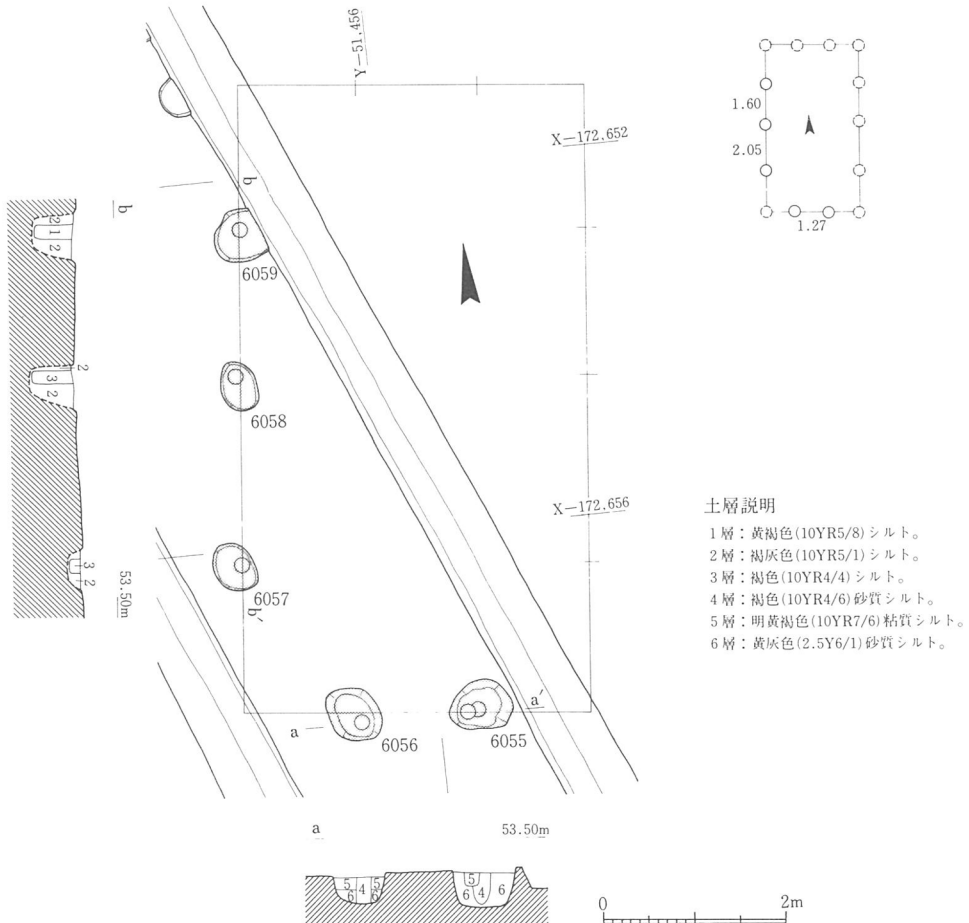
第IV章 調査成果

1006-O B (第21図, 図版10, 第5表)

B06NK・OK・OLに位置する南北棟建物である。建物の東半部が調査区外にあるため規模等は明らかではないが、桁行4間以上・梁間3間以上の建物と考えられる。西側の柱筋から棟方位はN-5°-Eと推定される。柱掘方埋土中に遺物が含まれていないため帰属時期を断定することはできないが、推定棟方位が1004-O Bと一致すること、規模等も類似する可能性が高いこと等から、1002-O B・1004-O B・1005-O Bと同時期に存在したものと思われる。

1007-O B (第22図, 図版10, 第5表)

B06RL・RM・SL・SMに位置する東西棟建物である。建物の大半が西側の調査区外にあるため規模等は明らかではないが、桁行2間以上・梁間3間(総長3.70m)の建物



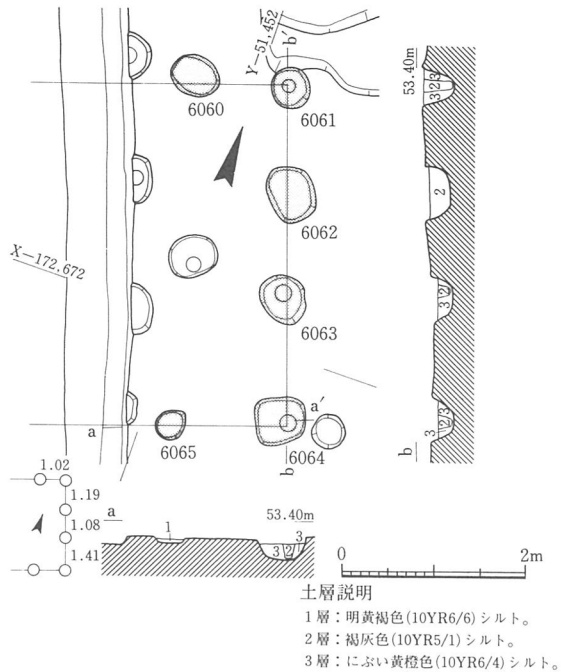
第21図 1006-O B平面図・土層断面図 (S=1/80)

と考えられる。棟方位はN-71°-Eと推定される。梁間の総長は天平尺の12.5尺に近い値を示す。柱掘方埋土中に遺物が含まれていないため帰属時期を断定することはできない。

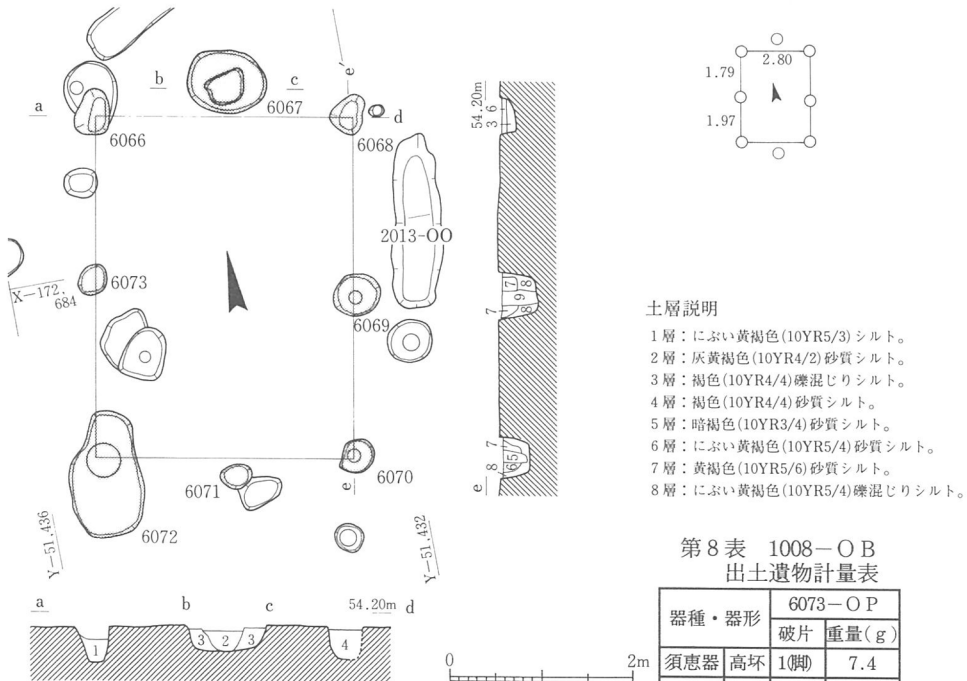
1008-O B (第23図, 図版11, 第5表)

B06U Q・UR・V Q・V Rに位置する南北棟建物で、中心座標はX-172.6844, Y-51.4337である。桁行2間(総長3.72m)・梁間1間(総長2.80m)、床面積10.42m²の規模を有し、棟方位はN-10°-Eである。妻の中央やや外側に存在する

柱穴(6067・6071)は、棟持柱に伴



第22図 1007-O B平面図・土層断面図 (S=1/80)



第23図 1008-O B平面図・土層断面図 (S=1/80)

第8表 1008-O B 出土遺物計量表

器種・器形	6073-O P	
	破片	重量(g)
須恵器 高坏	1(脚)	7.4
土師器 不明	1	6.0
合 計	2	13.4

うものと考えられる。桁行の総長は高麗尺の10.5尺または天平尺の12.5尺、梁間の総長は高麗尺の8尺または天平尺の9.5尺に近い値を示す。

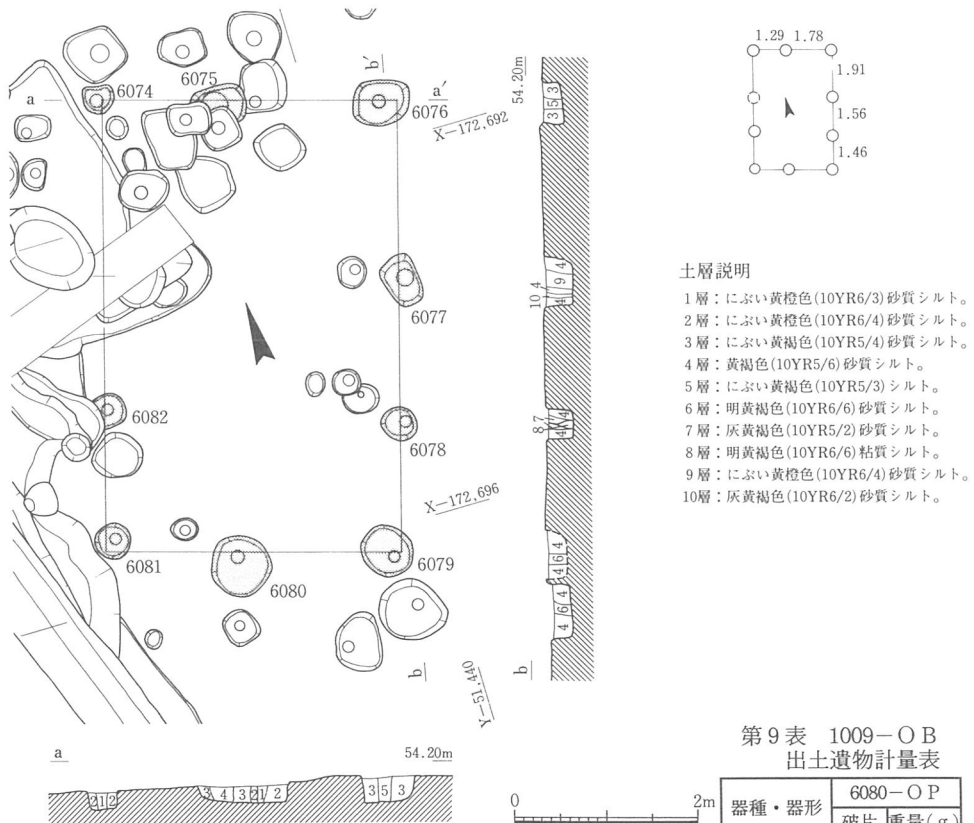
1008-O Bの桁行と、後述する2013-O Oの長軸方向とがほぼ平行することから、2013-O Oは1008-O Bに付属する土坑と考えられる。したがって、ここから出土した6世紀末から7世紀初頭の遺物が、この建物の年代を示す根拠の一つになるものと思われる。また、これは6073-O P埋土出土遺物の年代とも矛盾しない。

出土遺物（第8表）

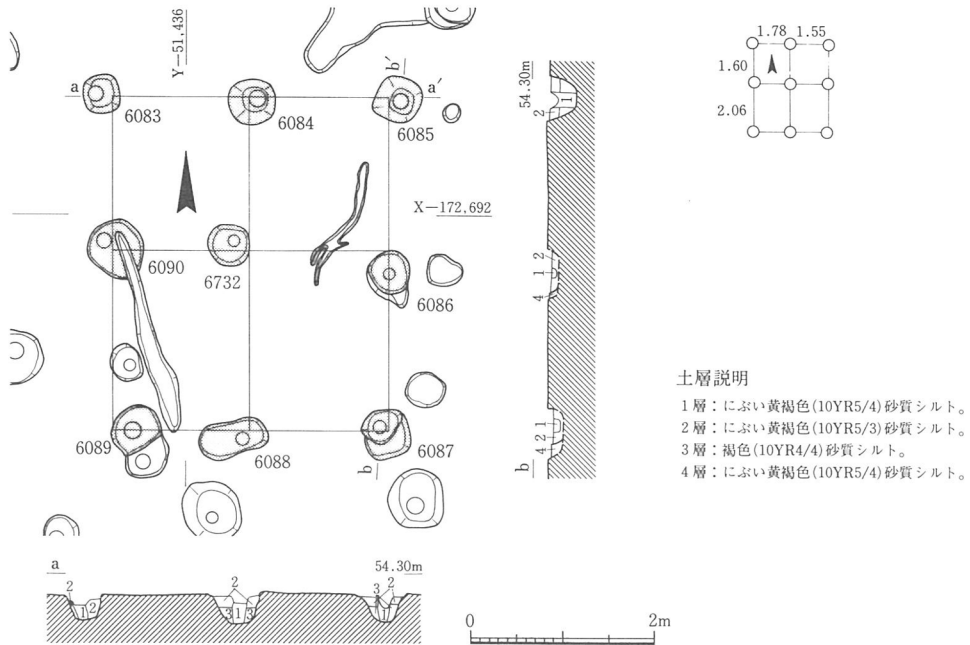
6073-O Pより土師器の小破片の他に、須恵器高坏脚部破片1点が出土している。この高坏は陶邑編年の第II型式6段階から第III型式1段階の範疇におさまるものと思われる。

1009-O B（第24図，図版11，第5表）

B06W0・WP・XO・XP・YOに位置する南北棟建物で、中心座標はX-172.6935，Y-51.4413である。桁行3間（総長4.92m）・梁間2間（総長3.20m）、床面積15.74㎡の



第24図 1009-O B平面図・土層断面図 (S=1/80)



第25図 1010-OB平面図・土層断面図（S=1/80）

規模を有し、棟方位は $N-16^{\circ}-E$ である。側柱の柱間はバラツキが大きく、妻の柱間は東側が広い。桁行の総長は天平尺の17.5尺、梁間の総長は天平尺の10.5尺に近い値を示す。6080-OP埋土出土遺物によって、建物の建てられた時期の上限は8世紀代と考えられる。

出土遺物（第9表）

6080-OPより須恵器坏身口縁部破片1点が出土している。

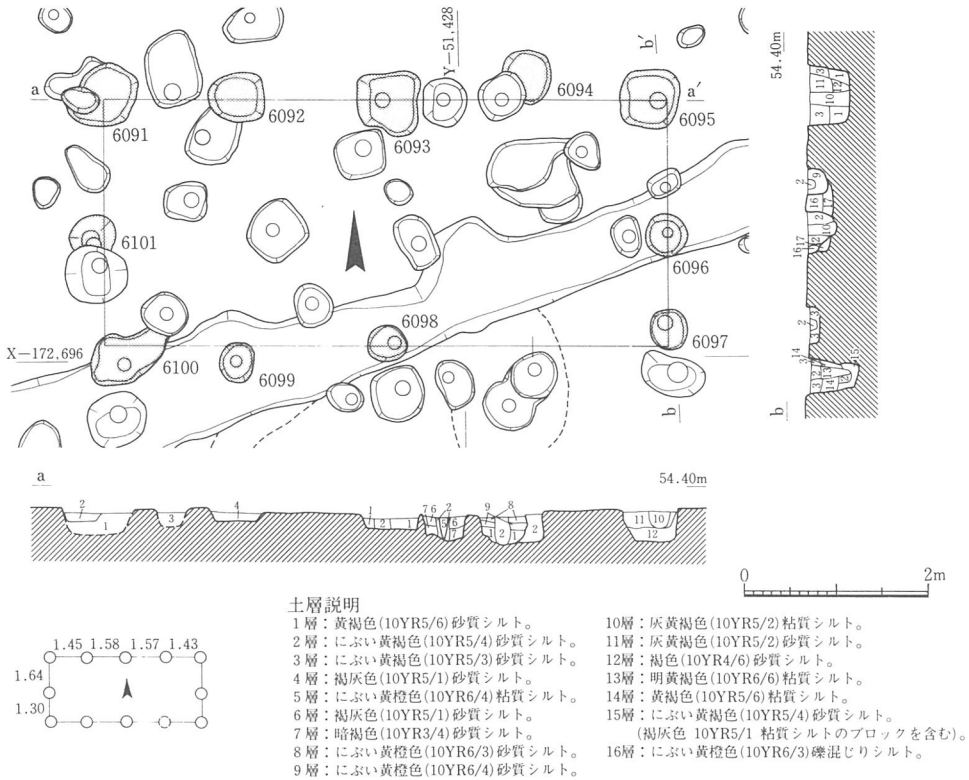
1010-OB（第25図，図版12，第5表）

B06WP・WQ・XP・XQに位置し、中心座標は $X-172.6925$ ， $Y-51.4353$ である。南北棟建物とすれば、桁行2間（総長3.63m）・梁間2間（総長3.01m）、床面積 10.93m^2 の規模を有する総柱建物で、棟方位は $N-0^{\circ}-W$ である。桁行の総長は高麗尺の10尺または天平尺の12尺、梁間の総長は高麗尺の9.5尺または天平尺の11.5尺に近い値を示すが、柱間のバラツキが大きいため、果たして尺度による設定を行っていたかどうか疑問がある。截ち割りを行った柱掘方埋土中に遺物が含まれていなかったため帰属時期を断定することはできない。

1011-OB（第26図，図版12，第5表）

B06XQ・XR・XS・YRに位置する東西棟建物で、1012-OB・3026-OSと重複

第IV章 調査成果



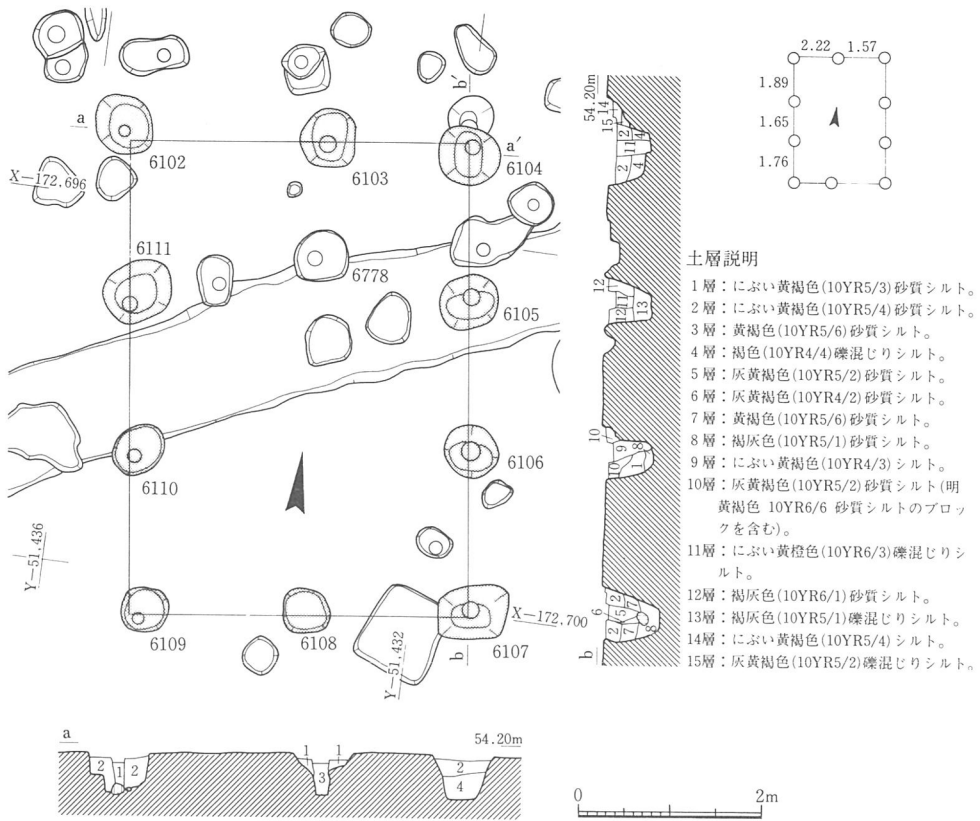
第26図 1011-OB平面図・土層断面図 (S=1/80)

第10表 1011-OB出土遺物計量表

器種・器形	6092-OP		6095-OP		6097-OP		6098-OP		6099-OP		合計		
	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)	
須恵器	坏								1	10.0	1	10.0	
	甕or壺	2	17.4								2	17.4	
	壺						1	4.0			1	4.0	
	小計	2	17.4				1	4.0	1	10.0	4	31.4	
土師器	甕				1	19.6					1	19.6	
	不明	8	10.5	8	27.8	3	1.4	1	3.8	1	3.2	21	46.7
	小計	8	10.5	8	27.8	4	21.0	1	3.8	1	3.2	22	66.3
合計	10	27.9	8	27.8	4	21.0	2	7.8	2	13.2	26	97.7	

する。中心座標はX-172.6947, Y-51.4288である。桁行4間(総長6.13m)・梁間2間(総長2.67m)、床面積16.37㎡の規模を有し、棟方位はN-90°-Wである。側柱の柱間はバラツキがあるが、中央の2間が両端の柱間よりやや広く、妻の柱間は北側が広い。桁行総長は高麗尺の17.5尺に、梁間総長は高麗尺の7尺に近い値を示す。6104-OP・6101-OPの切り合いから、1011-OBの方が1012-OBよりも古い。柱掘方埋土中の遺物によって、建物の建てられた時期の上限は7世紀代と考えられる。

第2節 掘立柱建物（OB）



第27図 1012-OB平面図・土層断面図（S=1/80）

出土遺物（第10表）

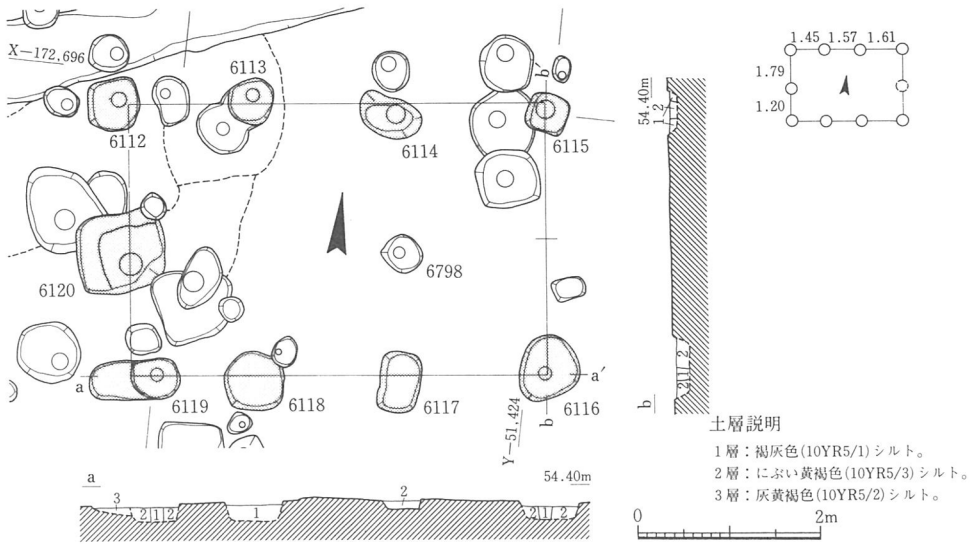
6092-OP・6095-OP・6097-OP・6098-OP・6099-OPより第10表に掲げた遺物が出土している。

第11表 1012-OB出土遺物計量表

器種・器形	6104-OP		6105-OP		6107-OP		合計		
	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)	
須恵器	坏	1(口)	3.5				1	3.5	
	甕or壺			1	18.5		1	18.5	
	不明	1	0.9				1	0.9	
	小計	2	4.4	1	18.5		3	22.9	
土師器	甕				1	13.1	1	13.1	
	不明	1	2.4	2	3.1	2	4.0	5	9.5
	小計	1	2.4	2	3.1	3	17.1	6	22.6
合計	3	6.8	3	21.6	3	17.1	9	45.5	

1012-OB（第27図，図版13，第5表）

B06XQ・XR・YQ・YR・B11AQ・ARに位置する南北棟建物で、1011-OB・3026-OSと重複する。中心座標はX-172.6977，Y-51.4335である。桁行3間（総長5.16m）・梁間2間（総長3.69m）、床面積19.04㎡の規模を有し、棟方位はN-7°-Wである。側柱の柱間は、西側柱の北端がやや広いもののほぼ等間隔。妻は南側がほぼ等間隔であるのに対し、北側は西端の方が幅が広い。6102-OP・6107-OPには河原石の礎盤



第28図 1013-OB平面図・土層断面図 (S=1/80)

第12表 1013-OB出土遺物計量表

器種・器形	6112-OP		6115-OP		6118-OP		6119-OP		合計		
	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)	
須恵器	坏	1	8.7	2 (台1)	13.7				3	22.4	
	甕or壺					4 (口2)	45.6	3	23.0	7	68.6
	小計	1	8.7	2	13.7	4	45.6	3	23.0	10	91.0
土師器	坏	3	3.8	2	2.0				5	5.8	
合計	4	12.5	4	15.7	4	45.6	3	23.0	15	96.8	

がある。桁行総長は天平尺の17尺に、梁間総長は天平尺の13尺に近い値を示す。6104-OP埋土出土の遺物によって、建物の建てられた時期の上限は7世紀前半と考えられる。

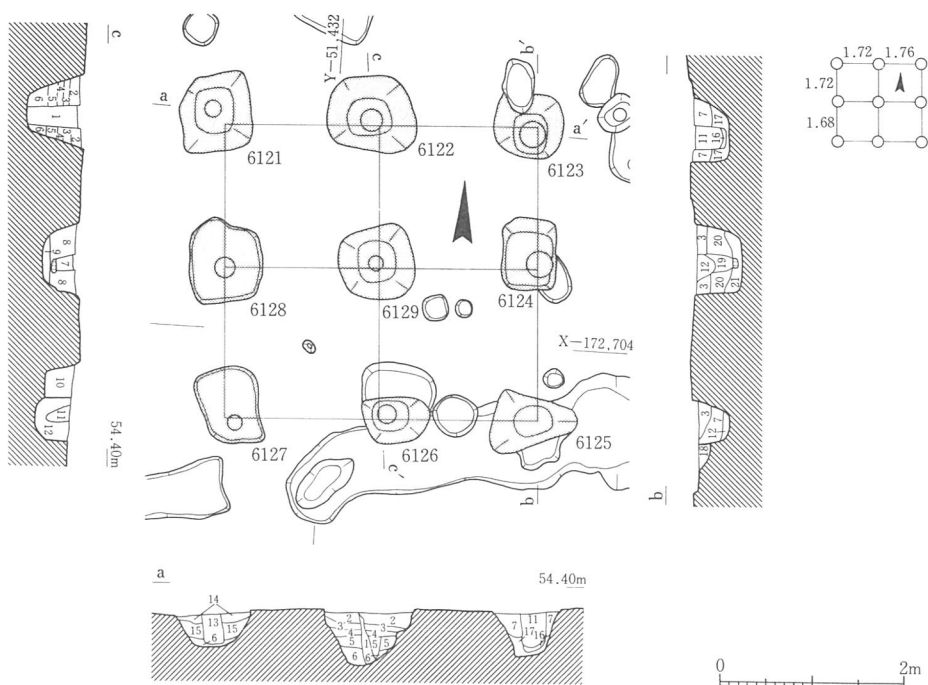
出土遺物 (第11表)

6104-OP・6105-OP・6107-OPより第11表に掲げた遺物が出土している。6104-OPの埋土に含まれていた遺物は、須恵器坏Hの口縁部の破片である。

1013-OB (第28図, 図版14, 第5表)

B06XS・XT・YR・YS・YTに位置する東西棟建物で、中心座標はX-172.6976, Y-51.4262である。桁行3間(総長4.53m)・梁間2間(総長2.97m)、床面積13.45㎡の規模を有し、棟方位はN-84°-Eである。柱間にはややバラツキがみられる。東側の妻の中央の柱は検出できなかった。柱位置は今一つ正確ではないが、強いて柱間を想定すれば、桁行総長は天平尺の16尺、梁間総長は天平尺の9.5尺に近い値を示す。6115-OP埋土出土の遺物によって、建物の建てられた時期の上限は7世紀後半と考えられる。

第2節 掘立柱建物（OB）



土層説明

- 1層：にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質シルト。
- 2層：褐灰色(10YR6/1)砂質シルト。
- 3層：黄褐色(10YR5/6)砂質シルト。
- 4層：黄褐色(10YR5/6)砂質シルト(褐灰色10YR5/1 粘質シルトのブロックを含む)。
- 5層：黄褐色(10YR5/6)砂質シルト(褐灰色10YR5/1 粘質シルトのブロックを多少含む)。
- 6層：褐灰色(10YR6/1)礫混じりシルト。
- 7層：にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質シルト。
- 8層：にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質シルト。
- 9層：褐灰色(10YR5/1)砂質シルト。
- 10層：黄褐色(10YR5/6)粘質シルト。
- 11層：灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルト。
- 12層：褐色(10YR4/4)砂質シルト。
- 13層：にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質シルト(褐灰色10YR6/1 粘質シルトのブロックを含む)。
- 14層：にぶい黄褐色(10YR5/4)礫混じりシルト。
- 15層：褐色(10YR4/6)礫混じりシルト。
- 16層：褐灰色(10YR5/1)粘質シルト。
- 17層：褐色(10YR4/6)砂質シルト。
- 18層：にぶい黄褐色(10YR6/4)粘質シルト。
- 19層：にぶい黄褐色(10YR6/4)シルト。
- 20層：明黄褐色(10YR6/6)砂質シルト。
- 21層：褐灰色(10YR6/1)粘質シルト。

第29図 1014-OB平面図・土層断面図 (S=1/80)

第13表 1014-OB出土遺物計量表

器種・器形	6121-OP		6122-OP		6125-OP		6126-OP		6128-OP		合計	
	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)
須恵器	坏	2(口) 31.6					1	23.3	2	11.7	5	66.6
	甕or壺						1	27.4	3	21.8	4	49.2
	小計	2 31.6					2	50.7	5	33.5	9	115.8
土師器	坏								2	4.5	2	4.5
	甕			1	74.6	1	9.0				2	83.6
	小計			1	74.6	1	9.0			2	4.5	4
合計	2	31.6	1	74.6	1	9.0	2	50.7	7	38.0	13	203.9

出土遺物（第12表）

6112-OP・6115-OP・6118-OP・6119-OPより第12表に掲げた遺物が出土している。6115-OPの埋土に含まれていた遺物は、須恵器坏Bの高台部の破片である。

1014-OB（第29図，図版14，第5表）

第IV章 調査成果

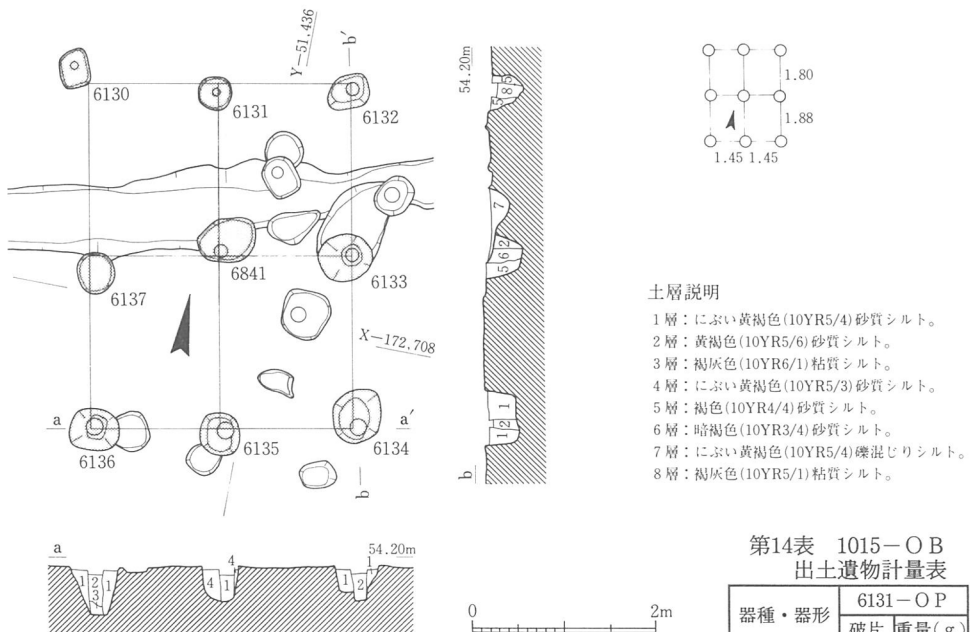
B11AQ・AR・BQ・BRに位置し、3027-OSと重複する。中心座標はX-172.7033, Y-51.4314である。東西棟建物とすれば、桁行2間(総長3.40m)・梁間2間(総長3.20m)、床面積10.88m²の規模を有する総柱建物で、棟方位はN-87°-Eである。3027-OSとの切り合い関係は、1014-OBの方が新しい。柱掘方は隅円方形で、他の建物に比べて規模が大きくしっかりしている。6124-OP・6125-OPは柱が抜き取られている。6124-OP・6129-OPには石の礎盤がある。桁行総長は高麗尺の10尺または天平尺の12尺、梁間総長は高麗尺の9尺または天平尺の11尺に近い値を示す。6121-OP埋土出土の遺物によって、建物の建てられた時期の上限は7世紀前半と考えられる。

出土遺物(第13表)

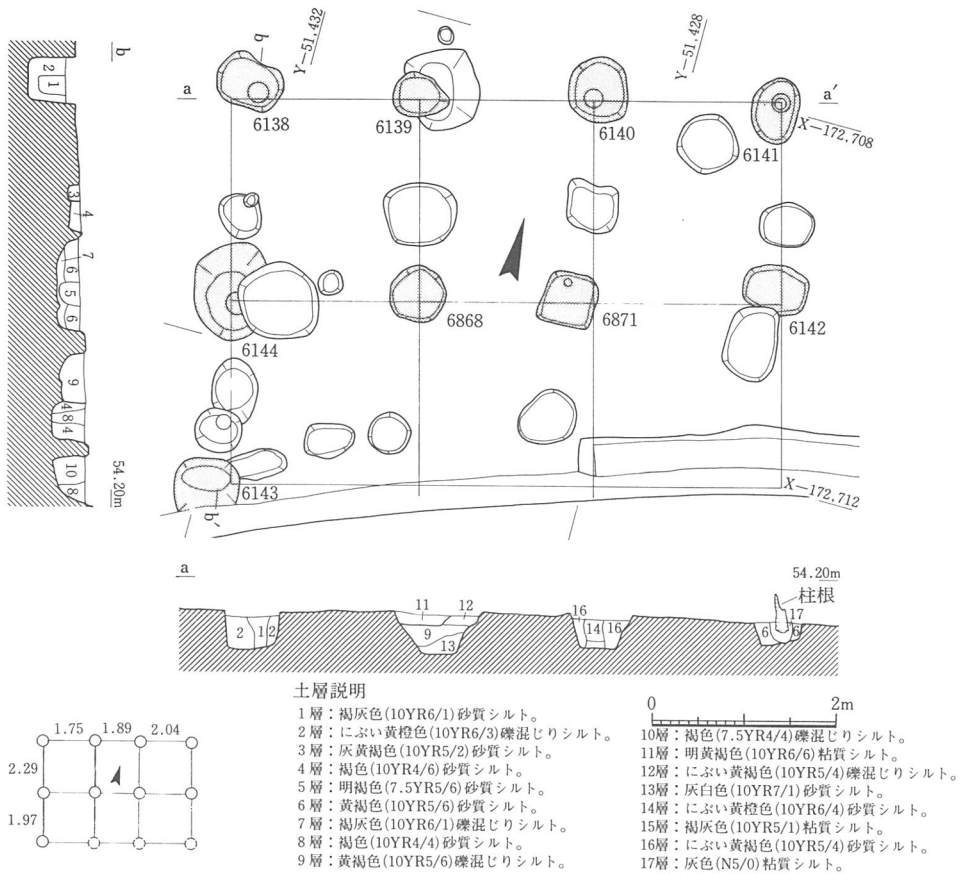
6121-OP・6122-OP・6125-OP・6126-OP・6128-OPより第13表に掲げた遺物が出土している。6121-OPの埋土に含まれていた遺物は、須恵器坏Hの口縁部の破片である。

1015-OB(第30図, 図版15, 第5表)

B11BP・BQ・CP・CQに位置し、3027-OSと重複する。中心座標はX-172.7074, Y-51.4365である。南北棟建物とすれば、桁行2間(総長3.76m)・梁間2間(総長2.84m)、床面積10.68m²の規模を有する総柱建物で、棟方位はN-11°-Wである。



第30図 1015-OB平面図・土層断面図(S=1/80)



第31図 1016-OB平面図・土層断面図（S=1/80）

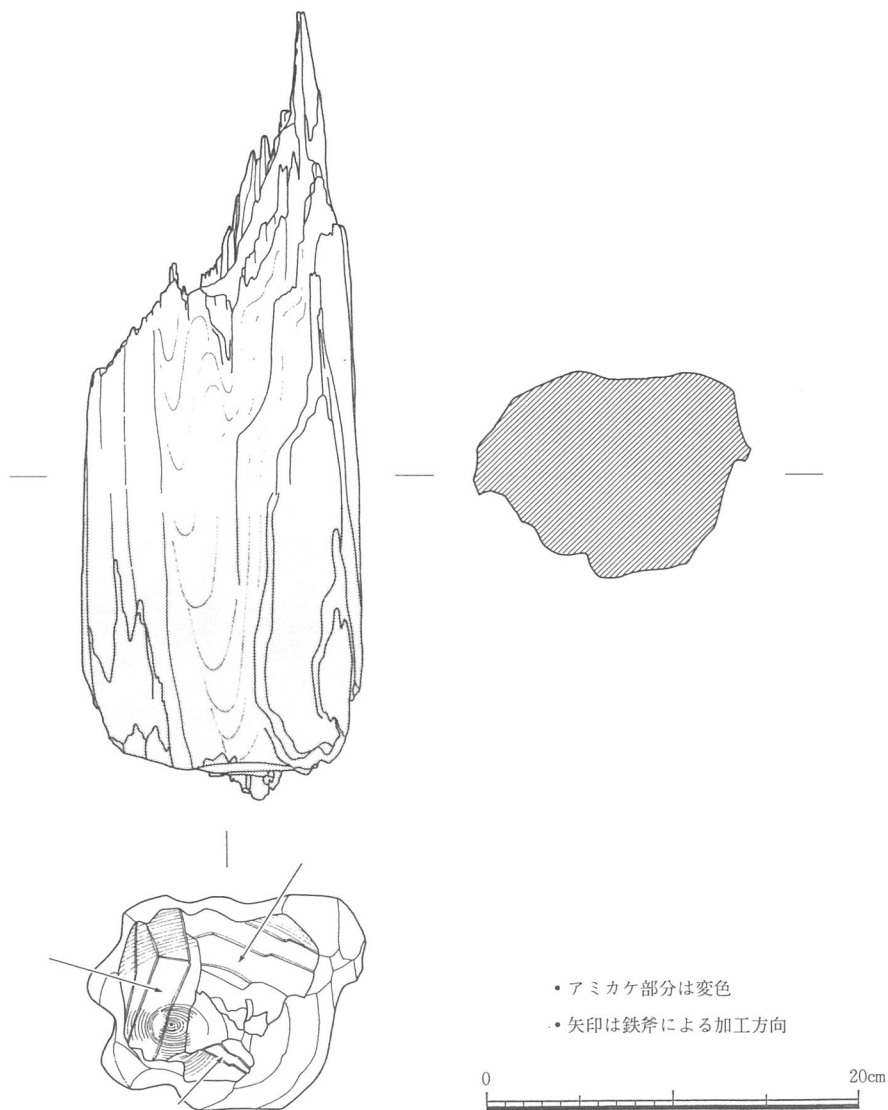
3027-OSとの切り合い関係は、1015-OBの方が新しい。柱間はバラツキが大きく、桁行総長・梁間総長ともに高麗尺・天平尺では切の良い数値を得ることができない。6131-OP埋土出土の遺物によって、建物の建てられた時期の上限は7世紀前半と考えられる。

出土遺物（第14表）

6131-OPより須恵器坏Hの破片が1点出土している。

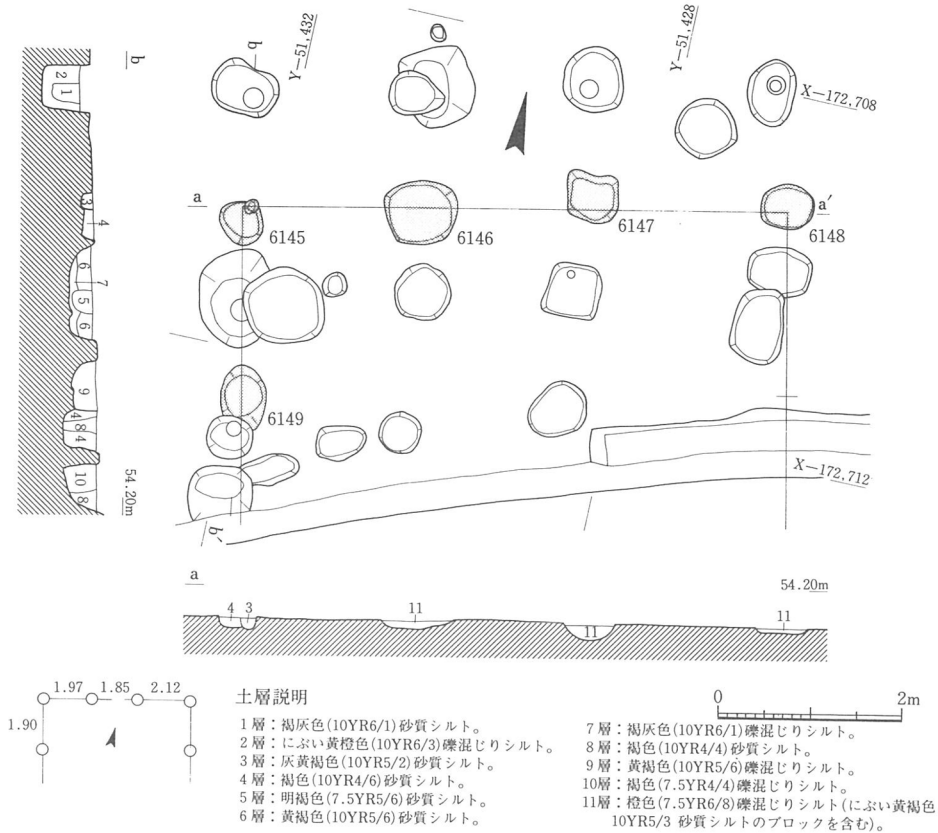
1016-OB（第31図，図版15，第5表）

B11BS・CQ・CR・CS・DQ・DR・DSに位置し、1017-OBと重複する。中心座標はX-172.7107，Y-51.4293である。南側の桁行が調査区外にあるため規模等を正確に求めることはできないが、桁行3間（総長5.99m）・梁間2間（総長4.19m）、床面積25.10㎡の規模を有する総柱の東西棟建物と思われる。棟方位はN-75°-Eである。調査期間を短縮する手段として、遺構面まで一気に機械掘削をした際、誤って地山を一部削



第32図 6141-OP出土柱根実測図 (S=1/4)

り込んでしまったため柱穴の残りは悪い。それにもかかわらず、柱掘方が20cm以上遺存していることから、北側に隣接する1014-OBと同様しっかりした建物であったと考えられる。6141-OPには柱根が遺存していた(第32図)。柱穴に重複が認められないため、1017-OBとの新旧関係は明らかではない。桁行総長は天平尺の19.5尺、梁間総長は天平尺の14.5尺に近い値を示す。また、柱掘方埋土中に遺物が含まれていなかったため帰属時期を断定することはできない。



第33図 1017-OB平面図・土層断面図（S=1/80）

出土遺物（第32図，図版116）

6141-OPに遺存していた柱根は、長さ42.3cm、幅15.0cm、厚さ11.1cmの大きさと、腐食が進んでいるものの、断面図上側の面はほぼ原形をとどめているらしく、長方形の断面を呈する柱と考えられる。柱の端部には加工痕跡が認められる。奈良国立文化財研究所の光谷氏の鑑定によれば、樹種は樺である。

1017-OB（第33図，図版15，第5表）

B11CQ・CR・CS・DQ・DR・DSに位置し、1016-OBと重複する。建物の南半部が調査区外にあるため建物の規模等を正確に求めることはできないが、桁行3間（総長5.93m）・梁間2間以上の規模を有する総柱の東西棟建物と思われる。棟方位はおよそN-77°-Eである。1016-OBと同じ理由で柱穴の遺存状態はきわめて悪い。柱痕跡が検出できなかったので正確さを欠くが、桁行総長は天平尺の20尺に近い値をとるようだ。前述したように、1016-OBとの新旧関係は明らかではない。截ち割りを行った柱掘方理

土中に遺物は含まれていなかった。

1018-OB (第34図, 図版16, 第5表)

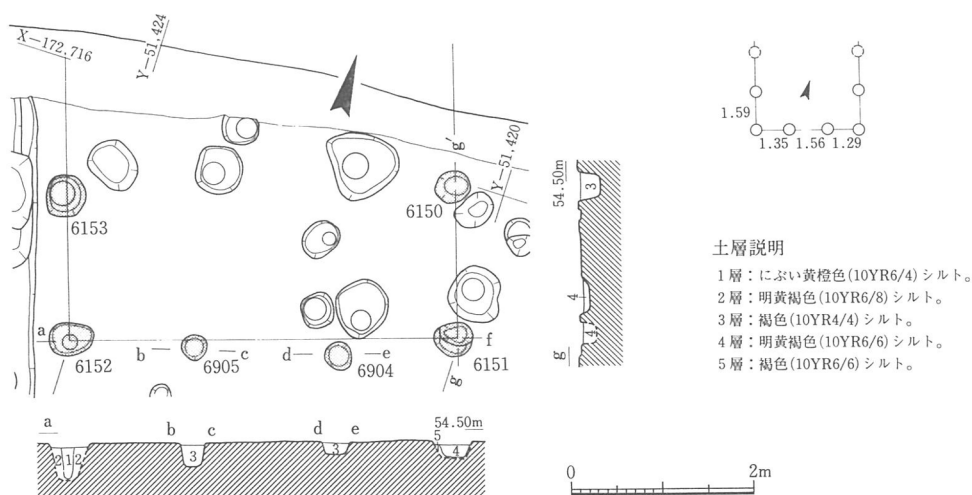
B11DT・ES・ET・EUに位置し、1019-OB・1020-OBと重複する。建物の大部分が北側の調査区外にあるため規模等は明らかではないが、桁行2間以上・梁間3間(総長4.21m)の南北棟建物と思われる。柱掘方径は約40cmと小振りである。妻の柱はやや外側にはり出し、中央の柱間がやや広い。梁間総長は高麗尺・天平尺では切の良い数値を得ることができない。切り割りをを行った柱掘方埋土中に遺物は含まれていなかった。

1019-OB (第35図, 図版17, 第5表)

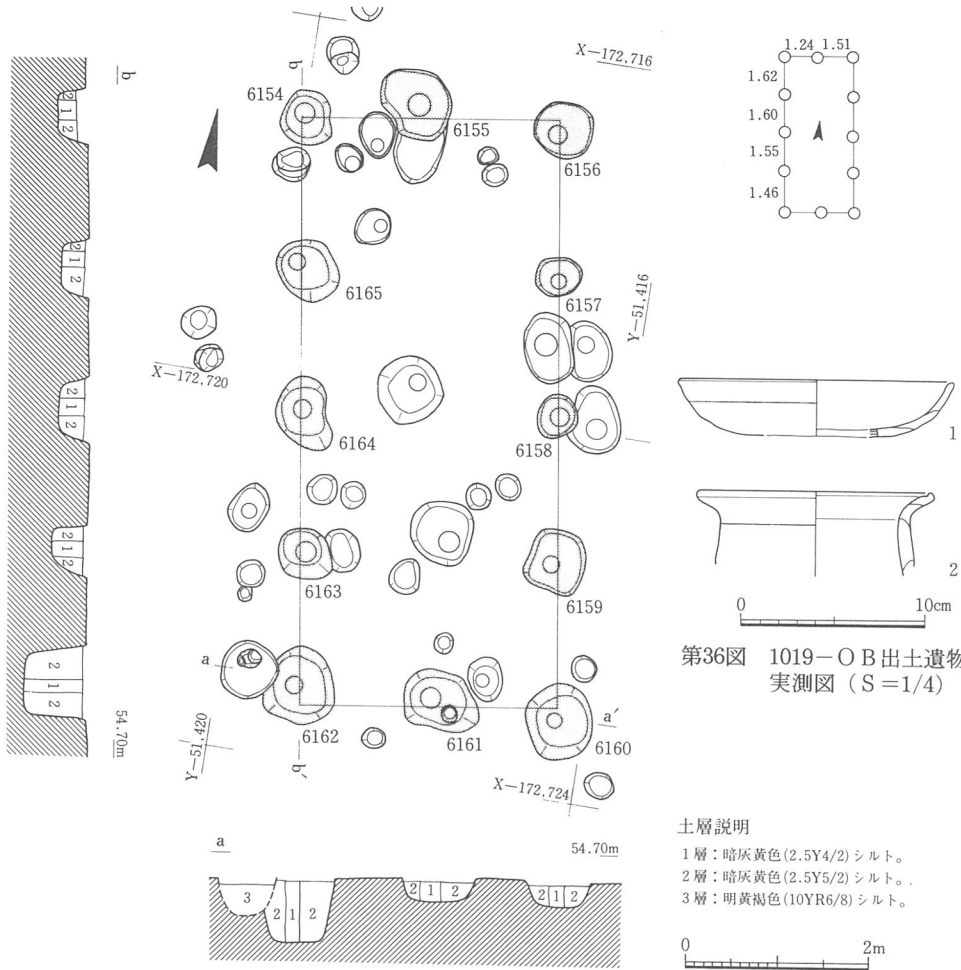
B11ET・EU・FU・FVに位置し、1018-OB・1020-OB・1021-OBと重複する。中心座標はX-172.7201, Y-51.4181である。桁行4間(総長6.40m)・梁間2間(総長2.84m)、床面積18.18㎡の規模を有する南北棟建物で、棟方位はN-11°-Wである。側柱の柱間はほぼ等間隔であるが、妻の中央の柱はやや偏った位置にある。桁行総長は高麗尺の17.5尺に、梁間総長は高麗尺の7尺に近い値を示す。建物の建てられた時期は、6158-OP出土遺物が上限(8世紀前半)を、また、6159-OP・6162-OP出土遺物が下限(8世紀後半)を示している。

出土遺物(第36図, 第15・78表)

第36図1・2に図示した遺物の他に、6156-OP・6157-OP・6158-OP・6159-OP・6162-OP・6164-OPより第15表に掲げた遺物が出土している。



第34図 1018-OB平面図・土層断面図(S=1/80)



第36図 1019-OB出土遺物
実測図 (S=1/4)

土層説明

- 1層：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト。
- 2層：暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト。
- 3層：明黄褐色(10YR6/8)シルト。

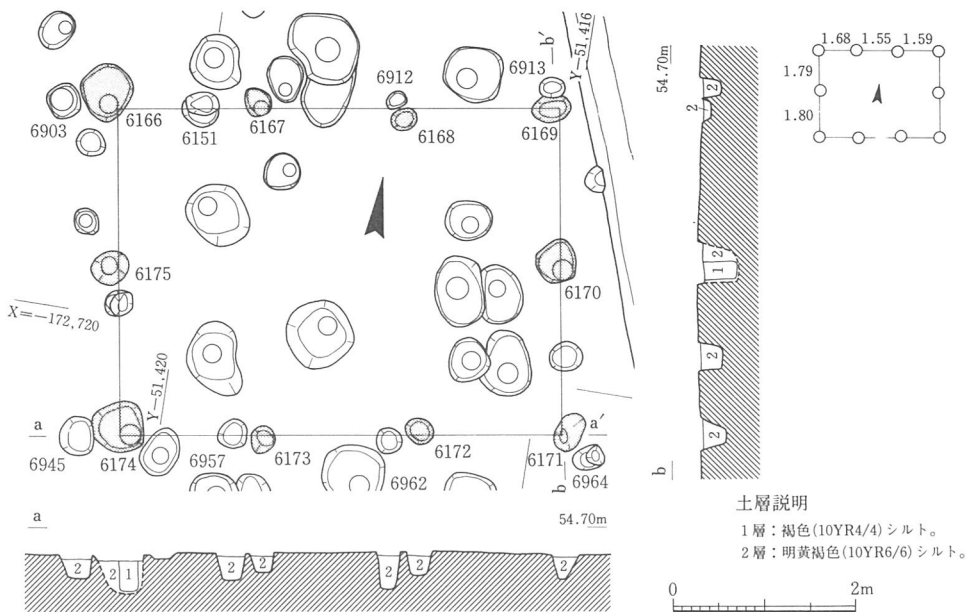
第35図 1019-OB平面図・土層断面図 (S=1/80)

第15表 1019-OB出土遺物計量表

器種・器形	6156-OP		6157-OP		6158-OP		6159-OP		6162-OP		6164-OP		合計		
	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)	
須 恵 器	坏				3(口1)	21.7	2	3.8					5	25.5	
	甕or壺				2	12.5	1	6.3	1	9.2	1	4.9	5	32.9	
	小計				5	34.2	3	10.1	1	9.2	1	4.9	10	58.4	
土 師 器	坏						1	2.3					1	2.3	
	甕						1	8.8	3(口1)	26.4			4	35.2	
	不明	2	2.4	2	5.3	1	3.0	10	25.4			2	2.3	17	38.4
	小計	2	2.4	2	5.3	1	3.0	12	36.5	3	26.4	2	2.3	22	75.9
合計	2	2.4	2	5.3	6	37.2	15	46.6	4	35.6	3	7.2	32	134.3	

第36図1は6159-OP、2は6162-OPより出土した。いずれも遺構検出面直下よりの出土であり、これらの遺物がこの建物の時期を決定する根拠にはならない。なお、6158-

第IV章 調査成果



第37図 1020-O B平面図・土層断面図 (S=1/80)

第16表 1020-O B出土遺物計量表 (各OP上段=破片数・下段=重量g, □=口縁)

柱穴	須 恵 器				土 師 器				合 計
	坏	壺or甕	不明	小計	坏	甕	不明	小計	
6166-O P	1			1	1			1	2
	5.5			5.5	9.1			9.1	14.6
6171-O P		1		1			2	2	3
		1.9		1.9			2.1	2.1	4.0
6172-O P					1			1	1
					1.6			1.6	1.6
6173-O P						1 (口)		1 (口)	1 (口)
						13.8		13.8	13.8
6174-O P					6 (口1)	5	5	16 (口1)	16 (口1)
					18.6	28.8	4.4	51.8	51.8
6175-O P			1 (口)	1 (口)					1 (口)
			2.0	2.0					2.0
6945-O P	1			1					1
	14.0			14.0					14.0
6957-O P						1		1	1
						12.7		12.7	12.7
合 計	2	1	1 (口)	4 (口1)	8 (口1)	7 (口1)	7	22 (口2)	26 (口3)
	19.5	1.9	2.0	23.4	29.3	55.3	6.5	91.1	114.5

O Pの埋土には須恵器坏Hの口縁部破片が含まれていた。

1020-O B (第37図, 図版17, 第5表)

B11ET・EU・EV・FT・FU・FVに位置し、1018-O B・1019-O B・1021-

OBと重複する。中心座標はX-172.7192, Y-51.4183である。桁行3間（総長4.84m）・梁間2間（総長3.54m）、床面積17.13㎡の規模を有する東西棟建物で、棟方位はN-80°-Eである。桁行・梁間ともほぼ等間である。桁行総長は高麗尺・天平尺とも切の良い数値を得ることができないが、梁間総長は高麗尺の10尺または天平尺の12尺に近い値を示す。1020-OBを想定した各柱穴の脇には、それとほぼ同規模の柱穴が並んでおり、この建物は建て直しが行われた可能性が高い。第37図に示した建物を1020-a-OBとするならば、6903-OP・6151-OP・6912-OP・6913-OP・6964-OP・6962-OP・6957-OP・6945-OPで構築される建物が1020-b-OBとなる。きわめて微妙ではあるが、6913-OP・6969-OPの重複によって、1020-b-OBの方が新しいようだ。つまり、1020-a-OBは建て直しによって床面積をやや拡張したことになり、1020-a-OB→1020-b-OBという新旧関係を想定することができる。

6166-OP出土遺物によって、1020-a-OBの建てられた時期の上限は、8世紀代と考えられる。

出土遺物（第16表）

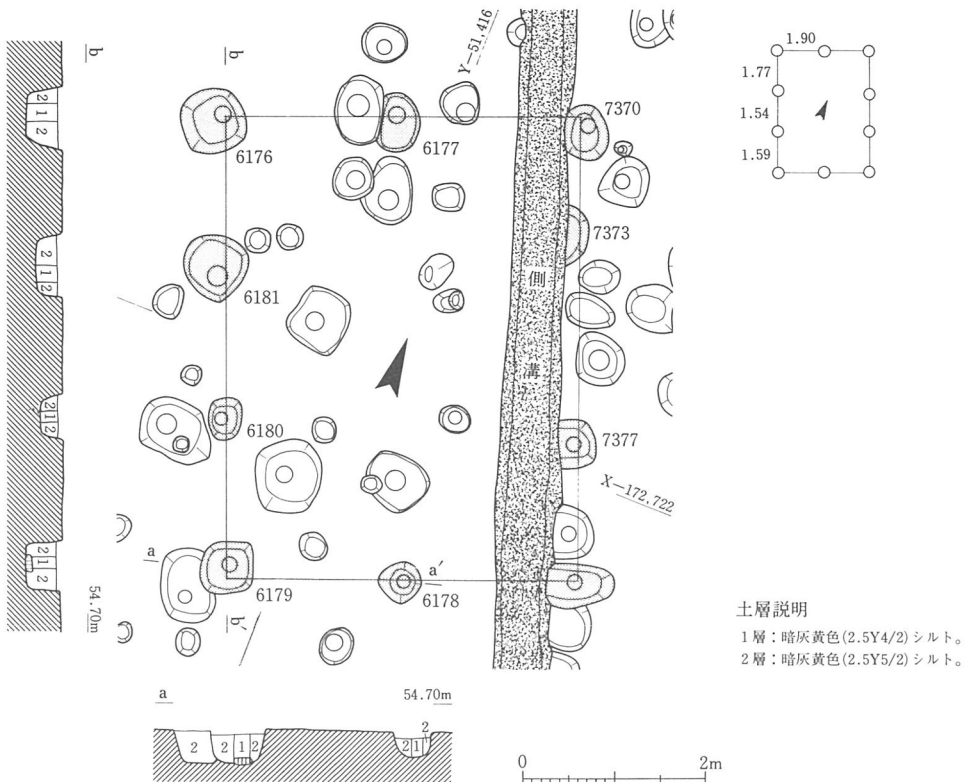
6166-OP・6171-OP・6172-OP・6173-OP・6174-OP・6175-OPより第16表に掲げた遺物が出土している。また、1020-b-OBに帰属すると思われる6945-OP・6957-OPからも、第16表に掲げた遺物が出土している。なお、6166-OPの埋土に含まれていた遺物は、須恵器坏AⅣの底部の破片である。

1021-OB（第38図，図版17，第5表）

B11EU・EV・FU・FV・GUに位置し、1019-OB・1020-OBと重複する。中心座標はX-172.7226, Y-51.4156である。桁行3間（総長5.00m）・梁間2間（総長4.00m）、床面積20.00㎡の規模を有する南北棟建物で、棟方位はN-20°-Wである。東側の側柱の中央の柱間が広いが、他はほぼ等間である。建物の大半は1987年度の調査時に検出されていたが、東側の側柱は1988年度の擁壁調査時に検出された。年度が異なる調査のため計測値の誤差はやや大きいと思われるが、桁行総長は高麗尺の14尺に、梁間総長は高麗尺の11尺に近い値を示す。なお、南側に隣接する1024-OBは棟方位・規模等の点で類似性が高いことから、この2棟は並棟であった可能性が高い。6178-OP埋土出土の遺物によって、建物の建てられた時期の上限は8世紀代と考えられる。

出土遺物（第17表）

6176-OP・6177-OP・6178-OP・6179-OP・6181-OPより第17表に掲げた遺



第38図 1021-OB平面図・土層断面図 (S=1/80)

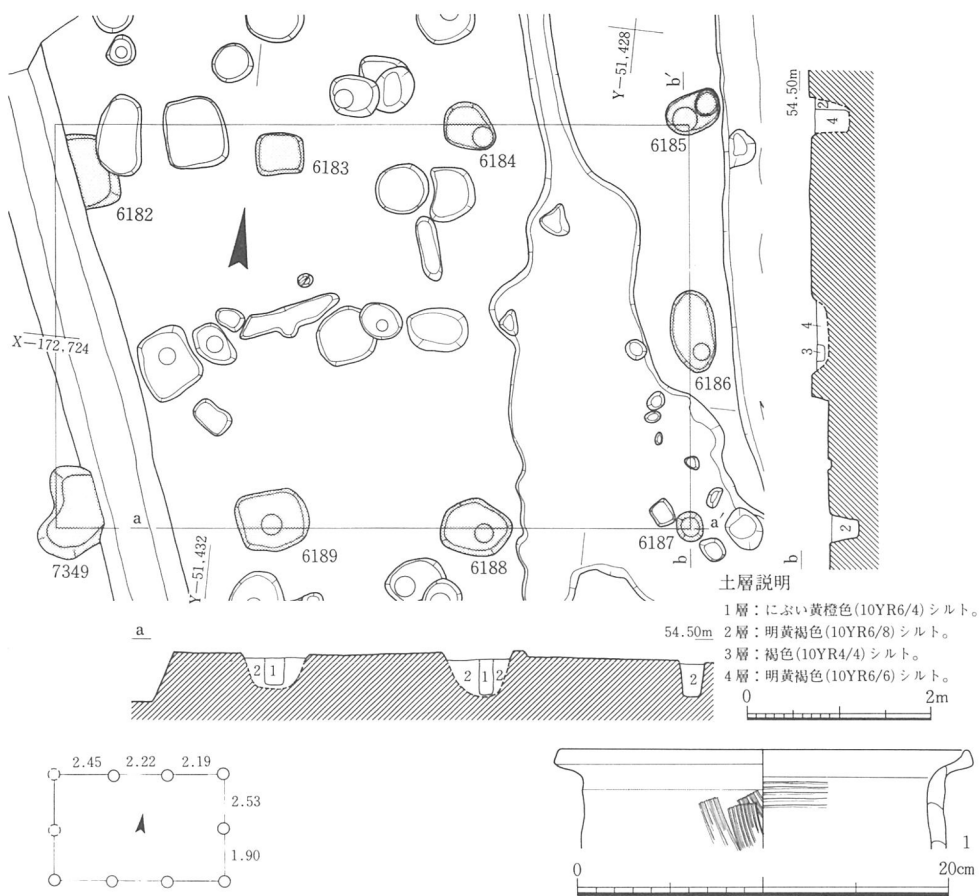
第17表 1021-OB出土遺物計量表

器種・器形	6176-OP		6177-OP		6178-OP		6179-OP		6181-OP		合計	
	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)
須恵器	坏				2	9.9	4(口2)	10.1			6	20.0
	甕or壺								1	35.7	1	35.7
	小計				2	9.9	4	10.1	1	35.7	7	55.7
土師器	坏				9	17.0	4	11.0			13	28.0
	甕	1	8.3	1	5.1	2	17.3	3	24.1		7	54.8
	不明			3	5.1						3	5.1
	小計	1	8.3	4	10.2	11	34.3	7	35.1		23	87.9
合計	1	8.3	4	10.2	13	44.2	11	45.2	1	35.7	30	143.6

物が出土している。なお、6178-OPの埋土に含まれていた遺物は、須恵器坏A IVの口縁部から底部にかけての破片である。

1022-OB (第39図, 第5表)

B11FQ・FR・FS・GQ・GR・GSに位置する東西棟建物で、5041-OX・5050-OXと重複する。中心座標はX-172.7235, Y-51.4305である。桁行3間(総長6.94m)・梁間2間(総長4.42m)、床面積30.67㎡の規模を有し、棟方位はN-84°-Eである。



第39図 1022-OB平面図・土層断面図（S=1/80）

第40図 1022-OB出土遺物実測図（S=1/4）

第18表 1022-OB出土遺物計量表

器種・器形	6183-OP		6185-OP		6186-OP		6188-OP		6189-OP		合計		
	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)	
須恵器	坏				1	5.6	1	9.3			2	14.9	
	甕or壺		2	30.7							2	30.7	
	壺		2	57.1			1	97.5			3	154.6	
	小計		4	87.8	1	5.6	2	106.8			7	200.2	
土師器	坏		11(口3)	37.7			1(口)	2.4	1	1.2	13	41.3	
	甕	1	11.7	3(口1)	40.3			2	10.1	1	4.9	7	67.0
	小計	1	11.7	14	78.0			3	12.5	2	6.1	20	108.3
合計	1	11.7	18	165.8	1	5.6	5	119.3	2	6.1	27	308.5	

北側の側柱筋はバラツキが大きい。建物の大半は1987年度の調査時に検出されていたが、西南隅の柱（7349-OP）は1988年度の擁壁調査時に検出された。西側の妻の中央の柱は、排水溝掘削時に飛ばしてしまったようだ。柱痕跡が明らかではない柱穴が多いことと、年度が異なる調査のため計測値の誤差はやや大きいと思われるが、桁行総長は高麗尺の19.5

尺または天平尺の23.5尺、梁間は高麗尺の12.5尺または天平尺の15尺に近い値を示す。6185-OP埋土出土の遺物によって、建物の建てられた時期の上限は8世紀代と考えられる。

出土遺物（第40図，第18・79表）

第40図1に図示した遺物の他に、6183-OP・6185-OP・6186-OP・6188-OP・6189-OPより第18表に掲げた遺物が出土している。なお、第40図1は6185-OPより出土した。また、6185-OP・6188-OPの埋土に含まれていた遺物は、いずれも須恵器壺の底部破片である。また、図示した以外に6189-OPより有孔土製品1点・4.4gが出土している。

1023-OB（第41図，第5表）

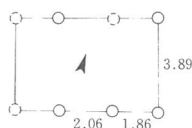
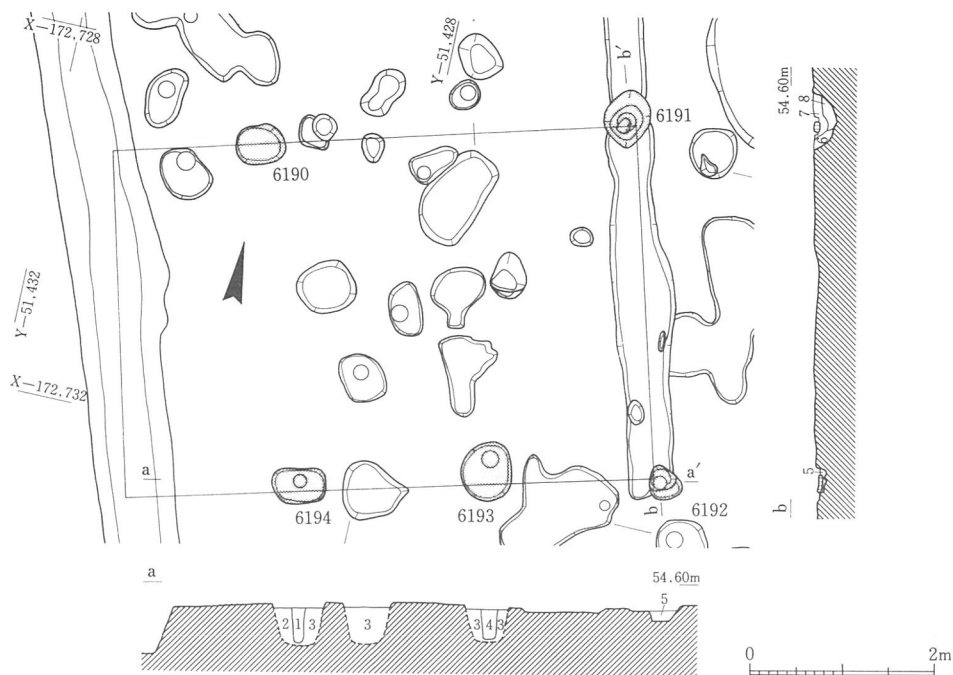
B11GS・HR・HS・IR・ISに位置し、1027-OB・3030-OS・5041-OXと重複する。中心座標はX-172.7303，Y-51.4282である。桁行3間・梁間2間（総長3.90m）の規模を有する東西棟建物で、棟方位はN-75°-Eである。西側の妻の柱穴を排水溝掘削時に飛ばしてしまったため、桁行の総長を確定できず、床面積も明らかではない。6191-OP・6192-OPには石の礎盤がある。この二つの柱穴は、3030-OSと重複しているため遺存状態は悪い。梁間総長は高麗尺の11尺に近い値を示す。なお、6194-OP検出面直下から出土した遺物が、この建物の建てられた時期の上限（8世紀代）を示しているものと思われる。

出土遺物（第19表）

6191-OP・6192-OP・6194-OPより第19表に掲げた遺物が出土している。なお、6194-OP検出面直下から出土した遺物は、須恵器坏Bの口縁部破片である。

1024-OB（第42図，図版17，第5表）

B11GU・GV・GW・HV・HWに位置し、1025-OB・1026-OB・5041-OXと重複する。中心座標はX-172.7282，Y-51.4154である。桁行3間（総長6.03m）・梁間2間（総長3.80m）、床面積22.91m²の規模を有する南北棟建物で、棟方位はN-21°-Wである。6198-OP・6213-OPの切り合い関係から、1026-OBよりも古い。西側柱の柱間は中央が広い。前述したように、1021-OBと同時に存在した可能性が高い。建物の大半は1987年度の調査時に検出されていたが、東側の側柱は1988年度の擁壁調査時に検出された。年度が異なる調査のため計測値の誤差はやや大きいと思われるが、桁行総長は天平尺の21尺、梁間総長は天平尺の13尺に近い値を示す。6199-OP出土遺物によって、建



土層説明

- 1層：褐色(10YR4/4)シルト。
- 2層：明黄褐色(10YR6/6)シルト。
- 3層：明黄褐色(10YR6/8)シルト。
- 4層：にぶい黄橙色(10YR6/4)シルト。
- 5層：暗褐色(10YR3/4)砂質シルト。
- 6層：褐色(10YR4/6)シルト(地山の粘質土粒を多く含む)。
- 7層：黒色(10YR1.7/1)土(焼土粒・炭化粒を多量に含む)。
- 8層：灰黄褐色(10YR4/2)シルト(焼土粒・炭化粒を多量に含む)。

第41図 1023-OB平面図・土層断面図 (S=1/80)

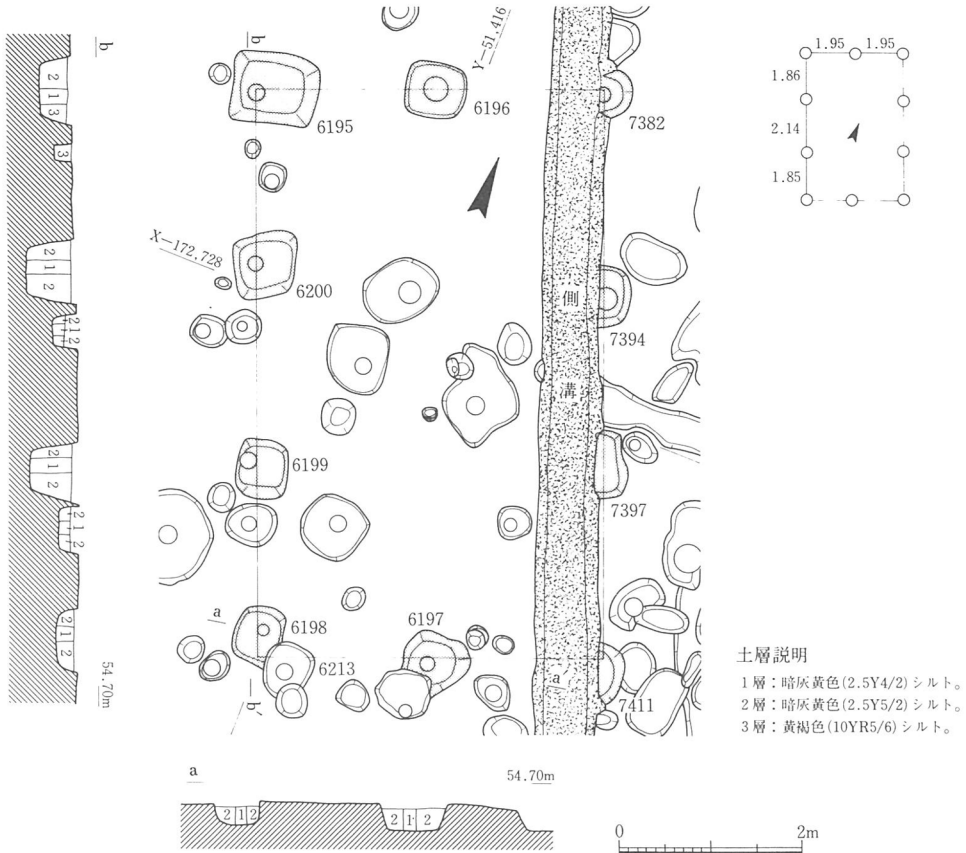
第19表 1023-OB出土遺物計量表

器種・器形	6191-OP		6192-OP		6194-OP		合計	
	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)
須惠器	坏	1(台) 33.0			2 11.6	3 44.6		
	坏蓋				1 3.2	1 3.2		
	甕or壺	2 13.2	1 6.8	2 37.6	5 57.6			
	小計	3 46.2	1 6.8	5 52.4	9 105.4			
土師器	坏	3 8.0	4 9.7		7 17.7			
	甕	10 55.9			10 55.9			
	不明	1 0.2	1 1.9	5 7.0	7 9.1			
	小計	14 64.1	5 11.6	5 7.0	24 82.7			
合計	17 110.3	6 18.4	10 59.4	33 188.1				

物の建てられた時期の上限は7世紀末から8世紀前半と考えられる。

出土遺物（第20表）

6195-OP~6199-OP・7382-OP・7397-OP・7411-OPより第20表に掲げた遺物が出土している。なお、6197-OP出土遺物は須惠器坏Hの蓋頂部破片、また、6198-



第42図 1024-OB平面図・土層断面図 (S=1/80)

OP・6199-OP出土遺物は須恵器坏AⅣの底部破片である。

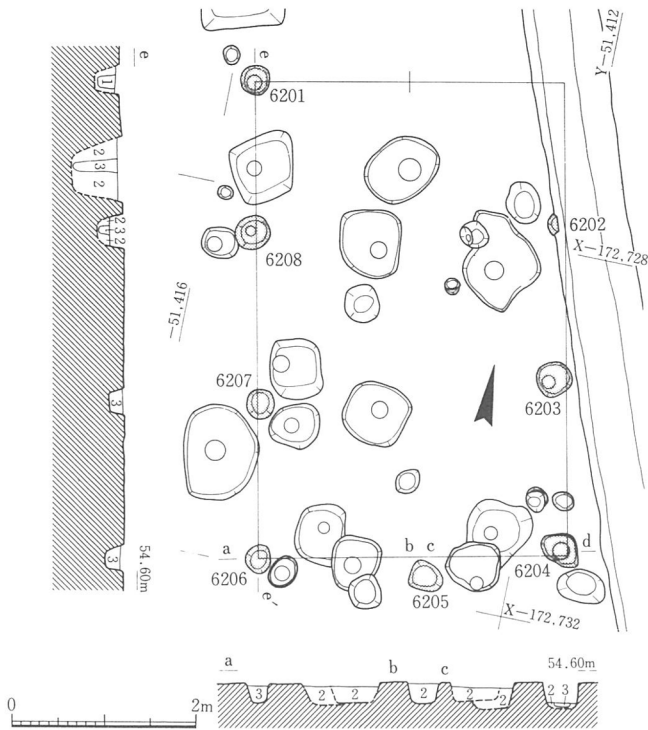
1025-OB (第43図, 図版17, 第5表)

B11GV・HV・HWに位置し、1024-OB・1026-OBと重複する。中心座標はX-172.7290, Y-51.4136である。桁行3間(総長5.26m)・梁間2間(総長3.35m)、床面積17.62㎡の規模を有する南北棟建物で、棟方位はN-12°-Wである。北側の妻の中央の柱は検出されなかった。西側柱の柱間は中央がやや広い。柱掘方は丸く、それらの径は約30cmとやや小さい。東北隅の柱は排水溝掘削時に飛ばしたらしい。梁間総長は、高麗尺・天平尺では切の良い数値を得ることができない。6205-OP出土遺物によって、建物の建てられた時期の上限は8世紀代と考えられる。

出土遺物(第21表)

6204-OP・6205-OP・6206-OPより第21表に掲げた遺物が出土している。なお、

第2節 掘立柱建物（OB）



土層説明

- 1層：黄褐色(10YR5/6)シルト。
- 2層：明黄褐色(10YR6/6)シルト。
- 3層：褐色(10YR4/4)シルト。

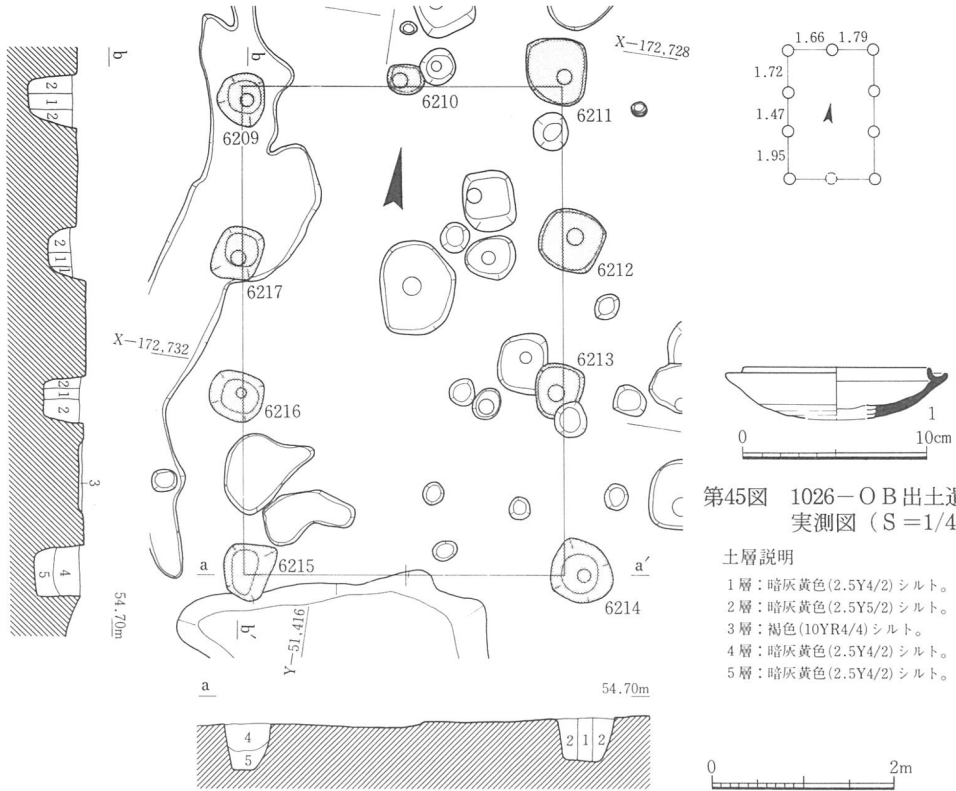
第21表 1025-OB出土遺物計量表
(各OP上段=破片数, 下段=重量g, □=口縁)

器種・器形	土 師 器			合計
	坏	甕	不明	
6204		1	1	2
-OP		6.5	2.0	8.5
6205		1(□)	1	2
-OP		17.3	4.4	21.7
6206	2	1		3
-OP	6.1	2.4		8.5
合 計	2	3	2	7
	6.1	26.2	6.4	38.7

第43図 1025-OB平面図・土層断面図 (S=1/80)

第20表 1024-OB出土遺物計量表 (各OP上段=破片数・下段=重量g, □=口縁)

器種・器形	須 恵 器					土 師 器				合 計
	坏	甕or壺	壺	不明	小計	坏	甕	不明	小計	
6195-OP				1	1	1	1	1	3	4
				4.6	4.6	6.7	8.2	1.9	16.8	21.4
6196-OP		1			1	1	1(□)		2	3
		28.5			28.5	7.6	4.0		11.6	40.1
6197-OP	1				1			1	1	2
	8.0				8.0			0.4	0.4	8.4
6198-OP	1			1	2			1	1	3
	9.2			10.4	19.6			1.9	1.9	21.5
6199-OP	1				1			2	2	3
	16.2				16.2			4.7	4.7	20.9
7382-OP	1(□)				1		1		1	2
	8.3				8.3		7.8		7.8	16.1
7397-OP			2		2	1(□)	4		5	7
			9.0		9.0	16.3	31.4		47.7	56.7
7411-OP							3		3	3
							30.7		30.7	30.7
合 計	4	1	2	2	9	3	10	5	18	27
	41.7	28.5	9.0	15.0	94.2	30.6	82.1	8.9	121.6	215.8



第45図 1026-OB出土遺物
実測図 (S=1/4)

土層説明

- 1層：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト。
- 2層：暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト。
- 3層：褐色(10YR4/4)シルト。
- 4層：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト。
- 5層：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト。

第44図 1026-OB平面図・土層断面図 (S=1/80)

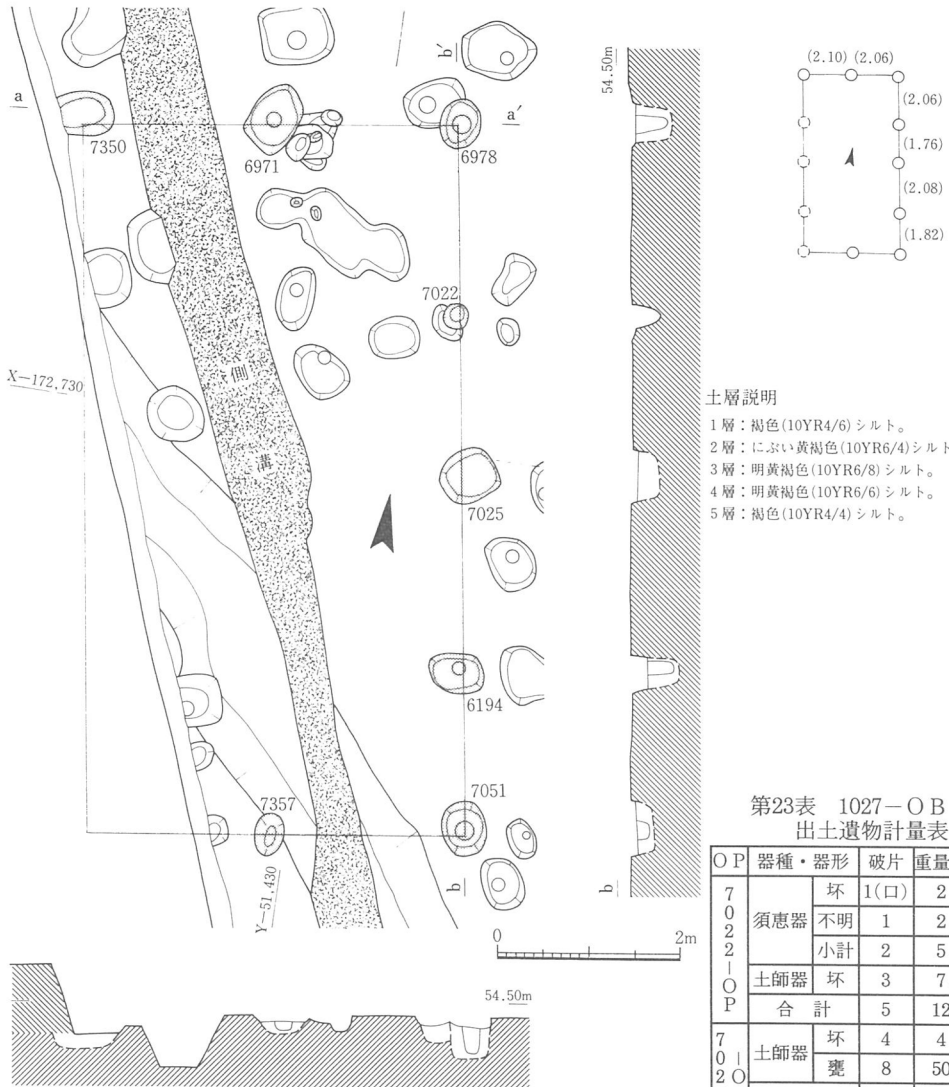
第22表 1026-OB出土遺物計量表

器種・器形	6210-OP		6211-OP		6215-OP		6216-OP		合計	
	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)
須恵器	坏				1	10.7	2(口2)	9.8	3	20.5
	甕or壺						3	58.9	3	58.9
	壺				1	7.9	1	11.6	2	19.5
	小計				2	18.6	6	80.3	8	98.9
土師器	坏						7	16.9	7	16.9
	甕	1	3.3			2	21.5		3	24.8
	不明	3	6.5	1	0.7		1	1.1	5	8.3
	小計	4	9.8	1	0.7	2	21.5	8	18.0	15
合計	4	9.8	1	0.7	4	40.1	14	98.3	23	148.9

6205-OP出土の土師器甕口縁部破片は8世紀代の特徴を示している。

1026-OB (第44図, 図版18, 第5表)

B11HU・HV・IU・IVに位置し、1024-OB・1025-OB・5060-OX・5073-
OXと重複する。中心座標はX-172.7314, Y-51.4154である。桁行3間(総長5.31m)・



土層説明

- 1層：褐色(10YR4/6)シルト。
- 2層：にぶい黄褐色(10YR6/4)シルト。
- 3層：明黄褐色(10YR6/8)シルト。
- 4層：明黄褐色(10YR6/6)シルト。
- 5層：褐色(10YR4/4)シルト。

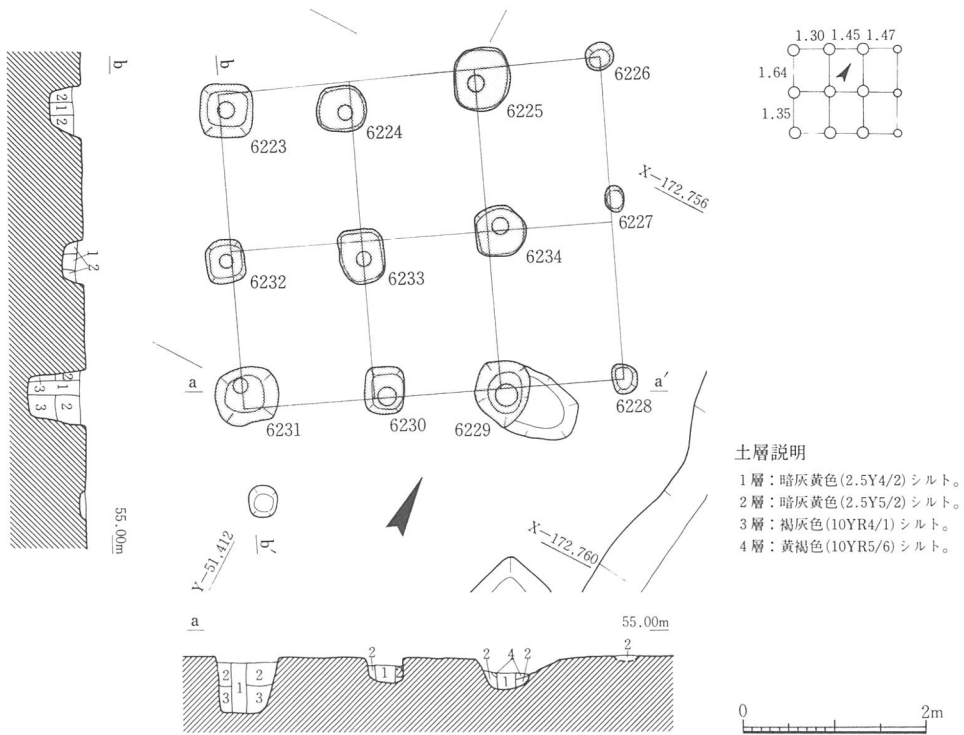
第23表 1027-OB
出土遺物計量表

OP	器種・器形	破片	重量(g)
7022-OB	須恵器	坏 1(口)	2.7
		不明	1 2.6
		小計	2 5.3
	土師器	坏	3 7.2
合計		5	12.5
7025-OB	土師器	坏	4 4.9
		甕	8 50.3
合計		12	55.2
総計		17	67.7

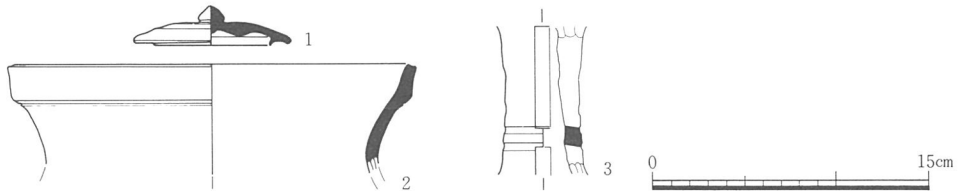
第46図 1027-OB平面図・土層断面図 (S=1/80)

梁間2間（総長3.70m）、床面積19.65㎡の規模を有する南北棟建物で、棟方位はN-8°-Wである。前述したように、1024-OBよりも新しい。また、6209-OP・6217-OPは5060-OXの覆土を除去した時点で検出されているので、それよりは古い。南側の妻の中央の柱は5073-OXによって破壊されたためか、検出できなかった。6215-OPでは、明確な抜き取り穴を確認できなかったものの柱痕跡が検出されなかったので、柱は抜き取られたものと理解しておきたい。桁行総長は高麗尺の15尺または天平尺の18尺、梁間は高

第IV章 調査成果



第47図 1028-O B平面図・土層断面図 (S=1/80)



第48図 1028-O B出土遺物実測図 (S=1/4)

第24表 1028-O B出土遺物計量表

器種・器形	6225-O P		6229-O P		6230-O P		6231-O P		6232-O P		6233-O P		合計		
	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)	
須恵器	坏		1	2.7					1(口)	4.8			2	7.5	
	坏蓋				2	7.5							2	7.5	
	甕or壺	1	3.8			38	175.6	4	32.9	3	31.7	8	76.1	54	320.1
	鉢	1	5.2										1	5.2	
	不明			1	2.6								1	2.6	
小計	2	9.0	2	5.3	40	183.1	4	32.9	4	36.5	8	76.1	60	342.9	
土師器・不明											1	2.1	1	2.1	
須or土師器・不明					1	14.2							1	14.2	
合計	2	9.0	2	5.3	41	197.3	4	32.9	4	36.5	9	78.2	62	359.2	

麗尺の10尺または天平尺の12.5尺に近い値を示す。6216-OP出土遺物によって、建物の建てられた時期の上限は8世紀代と考えられる。

出土遺物（第45図，第22・80表）

第45図1に図示した遺物の他に、6210-OP・6211-OP・6215-OP・6216-OPより第22表に掲げた遺物が出土している。

第45図1は6211-OP遺構検出面直下より出土した。また、6216-OP埋土より須恵器坏AⅣまたは坏Bの口縁部破片が出土している。

1027-OB（第46図，第5表）

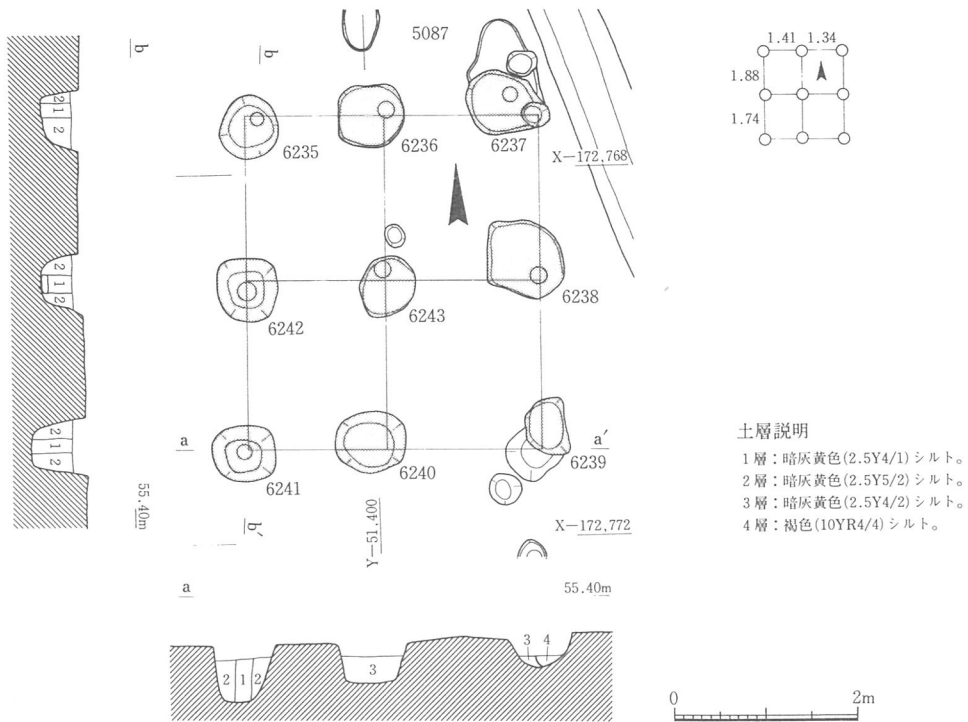
B11GQ・GR・HQ・HR・IQ・IRに位置し、1023-OB・3033-OS・5041-OXと重複する。中心座標はX-172.7306，Y-51.4307である。桁行4間（総長7.72m）・梁間2間（総長4.16m）、床面積32.12㎡の規模を有する南北棟建物で、棟方位はN-8°-Wである。1987年度の調査時には建物という認識はなかったが、1988年度の擁壁調査の成果と合成することによって、上記のような規模を持つ建物であることが判明した。したがって、1987年度の調査時には柱穴の截ち割りは行っておらず、平面で確認された柱痕跡が柱の正確な位置を示しているとは限らない。7357-OPと3033-OSの重複関係から、この建物の方が新しい。また、柱掘方はすべて5041-OXの覆土に覆われていた。6194-OPは1023-OBと柱穴を共有する。年度が異なる調査のため計測値の誤差はやや大きいと思われるが、桁行の総長は天平尺の26尺、梁間の総長は天平尺の14尺に近い値を示す。3033-OSは7世紀代、5041-OXの上限は8世紀後半であるので、この建物の建てられた時期は8世紀代におさまるものと思われる。

出土遺物（第23表）

7022-OP・7025-OPより第23表に掲げた遺物が出土している。

1028-OB（第47図，図版19，第5表）

B11NV・NW・OV・OW・PV・PWに位置し、中心座標はX-172.7580，Y-51.4123である。桁行2間（総長3.37m）・梁間2間（総長2.84m）の総柱建物で、主屋の東側に1間分の縁台が取り付く。縁台まで含めた床面積は13.88㎡である。棟方位はN-58°-Eである。3033-OSが二股に分かれる地点の北側に、西側の溝（3033-a-OS）と棟筋を合わせる形で建てられている。縁台を支える柱穴は柱掘方の径が15cm前後と小さい。柱の並びはややバラツキが大きい。桁行の総長は高麗尺の9尺、梁間の総長は高麗尺の8尺に近い値を示す。柱掘方出土遺物、および、柱間が高麗尺によって設定されている



第49図 1029-O B平面図・土層断面図 (S=1/80)

第25表 1029-O B出土遺物計量表 (各OP上段=破片数, 下段=重量g)

器種・器形	須 恵 器					土 師 器				土師質	瓦器	陶磁器	合 計
	坏	甕	壺	壺蓋	小計	坏	甕	不明	小計	不明	塊	塊?	
6235-O P		1			1								1
		8.7			8.7								8.7
6237-O P	20		18	1	39	25	10	12	47	6	4	1	97
	93.8		405.3	12.1	511.2	72.5	81.0	4.1	157.6	66.3	9.9	15.4	760.4
6240-O P			1		1								1
			12.8		12.8								12.8
合 計	20	1	19	1	41	25	10	12	47	6	4	1	99
	93.8	8.7	418.1	12.1	532.7	72.5	81.0	4.1	157.6	66.3	9.9	15.4	781.9

可能性が高いことなどから、建物の建てられた時期の上限は7世紀前半と考えられる。

出土遺物 (第48図, 図版42, 第24・81表)

第48図1~3に図示した遺物の他に、6225-O P・6229-O P・6230-O P・6231-O P・6232-O P・6233-O Pより第24表に掲げた遺物が出土している。

第48図1 (図版42) は6229-O Pより出土した。2の破片は主に6231-O Pより出土したが、同一個体と思われる破片が6230-O P・6233-O P等からも出土している。3は

6233-OPより出土した。

1029-OB（第49図，図版20，第5表）

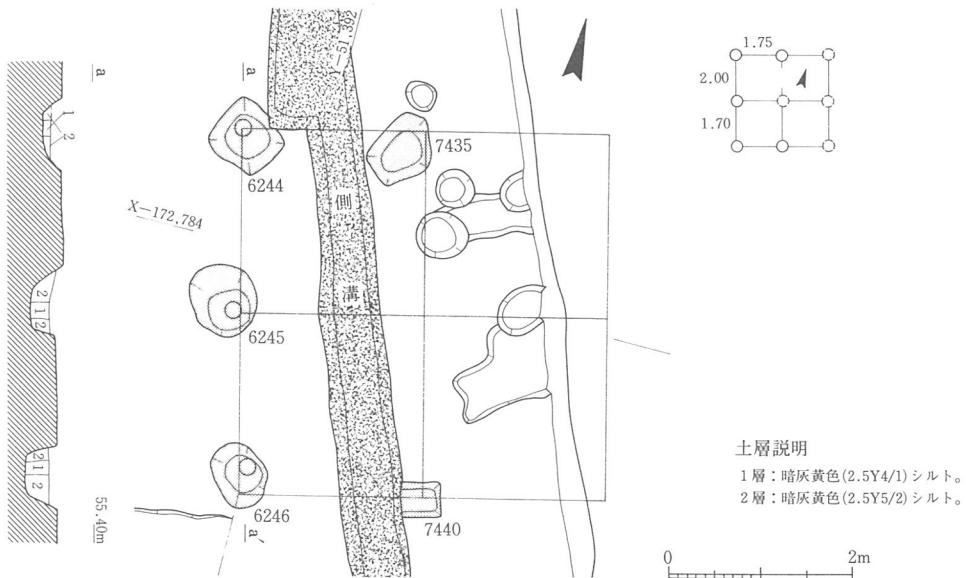
B11QY・RY・B12QA・RAに位置し、中心座標はX-172.7692，Y-51.3998である。南北棟建物とすれば、桁行2間（総長3.63m）・梁間2間（総長3.19m）、床面積11.58㎡の規模を有する総柱建物で、棟方位はN-2°-Eである。3033-OSが二股に分かれる地点の東側に、東側の溝（3033-b-OS）と棟筋を合わせる形で建てられている。柱の並びはややばらつく。桁行の総長は高麗尺の10尺～10.25尺、梁間の総長は高麗尺の9尺に近い値を示す。6237-OP出土の須恵器壺蓋片によって、建物の建てられた時期の上限は7世紀後半以降と考えられる。

出土遺物（第25表）

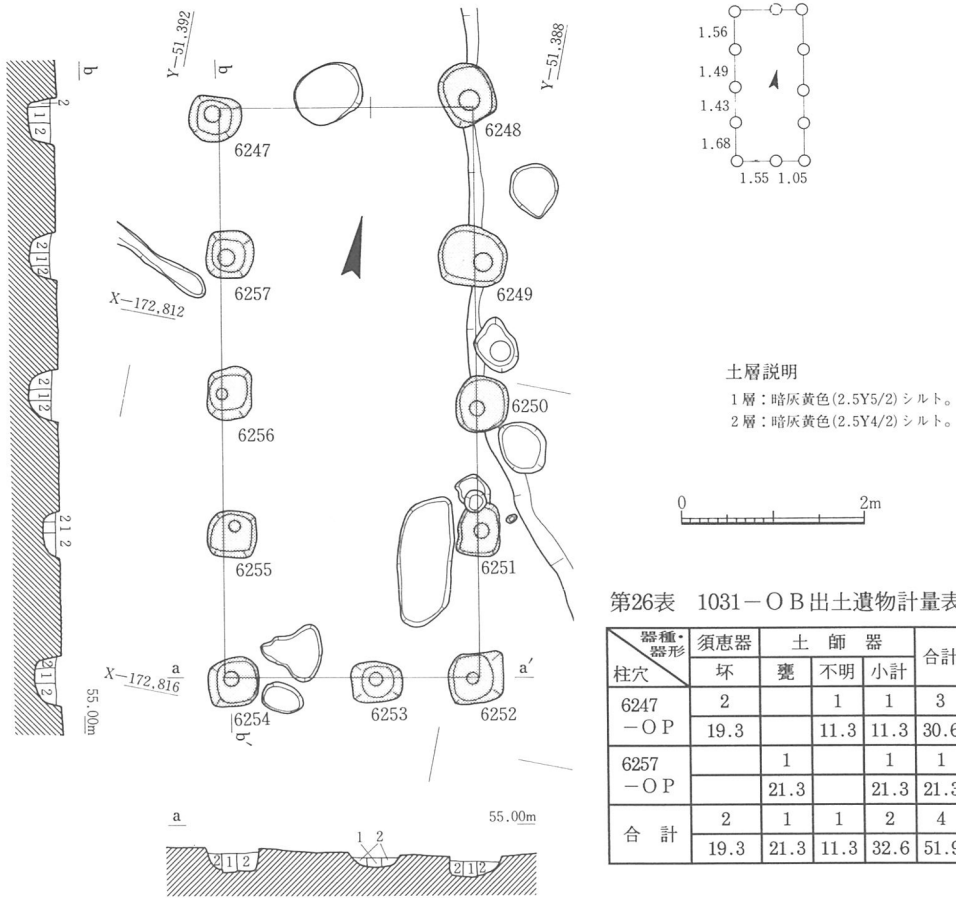
6235-OP・6237-OP・6240-OPより第25表に掲げた遺物が出土している。6237-OP柱掘方埋土中の土師質土器片・瓦器破片・陶磁器片は、5087-OXの遺物の混入と考えられる。なお、6237-OP出土の須恵器壺蓋片は、3033-OS擁壁調査の際に出土した一括遺物と同一型式（第126図267）と思われる。

1030-OB（第50図，図版20，第5表）

B12UB・UC・VB・VCに位置する。建物の東側の一部が調査区外にあるため規模等は明らかではないが、桁行2間（3.75m）・梁間2間の総柱建物と思われる。西側の側



第50図 1030-OB平面図・土層断面図（S=1/80）

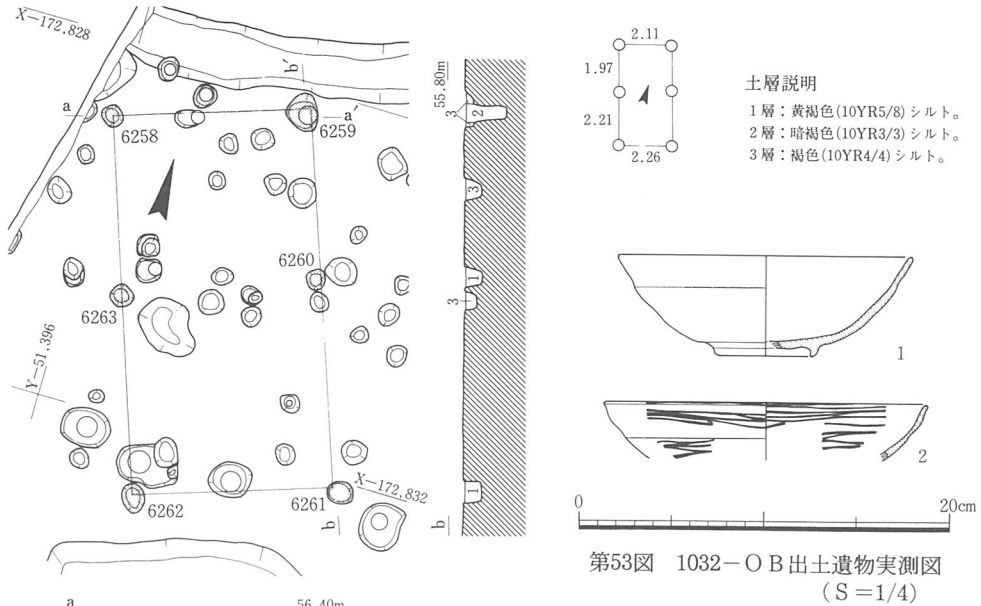


第51図 1031-OB平面図・土層断面図 (S=1/80)

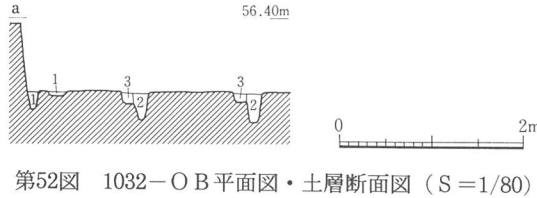
柱から推定した棟方位は、N-13°-Wである。1987年度の調査時に西側の側柱が検出された。1988年度の擁壁調査において妻の中央の柱を検出した。1987年度の調査時に、調査区断面に建物中央の柱掘方を確認できたため総柱建物と想定したが、1988年度の擁壁調査において地山面まで一気に機械掘削をした際、誤って掘り過ぎてしまったため中央の柱掘方は消失してしまった。桁行の総長は高麗尺の10.5尺または天平尺の12.5尺に近い値を示す。柱掘方埋土中に遺物が含まれていないため帰属時期を断定することはできないが、1029-OBとの時期差はそれほどないものと思われる。

1031-OB (第51図, 図版21, 第5表)

B17CC・DC・DD・ECに位置する南北棟建物で、中心座標はX-172.8125, Y-51.3896である。桁行4間(総長6.19m)・梁間2間(総長2.76m)、床面積17.08m²の規模



第53図 1032-OB出土遺物実測図 (S=1/4)



第52図 1032-OB平面図・土層断面図 (S=1/80)

第27表 1032-OB出土遺物計量表

器種・器形	土師器	瓦器	土師質	合計
	坏	埴	不明	
6258-OP	12	4(口1)	2	18
	26.3	7.4	30.6	64.3

を有し、棟方位はN-11°-Wである。側柱の柱間には大きなバラツキはないが、南側の妻の中央の柱は偏った位置にある。北側の妻の中央の柱は検出されなかった。桁行総長は高麗尺の17.5尺または天平尺の21尺、梁間高麗尺の8尺または天平尺の9.5尺に近い値を示す。柱掘方出土遺物では建物の建てられた時期を推定することは難しいが、桁行が3033-OSと平行することから3033-OSを意識して建てられた可能性があり、7世紀代には存在していたものと思われる。

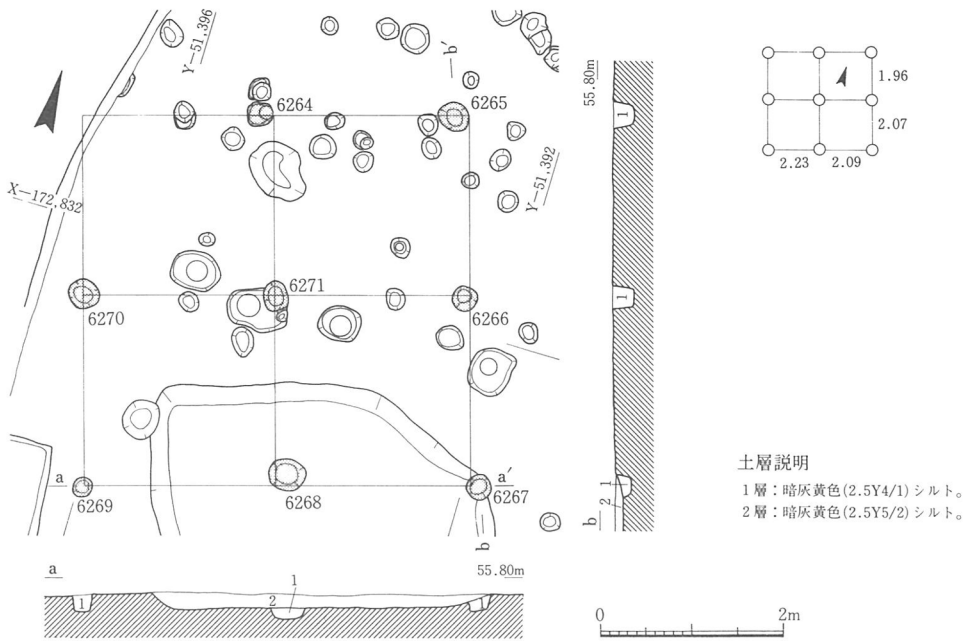
出土遺物（第26表）

6247-OP・6257-OPより第26表に掲げた遺物が出土している。

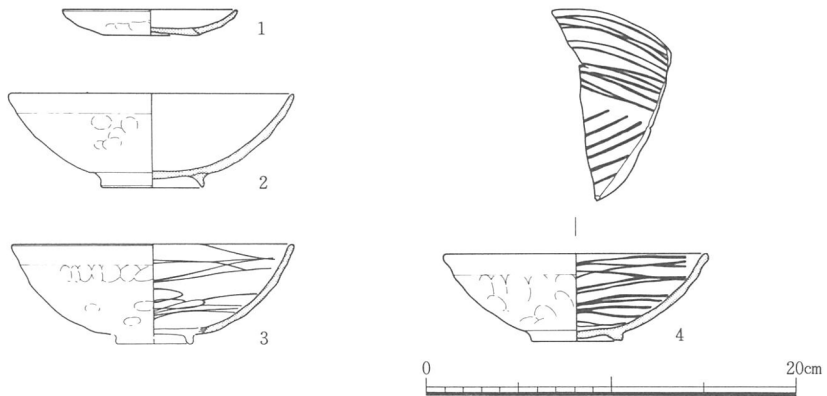
1032-OB（第52図，図版21，第5表）

B17HA・HB・IBに位置し、1033-OB・1034-OBと重複する。中心座標はX-172.8055，Y-51.3944である。桁行2間（総長4.13m）・梁間1間（総長2.16m）、床面積8.92m²の規模を有する南北棟建物で、棟方位はN-18°-Wである。柱掘方は15cm前後とやや小振りである。柱間総長は、高麗尺・天平尺では切の良い数値を得ることができな

第IV章 調査成果



第54図 1033-OB平面図・土層断面図 (S=1/80)



第55図 1033-OB出土遺物実測図 (S=1/4)

い。柱掘方出土遺物から建物が建てられた時期は、12世紀中葉から後半と考えられる。

出土遺物 (第53図, 図版42, 第27・82表)

第53図1・2に図示した遺物の他に、6258-OPより第27表に掲げた遺物が出土している。

第53図1 (図版42)は6263-OP、2は6258-OPから出土した。1は柱掘方埋土の下の方から出土し、なおかつ残存率が高いことから、この建物の建てられた時期の上限を示

第28表 1033-OB出土遺物計量表

器種・器形		6265-OP		6266-OP		6267-OP		6269-OP		合計	
		破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)
須恵器	坏	2(口1)	3.8							2	3.8
	甕or壺			1	10.1					1	10.1
	小計	2	3.8	1	10.1					3	13.9
土師器	坏			2(口2)	9.7					2	9.7
	皿	2(口1)	9.6							2	9.6
	不明					1	1.4	2	3.0	3	4.4
	小計	2	9.6	2	9.7	1	1.4	2	3.0	7	23.7
瓦器	碗	2(口2)	8.2	5(口1)	22.7	1	1.1	4(口3)	43.7	12	75.7
合計		6	21.6	8	42.5	2	2.5	6	46.7	22	113.3

す遺物と思われる。

1033-OB（第54図，図版21，第5表）

B17HA・HB・IA・IB・ICに位置し、1032-OB・1034-OB・5105-OXと重複する。中心座標はX-172.8323，Y-51.3945である。東西棟建物とすれば、桁行2間（総長4.20m）・梁間2間（総長4.04m）、床面積16.97㎡の規模を有する総柱建物で、棟方位はN-72°-Eである。柱掘方は15cm前後とやや小振りである。柱間総長は、高麗尺・天平尺では切の良い数値を得ることができない。

柱掘方出土遺物から建物が建てられた時期は、12世紀中葉から後半と考えられる。

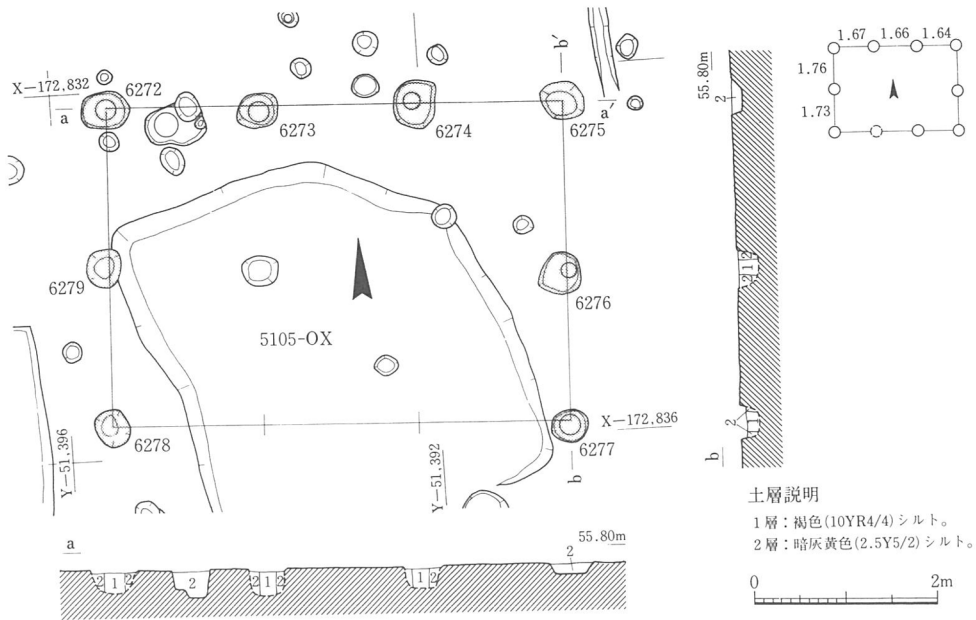
出土遺物（第55図，図版42，第28・83表）

第55図1～4に図示した遺物の他に、6265-OP・6266-OP・6267-OP・6269-OPより第28表に掲げた遺物が出土している。

第55図1（図版42）は6269-OP、2（図版42）は6265-OP、3は6266-OP、4は6269-OPから出土した。いずれも柱掘方埋土の下の方から出土し、なおかつ残存率が高いことから、この建物の建てられた時期の上限を示す遺物と思われる。

1034-OB（第56図，図版21，第5表）

B17IB・IC・JCに位置し、1032-OB・1033-OB・5105-OXと重複する。中心座標はX-172.8340，Y-51.3930である。桁行3間（総長5.04m）・梁間2間（総長3.54m）、床面積17.84㎡の規模を有する東西棟建物で、棟方位はN-87°-Eである。南側の側柱は5105-OXによって削平されてしまっているが、残存する柱間は桁行・梁間ともほぼ等間である。桁行総長は高麗尺の14尺または天平尺の17尺、梁間総長は高麗尺の10尺または天平尺の12尺に近い値を示す。重複する1032-OB・1033-OB柱掘方埋土には瓦器碗片が含まれているのに対して、この建物の柱掘方にはそれが含まれていないことと、



第56図 1034-OB平面図・土層断面図 (S=1/80)

第29表 1034-OB出土遺物計量表

器種・器形	6275-OP		6277-OP		合計	
	破片	重量(g)	破片	重量(g)	破片	重量(g)
須恵器 横瓶?	1	5.2			1	5.2
土師器 甕			1	10.5	1	10.5
合計	1	5.2	1	10.5	2	15.7

6275-OP・6277-OPの埋土に含まれていた遺物を勘案するならば、建物の建てられた時期の上限は8世紀代と考えられる。

出土遺物 (第29表)

6275-OP・6277-OPより第29表に掲げた遺物が出土している。いずれも小片のため厳密な時期決定はできないが、8世紀代の所産とみて大過ないものと思われる。

第3節 土坑 (〇〇)

概要

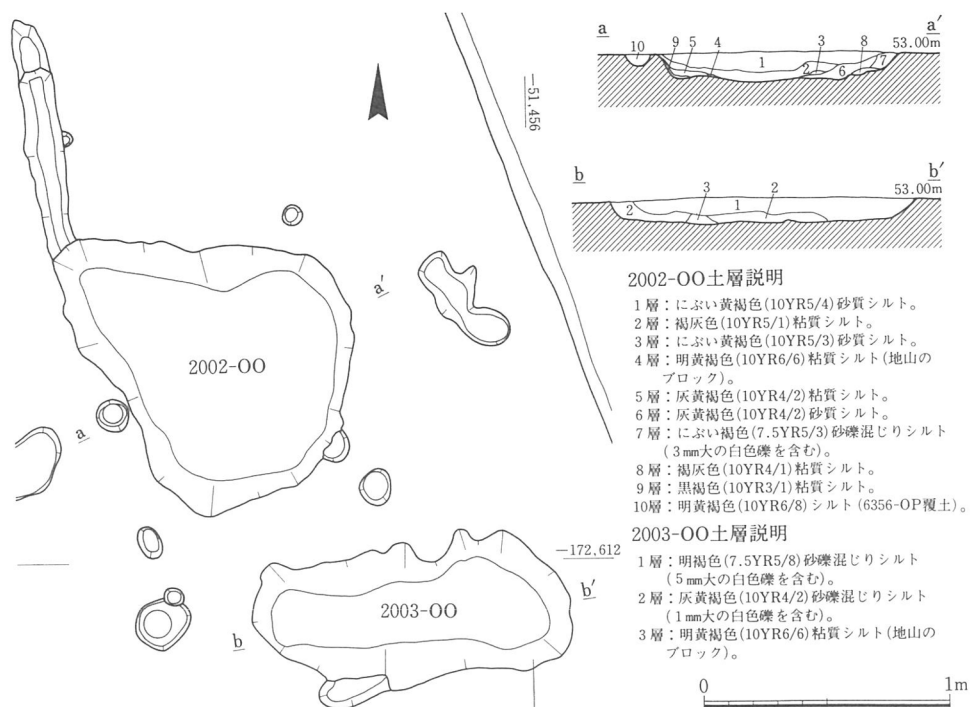
検出された土坑の総数は32基である。このうち覆土ないし床面より遺物が出土し、ある程度時期を推定できるものは14基であった(第30表)。A地区で検出された9基の土坑のうち時期の推定できる5基は、いずれも8世紀代のものと考えられる。また、B地区で検出された19基の土坑のうち時期の推定できる9基は、いずれも6世紀後半から7世紀代のものと考えられる。したがって、土坑の時期による分布の偏りと掘立柱建物の変遷(第187・188図)とは一致するようである。

第30表 土坑一覧表

遺構No.	旧No.	地区名	座標値(km)	平面形	規模	時期	出土遺物
2001	1264	B06CG	東端 X-172.6078 Y- 51.4734	不整形	長軸 2.10m以上 短軸 2.40m?	7世紀前半 以前?	
2002	1003	B06CK	中心 X-172.6104 Y- 51.4586	不整形	長軸 1.08m 短軸 1.08m	7世紀前半 以降	第58図1~4 第31表
2003	1004	B06CK・D K・DL	中心 X-172.6124 Y- 51.4570	不整形	長軸 2.55m 短軸 1.16m	7世紀前半 以降	第58図5 第32表
2004	1058	B06GM	中心 X-172.6255 Y- 51.4510	楕円形	長軸 1.30m 短軸 0.40m	不明	
2005	1278	B06HH	東端 X-172.6290 Y- 51.4677	隅円方形? ?	1辺 1.80m以上	不明	
2006	1026	B06HK	中心 X-172.6296 Y- 51.4588	不整形	長軸 1.15m 短軸 0.45m	6世紀末~ 7世紀初頭	第60図
2007	1704	B06NJ・NK	東北角 X-172.6535 Y- 51.4588	隅円方形? ?	1辺 2.0 m以上	不明	
2008	1695	B06OK・OL ・PK・PL	検出範囲 X-172.6612 囲中心 Y- 51.4552	方形?	長軸 2.67m以上 短軸 3.25m	6世紀末~ 7世紀初頭	第61図
2009	1679	B06PL・QL・ QM・RL・RM	西端 X-172.6674 Y- 51.4540	不整形 方形?	径7.5 m?	7世紀前半 以降	第64図1・2 第33表
2010	1658	B06SM・ SN・TM	西端 X-172.6751 Y- 51.4506	不整形長 方形	長軸 2.74m以上 短軸 2.54m	7世紀後半 以前	第66図3 第34表
2011	1657	B06SM・ SN	西端 X-172.6754 Y- 51.4492	長方形 ?	長軸 1.50m以上 短軸 1.25m	7世紀後半 以前	第66図1 第35表
2012	1790	B11UO	中心 X-172.6822 Y- 51.4413	隅円長 方形	長軸 2.17m 短軸 1.07m	6世紀後半	第68・69図1・2 第37表
2013	1576	B06UR・ VR	中心 X-172.6841 Y- 51.4315	長楕円 形	長軸 1.88m 短軸 0.56m	7世紀前半	第71図1・2 第38表
2014	1556	B06VR	中心 X-172.6869 Y- 51.4304	長楕円 形	長軸 2.20m 短軸 0.70m	不明	
2015	1794	B06WO・ XO	中心 X-172.6921 Y- 51.4431	楕円形	長軸 1.10m 短軸 0.81m	6世紀末~ 7世紀初頭	第72図1・2 第74図 第39表, 鉄滓134.4g

第IV章 調査成果

遺構No.	旧No.	地区名	座標値(km)	平面形	規模	時期	出土遺物
2016	—	B06XN	東北角 X-172.6920 Y-51.4445	不明	不明	不明	
2017	1773	B06XO	中心 X-172.6924 Y-51.4428	不整形	長軸 2.59m 短軸 1.70m	6世紀後半 ~7世紀初頭	第76図1 第40表
2018	1437	B06XO	東南角 X-172.6928 Y-51.4415	楕円形 ?	長軸 1.20m 短軸 0.20m以上	不明	
2019	1804	B11DP・ DQ	東端 X-172.7109 Y-51.4370	楕円形	長軸 3.00m 短軸 2.00m	不明	
2020	386	B11HR・HS	中心 X-172.7289 Y-51.4276	隅丸方形	長軸 1.10m 短軸 0.62m	8世紀後半以前	
2021	382	B11GT・GU・ HT・HU	中心 X-172.7286 Y-51.4201	楕円形	長軸 1.87m 短軸 1.05m	8世紀後半以前	
2022	122	B11HU	中心 X-172.7302 Y-51.4191	隅円方形	長軸 1.32m 短軸 1.03m	8世紀中葉	第78図1~9 第41・72表
2023	224	B11KT	中心 X-172.7419 Y-51.4225	不整形 円形	径 0.86m	8世紀中葉	第80図1~5 第42・72表
2024	77	B12TB	西北角 X-172.7776 Y-51.3955	不整形 円形?	径 2.10m?	8世紀	第81図1 第43表
2025	314	B12YC	中心 X-172.7992 Y-51.3894	円形	径 1.05m	不明	
2026	630	B17EE・EF	南端 X-172.8186 Y-51.3800	不整形 円形?	径 1.80m	不明	
2027	1376	B11AS	中心 X-172.7022 Y-51.4267	楕円形 ?	長軸 0.74m 短軸 0.40m	8世紀後半以前	須恵器 3.4g
2028	371	B11GU	中心 X-172.7234 Y-51.4195	不整形	長軸 0.750m 短軸 0.650m	8世紀後半以前	須恵器・土師器, 計16.4g
2029	600	B11MT	東端 X-172.7493 Y-51.4223	不整形 長円形	長軸 1.25m以上 短軸 1.70m	不明	
2030	2004	B11NT	西端 X-172.7520 Y-51.4238	楕円形 ?	長軸 1.20m以上 短軸 0.80m以上	不明	
2031	—			隅円方形 ?		不明	
2032	—			不整形 円形?		不明	



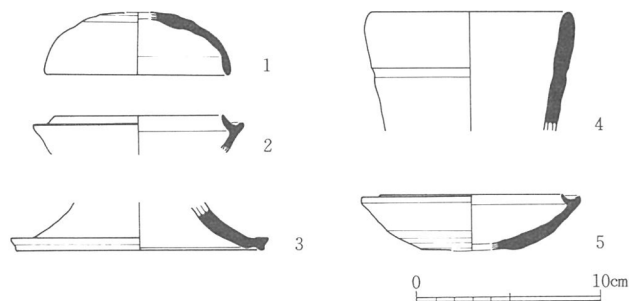
2002-〇〇土層説明

- 1層：にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質シルト。
- 2層：褐灰色(10YR5/1)粘質シルト。
- 3層：にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質シルト。
- 4層：明黄褐色(10YR6/6)粘質シルト(地山のブロック)。
- 5層：灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト。
- 6層：灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト。
- 7層：にぶい褐色(7.5YR5/3)砂礫混じりシルト(3mm大の白色礫を含む)。
- 8層：褐灰色(10YR4/1)粘質シルト。
- 9層：黒褐色(10YR3/1)粘質シルト。
- 10層：明黄褐色(10YR6/8)シルト(6356-OP覆土)。

2003-〇〇土層説明

- 1層：明褐色(7.5YR5/8)砂礫混じりシルト(5mm大の白色礫を含む)。
- 2層：灰黄褐色(10YR4/2)砂礫混じりシルト(1mm大の白色礫を含む)。
- 3層：明黄褐色(10YR6/6)粘質シルト(地山のブロック)。

第57図 2002・2003-〇〇平面図・土層断面図 (S=1/30)



第58図 2002・2003-〇〇出土遺物実測図 (S=1/4)
(1~4:2002-〇〇, 5:2003-〇〇)

第31表 2002-〇〇出土遺物計量表

須恵器	坏	13	71.8g
	甕or壺	5	60.9g
	小計	18	132.7g
土師器	不明	3	3.9g
合計		21	136.6g

第32表 2003-〇〇出土遺物計量表

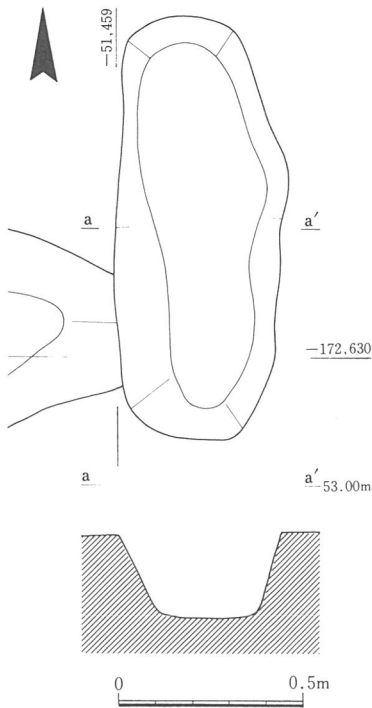
須恵器	坏	4	12.9g
	高坏	1(脚)	38.1g
	小計	5	51.0g
土師器	不明	1	4.8g
合計		6	55.8g

2002-〇〇 (第57図, 第30表)

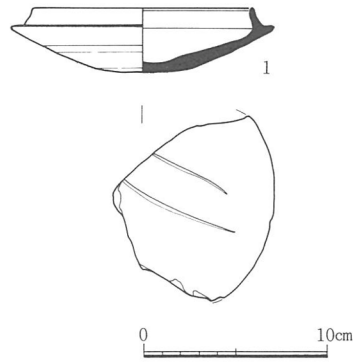
B06CKに位置し、3003-〇Sと重複する。中心座標はX-172.6104・Y-51.4586である。長軸・短軸とも1.08mの不整形土坑で、遺構検出面からの深さは0.27mを測る。覆土は9層からなる。出土遺物から土坑の時期の上限は7世紀代と考えられる。

出土遺物 (第58図, 図版42, 第31・84表)

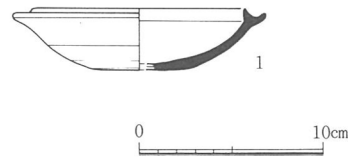
覆土中より第58図1~4に図示した遺物の他に、第31表に掲げた遺物が出土した。遺物



第60図 2006-〇〇出土遺物実測図 (S=1/4)



第61図 2008-〇〇出土遺物実測図 (S=1/4)



第59図 2006-〇〇平面図・断面図 (S=1/20)

はいずれも小破片であった。

2003-〇〇 (第57図, 第30表)

B06CK・DK・DLに位置し、中心座標はX-172.6124・Y-51.4570である。長軸2.55m・短軸1.16mの不整形土坑で、遺構検出面からの深さは0.20mを測る。覆土は3層からなる。出土遺物から土坑の時期の上限は7世紀代と考えられる。

出土遺物 (第58図, 図版42, 第32・85表)

覆土中より、第58図5・第32表に掲げた遺物が出土した。

2006-〇〇 (第59図, 第30表)

B06HKに位置し、3007-〇Sと重複する。中心座標はX-172.6296・Y-51.4588である。長軸1.15m・短軸0.45mの不整形土坑で、遺構検出面からの深さは0.24mを測る。主軸方向はN-0°-Eである。3007-〇Sとの重複関係は、土坑の方が新しい。しかし、両者の覆土から出土している遺物にはそれほど大きな時間差はない。覆土は1層からなる。出土遺物から土坑の時期は6世紀末から7世紀初頭と考えられる。

出土遺物 (第60図, 図版42, 第86表)

覆土中より、第60図1に示した遺物が出土した。底部外面に二条の沈線から成るヘラ記

号が刻まれている。

2008-〇〇（第62図，第30表）

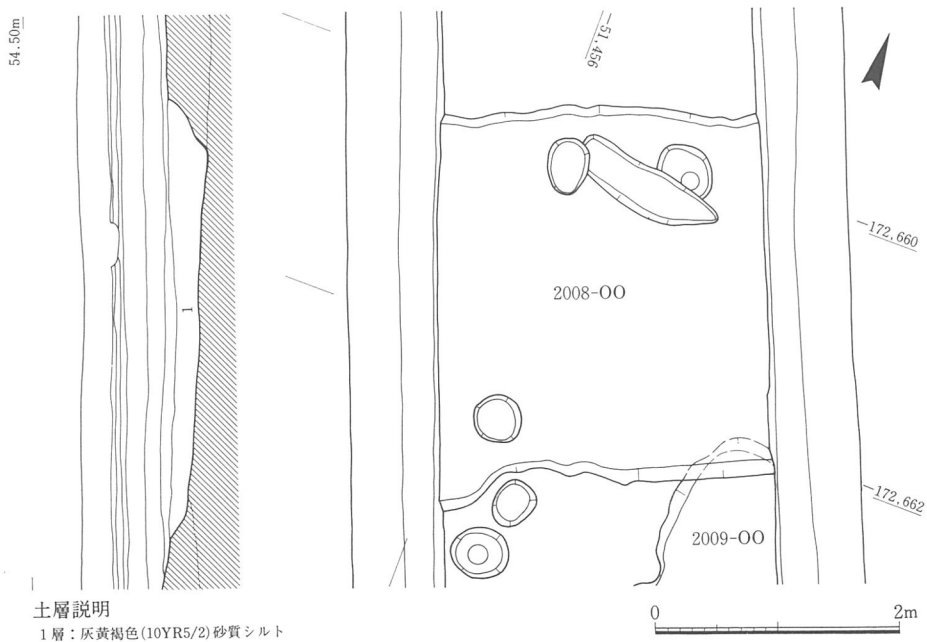
B06P Lに位置し、検出範囲内における中心座標はX-172.6612・Y-51.4552である。検出状況では長軸2.67m、短軸3.25mの方形状を呈するが、その東西は調査区外に延びている。溝の可能性も考慮されるが、深さが0.20mと浅いことから土坑として報告する。覆土は灰黄褐色（10YR2/5）シルトである。土坑は、2009-〇〇と一部重複するが、検出状況から2009-〇〇に先行することが確認されている。出土遺物から土坑の時期は6世紀末から7世紀初頭と考えられる。

出土遺物（第61図，図版42，第87表）

第61図1の須恵器坏身1点が、遺構の南辺西寄りの覆土中から口縁部を上に向けた状態で出土した。（虎間）

2009-〇〇（第63図，図版10，第30表）

B06P L・Q L・Q M・R L・R Mに位置し、2008-〇〇・3008-〇Sと重複する。西北端の座標はX-172.6674・Y-51.4540である。今回の調査ではその一部を検出したに



第62図 2008-〇〇平面図・土層断面図（S=1/60）